

一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡

発掘調査報告書 V

— 狐塚遺跡・法勝寺遺跡 —

1988

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会



一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡

発掘調査報告書 V

— 狐塚遺跡・法勝寺遺跡 —

1988

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりこんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代の生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに一般国道8号（長浜バイパス）建設工事に伴う事前発掘調査の概要を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

例 言

1. 本書は、建設省の実施する一般国道8号長浜バイパス工事に伴う関連遺跡の発掘調査報告書で、共用されている長浜市内についてはすでに昭和46～47年度に現地調査を実施し、報告書も刊行済みであり（I～III）、また、昨年度は今回調査分（昭和57～59年度）の報告書としてIVを刊行しており、本書はこれらを含めてVとする。
2. 本調査は、建設省近畿地方建設局国道工事事務所からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり実施した。
3. 現地調査は、昭和57～59年度に実施し、昭和60年度以降にその整理作業を実施している。調査対象となったのは、滋賀県坂田郡近江町内の西火打遺跡・奥松戸遺跡・法勝寺遺跡・狐塚遺跡の4遺跡であり、そのうち本書では、狐塚遺跡の奈良～平安時代の遺構・遺物、法勝寺遺跡の遺構・遺物について取り扱い、奥松戸遺跡についてはおいて報告の予定である。
4. 本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会

(財) 滋賀県文化財保護協会

昭和57年度

文化財保護課長	外池忠雄	理事長	和田純一
課長補佐	藤本英策	事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財係長	丸山竜平	総務課主事	松本輔弘
技師	山中勝弘	〃	泉 良子
管理係主事	将亦富士夫		

昭和58年度

文化財保護課長	外池忠雄	理事長代理	辻 清
課長補佐	松浦光彦	事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財係長	丸山竜平	調査課長	林 博通
技師	山中勝弘	技師	吉田秀則
管理係主事	小谷 清	囑託	中井 均
			(現、米原町教育委員会)
		〃	角上寿行
			(現、近江八幡市教育委員会)
		総務課主事	松本輔弘
		〃	泉 良子

昭和59年度

文化財保護課長	市原 浩	理事長	南 光雄
課長補佐	松浦光彦	事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財係長	丸山竜平	調査課長	林 博通
技師	用山政晴	技師	吉田秀則
管理係主事	小谷 清	総務課主事	松本暢弘
		"	泉 良了

昭和60年度

文化財保護課長	市原 浩	理事長	南 光雄
課長補佐	中正輝彦	事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財係長	林 博通	埋蔵文化財課長	近藤 滋
技師	用山政晴	調査二係長	田中勝弘
管理係主事	山本徳樹	調査二係技師	吉田秀則
		総務課長	山下 弘
		主事	松本暢弘
		嘱託	中谷サカエ

昭和61年度

文化財保護課長	服部 正	理事長	南 光雄
課長補佐	日口宇一郎	事務局長	中島良一
埋蔵文化財係長	林 博通	埋蔵文化財課長	近藤 滋
主任技師	用山政晴	調査二係長	大橋信弥
管理係主任主事	山本徳樹	調査一係技師	吉田秀則
		総務課長	山下 弘
		主任主事	松本暢弘
		嘱託	中谷サカエ

昭和62年度

文化財保護課長	服部 正	理事長	吉崎貞一
課長補佐	田口宇一郎	事務局長	中島良一
埋蔵文化財係長	林 博通	埋蔵文化財課長	近藤 滋
主任技師	用山政晴	調査二係長	大橋信弥
管理係主任主事	山出 隆	調査一係技師	吉田秀則
		総務課長	山下 弘
		主任主事	松本暢弘

- 本調査は、田中勝弘・用山政晴・吉田秀則・中井均・角上寿行が担当し、本書は吉田が執筆、編集した。
- 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。
- 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

目 次

序文 例言

1. はじめに	1
2. 位置と環境	
1. 位置と地理的環境・歴史的環境	1
3. 調査の経過	1
4. 調査の結果	
1. 狐塚遺跡	4
A・B区	
(1) 掘立柱建物	4
(2) 井戸	17
(3) 土壇	19
(4) その他の遺構と遺物	24
(5) 落ち込み遺構	27
C区	
(1) 掘立柱建物	42
2. 法勝寺遺跡	42
(1) 方形周溝墓	42
(2) 古墳	81
(3) ビット	82
(4) 竪穴住居跡	88
(5) 掘立柱建物	88
(6) 溝状遺構	96
(7) 井戸	103
5. 遺構と遺物について	
1. 狐塚遺跡	105
2. 法勝寺遺跡	110
6. まとめ	117

挿 図 日 次

第1図	位置と周辺遺跡	3
第2図	調査区位置図	5・6
第3図	狐塚遺跡A区検出遺構図	7・8
第4図	狐塚遺跡B区検出遺構図	9・10
第5図	掘立柱建物 (1) (S B. 1・2)	12
第6図	掘立柱建物 (2) (S B. 3・4)	13
第7図	掘立柱建物 (3) (S B. 5・6)	14
第8図	掘立柱建物 (4) (S B. 7・8)	15
第9図	掘立柱建物 (5) (S B. 9・10)	16
第10図	掘立柱建物 (6) (S B. 11)	17
第11図	掘立柱建物 (7) (S B. 12)	18
第12図	掘立柱建物 (8) (S B. 13・14)	19
第13図	掘立柱建物 (9) (S B. 15)	20
第14図	土壁、ピット	21
第15図	土壁出土土器	22
第16図	井戸 (S E. 1)	23
第17図	落ち込み遺物出土状況	25・26
第18図	落ち込み出土土器 (1)	28
第19図	落ち込み出土土器 (2)	29
第20図	落ち込み出土土器 (3)	30
第21図	落ち込み出土土器 (4)	31
第22図	落ち込み出土土器 (5)	32
第23図	落ち込み出土土器 (6)	33
第24図	落ち込み出土土器 (7)	34
第25図	落ち込み出土遺物 (8)、ピット内出土遺物	36
第26図	狐塚遺跡C・D区検出遺構図	37・38
第27図	C区掘立柱建物 (S B. 1～3)	39
第28図	法勝寺遺跡検出遺構図	43・44
第29図	方形周溝墓 (1) (S X. 1)	45
第30図	方形周溝墓 S X. 1 東周溝内遺物出土状況	46
第31図	方形周溝墓 S X. 1 西周溝内遺物出土状況	47
第32図	方形周溝墓 S X. 1 北周溝内遺物出土状況	48
第33図	方形周溝墓 S X. 1 出土土器 (1)	49
第34図	方形周溝墓 S X. 1 出土土器 (2)	50

第35回	方形周溝墓 S X. 1 出土土器 (3)	51
第36回	方形周溝墓 S X. 1 出土土器 (4)	52
第37回	方形周溝墓 S X. 1 出土土器 (5)	53
第38回	方形周溝墓 (2) (S X. 2)	54
第39回	方形周溝墓 S X. 2 出土土器 (1)	55
第40回	方形周溝墓 S X. 2 出土土器 (2)	56
第41回	方形周溝墓 (3) (S X. 3)	58
第42回	方形周溝墓 S X. 3 西周溝内遺物出土状況	59
第43回	方形周溝墓 S X. 3 出土土器 (1)	60
第44回	方形周溝墓 S X. 3 出土土器 (2)	61
第45回	方形周溝墓 S X. 3 出土土器 (3)	62
第46回	方形周溝墓 (4) (S X. 4・5)	63
第47回	方形周溝墓 S X. 4 北周溝内遺物出土状況	64
第48回	方形周溝墓 S X. 4 出土土器 (1)	65
第49回	方形周溝墓 S X. 4 出土土器 (2)	66
第50回	方形周溝墓 S X. 5 周溝内遺物出土状況	67・68
第51回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (1)	70
第52回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (2)	71
第53回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (3)	72
第54回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (4)	75
第55回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (5)	76
第56回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (6)	77
第57回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (7)	78
第58回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (8)	79
第59回	方形周溝墓 S X. 5 出土土器 (9)	80
第60回	古墳 1 号墳	81
第61回	古墳 1 号墳遺物出土状況と出土土器	83
第62回	ピット内出土遺物 (1)	85
第63回	ピット内出土遺物 (2)	86
第64回	ピット内出土遺物 (3)	87
第65回	竪穴住居跡 (1) (S H. 1)	89
第66回	竪穴住居跡 (2) (S E. 2・3)	90
第67回	掘立柱建物 (1) (S B. 1・2)	91
第68回	掘立柱建物 (2) (S B. 3・4)	92
第69回	掘立柱建物 (3) (S B. 5・6)	93
第70回	掘立柱建物 (4) (S B. 7・8)	94
第71回	掘立柱建物 (5) (S B. 9)	95

第72回	掘立柱建物 (6) (S B. 10)	96
第73回	掘立柱建物 (7) (S B. 11)	97
第74回	掘立柱建物 (8) (S B. 12・13)	98
第75回	掘立柱建物 (9) (S B. 14・15)	99
第76回	掘立柱建物 (10) (S B. 16・17)	100
第77回	掘立柱建物 (11) (S B. 18・19)	101
第78回	溝 (S D. 1・2) 出土土器	102
第79回	溝 (S D. 1～3)	103
第80回	井戸 (S E. 1)	104
第81回	狐塚・法勝寺遺跡の掘立柱主軸方位	109
第82回	法勝寺遺跡出土の弥生時代後期の土器	113・114

表 目 次

表 1	狐塚遺跡 掘立柱建物一覧表	107
表 2	法勝寺遺跡 掘立柱建物 一覧表	108
表 3	狐塚・法勝寺遺跡 方形間溝墓一覧表	111

図 版 目 次

図版一	(上) 長浜平野遠景 (伊吹山より南を望む)
	(下) 長浜平野遠景 (伊吹山より北西を望む)
図版二	(上) 長浜平野遠景 (南より、手前が調査区)
	(下) 長浜平野遠景 (北より、手前が調査区)

狐塚遺跡

図版三	(上) 調査風景	(下) 遺構検出状況
図版四	(上) A区 東半部全景 (北より)	
	(下) A区 北半部 (南西より)	
図版五	(上) A区 西半部 (南より)	
	(下) 掘立柱建物 S B. 4	
図版六	(上) A区 北西部	
	(下) 掘立柱建物 S B. 2	
図版七	(上) 掘立柱建物 S B. 3	
	(下) S P. 94 遺物出土状況	

- 図版八 (上) A区 土壌 S K. 10 周辺
(下) 土壌 S K. 10 (南より)
- 図版九 (上・下) 土壌 S K. 10 遺物出土状況
- 図版十 (上) A区 中央部 (北より)
(下) A区 土壌 S K. 4 遺物出土状況
- 図版二 (上・下) B区 東半部 (南より)
- 図版三 (上) B区 東半部全景 (南東より)
(下) B区 東半部 (南より)
- 図版二 (上) B区 東半部 S B. 6 周辺 (東より)
(下) 掘立柱建物 S B. 6~8 (東より)
- 図版四 (上) 掘立柱建物 S B. 9 (北より)
(下) 掘立柱建物 S B. 8 (北より)
- 図版五 (上・下) 井戸 S F. 1 (北より)
- 図版六 (上) 井戸 S E. 1 (下) 井戸 S E. 1 枠内
- 図版七 (上) S B. 9の柱痕
(下) 紡錘車出土状況
- 図版六 (上) B区 西半部全景 (北より)
(下) B区 西半部 (南より)
- 図版八 (上) B区 西半部 (東より)
(下) 掘立柱建物 S B. 11・12
- 図版七 (上) 掘立柱建物 S B. 13~15
(下) 掘立柱建物 S B. 5
- 図版三 (上) 掘立柱建物 S B. 11
(下) 礎板検出状況
- 図版三 (上) B区 西半部全景 (南より、手前が落ち込み)
(下) 落ち込み 遺物出土状況 (1)
- 図版三 (上・下) 落ち込み 土層断面 (南北方向)
- 図版四 (上) 落ち込み 遺物出土状況 (2)
(下) 落ち込み 遺物出土状況 (3)
- 図版五 (上) 落ち込み 遺物出土状況 (4)
(下) 落ち込み 遺物出土状況 (5)
- 図版六 (上) 落ち込み 人形代出土状況
(下) 落ち込み 斎串出土状況
- 図版七 (上) 落ち込み 下駄出土状況
(下) 落ち込み 曲物出土状況
- 図版八 (上) 落ち込み 遺物出土状況 (6)
(下) 落ち込み 全景 (北より)

- 図版元 (上) C区 東半部全景 (南より) (下) C区 調査風景 (遺構抽出)
- 図版六 (上) C区 掘立柱建物 S B. 2 (西より)
(下) C区 掘立柱建物 S B. 3 (西より)
- 図版三 (上) C区 掘立柱建物 S B. 1 (北より)
(下) C区 掘立柱建物 S B. 1 (西より)
- 図版三 (上) C区 西半部全景 (南より) (下) C区 北西部 S D. 1
- 図版三 (上) C区 南西部
(下) D区 土壇 S K. 2
- 図版四 落ち込み出土土器 (須恵器)
- 図版五 落ち込み出土土器 (須恵器)
- 図版六 落ち込み出土土器 (灰釉陶器)
- 図版七 落ち込み出土土器 (土師器)
- 図版八 落ち込み出土土器 (土師器)
- 図版九 (上) 下駄 (下) 曲物
- 図版十 土壇等出土土器 (土師器)
- 図版四 土壇等出土土器
- 図版四 井戸枠 (S E. 1)
- 図版四 井戸枠 (S E. 1)
- 図版四 (上) 井戸枠 (下) 手斧痕
- 図版四 (上) 斎串 (下) 人形代

法勝寺遺跡

- 図版四 (上) 調査前近景 (南より)
(下) 調査前近景 (北より)
- 図版四 (上) A区 全景 (南より)
(下) B区 北半部全景 (南より)
- 図版四 (上) B区 北半部 (北より)
(下) B区 北半部中央 (北より)
- 図版四 (上) B区 南半部全景 (北より)
(下) B区 東半部全景 (北より)
- 図版四 (上) B区 南半部全景 (南より)
(下) B区 西半部全景 (南より)
- 図版四 (上) B区 北東部 (南より)
(下) B区 北東部 (S D. 1・2)
- 図版五 (上) 竪穴住居 S H. 1 検出状況
(下) 竪穴住居 S H. 2 検出状況
- 図版五 (上・下) 方形周溝墓 S X. 1 (南より)

- 図版四 (上) 方形周溝墓 S X. 2 (西より)
 (下) 方形周溝墓 S X. 3 (北西より)
- 図版五 (上) 方形周溝墓 S X. 3 (南東より)
 (下) 方形周溝墓 S X. 3 (北周溝)
- 図版六 (上) 方形周溝墓 S X. 5 遺物検出作業
 (下) 方形周溝墓 S X. 5 (北より、遺物取上げ後)
- 図版七 (上) 方形周溝墓 S X. 1 北周溝内遺物出土状況
 (下) 方形周溝墓 S X. 1 東周溝内遺物出土状況
- 図版八 (上) 方形周溝墓 S X. 1 東周溝内遺物出土状況
 (下) 方形周溝墓 S X. 1 北周溝内遺物出土状況
- 図版九 (上・下) 方形周溝墓 S X. 1 東周溝内遺物出土状況
 図版十 (上・下) 方形周溝墓 S X. 1 西周溝内遺物出土状況
 図版十一 (上・下) 方形周溝墓 S X. 3 西周溝内遺物出土状況
- 図版十二 (上) 方形周溝墓 S X. 3 南周溝
 (下) 方形周溝墓 S X. 3 西周溝土層断面
- 図版十三 (上) 方形周溝墓 S X. 4 周溝内遺物出土状況(1)
 (下) 方形周溝墓 S X. 4 周溝内遺物出土状況(2)
- 図版十四 (上) 方形周溝墓 S X. 4 周溝内遺物出土状況(3)
 (下) 方形周溝墓 S X. 4 周溝内遺物出土状況(4)
- 図版十五 (上) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(1)
 (下) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(2)
- 図版十六 (上) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(3)
 (下) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(4)
- 図版十七 (上) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(5)
 (下) 方形周溝墓 S X. 5 遺物出土状況(6)
- 図版十八 (上) ビット内遺物出土状況
 (下) ビット内遺物出土状況
- 図版十九 (上) 円墳 (北西より) (下) 円墳 (西側周溝)
- 図版二十 (上) 円墳 (東側周溝) (下) 円墳周溝土層断面
- 図版二十一 (上) 溝 S D. 1 (北側) (下) 溝 S D. 1 (南側)
- 図版二十二 (上) 溝 S D. 1・2 (北より)
 (下) B区 南半部 (北西より)
- 図版二十三 (上) 孤立柱建物 S B. 4 (南西より)
 (下) 孤立柱建物 S B. 4 (西より)
- 図版二十四 (上) 孤立柱建物 S B. 6 (西より)
 (下) 孤立柱建物 S B. 4 (西より)

- 図版五 (上) 掘立柱建物 S.B. 8 (西より)
 (下) 掘立柱建物 S.P. 10・11 (南より)
- 図版六 (上) 掘立柱建物 S.B. 14・19
 (下) 土壌 S.K. 1
- 図版七 (上) 土壌 S.K. 2
 (下) 土壌 S.K. 3
- 図版八 (上) 井戸 S.E. 1 (西より)
 (下) 井戸 S.E. 1 (西側井戸枠撤去後)
- 図版九 (上) 井戸 S.E. 1 (東側より)
 (下) 井戸 S.E. 1 (東側より、粘土除去後)
- 図版十 (上) 井戸 S.E. 1 (井戸枠撤去後)
 (下) 井戸 S.E. 1 枠内
- 図版十一 (上) 現地説明会
 (下) 調査終了後 埋めもどし作業
- 図版十二 (上) 石斧
 (下) 佐波理皿、鉄製品
- 図版十三 ビット・方形周溝墓・溝出土遺物
- 図版十四 方形周溝墓 S.X. 1 出土土器
- 図版十五 方形周溝墓 S.X. 1・3 出土土器
- 図版十六 方形周溝墓 S.X. 3・4 出土土器
- 図版十七 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (1)
- 図版十八 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (2)
- 図版十九 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (3)
- 図版二十 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (4)
- 図版二十一 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (5)
- 図版二十二 方形周溝墓 S.X. 5 出土土器 (6)
- 図版二十三 土壌ビット・古墳出土土器
- 図版二十四 (上) 「受口状口縁」甕
 (下) 「受口状口縁」鉢
- 図版二十五 (上) 「S字状口縁」甕
 (下) 高環

1. はじめに

一般国道8号(長浜バイパス)の近江地区の発掘調査については、路線内に北より西火打遺跡・奥松戸遺跡・法勝寺遺跡・狐塚遺跡等の周知の遺跡が分布し、さらに高溝遺跡・顔戸遺跡が隣接しているところから、当初試掘調査を実施し、遺跡の範囲確定、遺構・遺物の有無の確認を行うことから開始した。試掘調査は、昭和56年度に実施し、その結果をもとに西火打・奥松戸・法勝寺・狐塚の4遺跡の発掘調査を実施することになった。発掘調査には昭和57年度より3ヶ年を要した。

ここに報告する狐塚遺跡は昭和58・59年度、法勝寺遺跡は昭和59年度にそれぞれ調査を実施したものであるが、狐塚遺跡については昨年度報告^{注2)}できなかった掘立柱建物等に関して触れていく。

現地での発掘調査に関しては、地元関係機関、近江町教育委員会、地元高溝・長沢の方々、高月町の方々等の協力を得た。ここに記して謝意を表します。

2. 位置と環境

昨年度刊行した「国道8号長浜バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ」ですでに位置と環境については述べているので、ここでは簡単に触れるのみとする。

狐塚遺跡・法勝寺遺跡ともに滋賀県坂田郡近江町高溝・顔戸地区に位置し、法勝寺遺跡が町道をはさんで北に位置する。

狐塚遺跡は、昨年度報告した狐塚古墳群の立地する畑地を中心とした水田中に立地し、標高88.40mをはかる。調査区の東側は昭和59年度に、また、西側は昭和60年度にそれぞれ近江町教育委員会によって宅地開発に伴う発掘調査が実施され、弥生時代の方形周溝墓・帆立貝形の古墳・平安時代の掘立柱建物等が確認されている。調査対象区は、町道から琵琶田川までの約120mで面積6,200㎡をはかる。

北に位置する法勝寺遺跡は、一部が水田であるが、大半は荒地であり、周辺の水田より一段高くなっている。昭和62年度には、調査区の東約20mの地区では場整備事業に伴う発掘調査が近江町教育委員会によって実施され(約10,000㎡^{注3)})、弥生時代中～後期後葉の方形周溝墓約40基、古墳時代の方墳2基、平安時代以降の溝・井戸・柱穴等が検出されている。今回の調査対象区は、上川から町道までの約120m、面積4,300㎡である。

なお、高辺遺跡の状況については刊行済みの「長浜バイパス報告書Ⅳ」で触れているので今回は、割愛させていただきます。

3. 調査の経過

すでに述べているように今回の本格調査を実施するにあたり、昭和56年7～11月にわたって試掘調査を実施し^{注4)}路線内での遺跡の範囲を確認している。その調査の経過について年度ごとに簡単に述べる。

(昭和57年度)

初年度にあたる昭和57年度は、西火打・奥松戸遺跡において本格調査を実施した。西火打遺跡は調査対象区の

最北部に位置し、現況は水田または畑である。対象区のうち排土処理の関係から東側半分のみを5月～7月に実施した。事前の試掘調査によると北部半分 100m の区間で表土下で砂層、青灰色粘土層を確認し、粘土層面で須恵器片を検出し、遺構面の存在を予測していた。その結果、遺構の密度も薄く、遺物の出土量も少量ではあったが、土壌・井戸・畦畔遺構等が検出された。

奥松戸遺跡は、上川の北側の部分で現況は水田（低地）、竹林等の荒地（台地状部）となっている。^{注5)}

試掘調査の結果によると低地の水田部では耕作土直下で弥生時代の遺物包含層、台地の竹林部では奈良～平安時代の土器片が若干検出されていた。調査部分は土川橋梁に伴う側道のため上川にそって両側へ三角形状に開く。A～H区の8区分し、本年度はA～D区について調査を行った。A・B・D区では、弥生時代後期～古墳時代中期に位置付けられる土器・木製品を包含した落ち込み、C区では旧河道・近世の上水道施設（竹樋）等が確認されている。

（昭和58年度）

昭和58年度調査は、西火打遺跡・奥松戸遺跡・狐塚遺跡が対象となった。西火打遺跡においては残る西側半分の調査を行い前年度同様畦畔遺構・掘立柱建物を検出し、また庄内式併行期の一括資料出土例と判断してよい土壌も確認された。

奥松戸遺跡のE～H区では、弥生時代後期の方形周溝墓群、古墳、平安時代の掘立柱建物等比較的安定した遺構面が確認できたが、いずれも同一遺構面に混在している（一部二面ある）。

琵琶田川の以北から町道までに狐塚古墳が周知されており墳形の確認を目的にこの古墳の西半分を中心に調査を実施した。試掘調査時の地形測量では墳形を明らかにできなかったために設けた南北のトレンチにおいて溝状遺構を検出し、埴輪の小片が確認され、古墳である可能性を高めていた。

この溝状遺構は本格調査により直接古墳に伴うものではないことが判明したが、狐塚古墳は埴輪を有する直径27mの円墳であり、弥生時代の方形周溝墓群を破壊して形成され、平安時代に至っては掘立柱建物の建設によって削平をうけたことが推察されるにいたった。

また、狐塚古墳の南の水田部は小字名の違いから「七反田地区」と区別して調査を実施したが、狐塚遺跡として一連の広がりを示すものである。排土処理の影響上、東西に分けて調査を実施し、狐塚古墳に後続する古墳2基、これらに先行する弥生時代の方形周溝墓群、平安時代の掘立柱建物・井戸が検出され、琵琶田川に向かって遺構面は落ち込んでゆくが、その部分には古墳時代、平安時代の遺物が多量に含まれていた。試掘調査では琵琶田川をはさむ南側の顔戸地区は遺構・遺物は確認されていない。

（昭和59年度）

本格調査最終年度にあたる昭和59年度は狐塚遺跡・法勝寺遺跡が対象となった。狐塚遺跡は前年度調査分の狐塚古墳の北から町道にいたるまでの間約60mの水田にあたるが（C・D区）、既設農道の確保が必要であったため調査面積にかなりの制約があった。

町道から土川にいたる約120mが法勝寺遺跡で一部水田であるが大平が荒地となっている。東側の畑地は白鳳時代の寺跡法勝寺遺跡の推定地であり、調査区はその寺域の西端にあたりそれに関連した何らかの遺構・遺物の検出が期待されていた。また、試掘調査結果では水田面より一段高い台地状の荒地部分を中心に奈良時代以降、古墳時代、弥生時代の遺構が層位的に重複していることが確認されていたが、本格調査では、弥生時代の方形周



1 桑次遺跡 2 西打打遺跡 3 桑原戸遺跡 4 東溝遺跡 5 扇戸遺跡 6 坂遺跡

第1圖 調査位置図

A 坂野遺跡 B 五郎守遺跡

溝墓、古墳、平安時代の独立柱建物を中心とした無数のピット群等が全面にわたって重複して検出された。

以上が試験調査から本格調査にいたる大まかな調査経過である。調査地区は北端の西火打遺跡から狐塚遺跡にいたる幅約40m、総延長650mの範囲となった。現地調査終了後の昭和60年度より整理作業にはいり、63年度までの間に3分冊による報告書を刊行の予定であり、本書はその第2冊目にあたる。

4. 調査の結果

1. 狐塚遺跡

狐塚遺跡における調査は、畑地の高まり（A区）が古墳の墳丘と予想されていたため、これを中心にトレンチを設定し、南北（B～D区）へ拡張して全面調査の方針をとった。

A区の高まり部分では表上下に黒褐色土がひろがり、その下層に地山と思われる黄灰色砂レキ層が確認できた。弥生～古墳時代の遺構・遺物については『長浜バイパスⅣ』に報告済みであるが、その他に独立柱建物4棟、土壌等が黄灰色砂レキ層を切り込んで検出された（標高88m）。

また、B～D区の遺構面（標高87.50m）は、淡青灰色粘土（シルト質）でB区南端は琵琶山川の方向へ落ち込んでゆく。B区では古墳・方形周溝墓の他に独立柱建物11棟・土壌・井戸等が検出され、落ち込み部分でも多量の須恵器・土師器・灰柏陶器・木製品が出土した。C・D区でも独立柱建物3棟・土壌・溝等が確認できた。

これらについて概略を述べる。

A・B区

(1) 独立柱建物

①S.B. 1（第5図1）

古墳古墳1号墳の北側に位置し、S.K. 10によって切られる東柱を有する2間×2間の建物である。3.6m×3.44mをはかり、面積12.4㎡である。主軸方位はN-17°-Eを示す。

②S.B. 2（第5図2）

S.B. 1の南西に位置する3間×2間の建物である。4.72m×4mの規模で面積18.9㎡をはかる。主軸方位はN-6°-Wを示す。

③S.B. 3（第6図1）

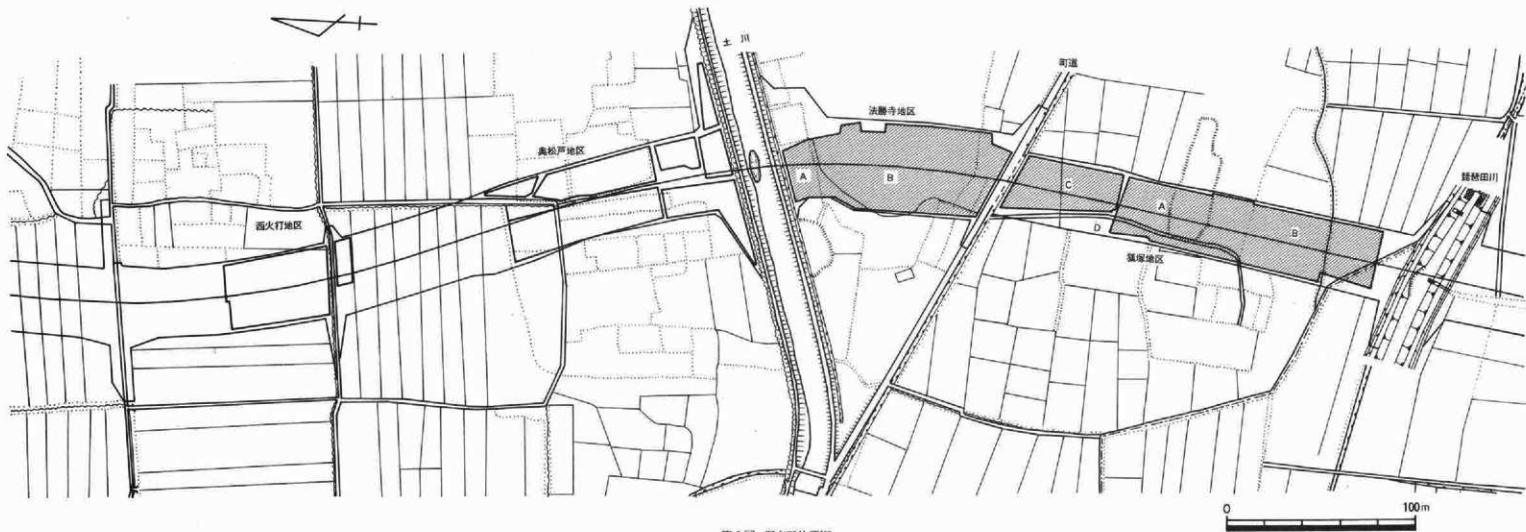
A区中央の西壁沿いで検出された4間×3間の南北棟でS.D. 2により切断される。5.44m×3.6mの規模をはかり面積19.6㎡である。主軸方位はN-3°-Eである。

なお、建物中央部に1.3m×1.5mの方形の土壌S.K. 12が位置しており、S.B. 3はこの土壌に付随する建物であろうか。

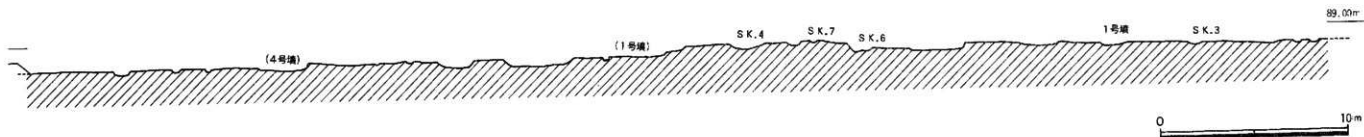
④S.B. 4（第6図2）

A区南西隅に位置する3間×2間の東柱をもつ建物である。辺1m前後の隅丸方形の柱穴を有し、4.72m×3.84mの規模で面積18.1㎡をはかる。主軸方位はN-4°-Wである。

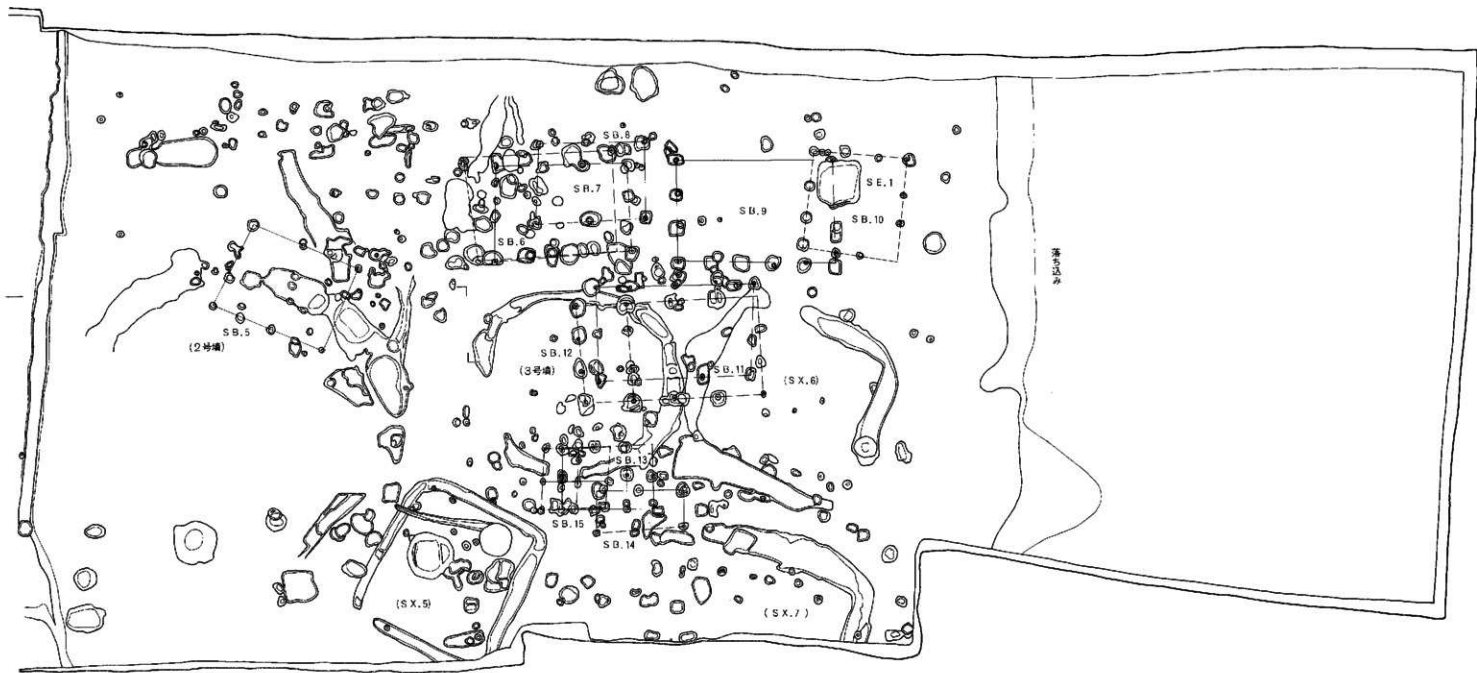
なお、S.B. 4の東側にも同規模の柱穴が数個確認できることから建物の存在が予想されるが、耕作に伴う攪乱のため充分に検出できなかった。



第2図 調査区位置図



第3图 猿猴遗址A区出土坑位图



89.00m

0 10m

第4区 孤塚遺跡B区検出遺構図

⑤ S B. 5 (第7図(1))

B区北側寄りに位置し、孤塚2号墳と重複する4間×3間の建物である。6.32m×4.72mの規模を有し、面積29.8㎡をはかる。主軸方位はN-29°-Eである。

⑥ S B. 6 (第7図(2))

孤塚3号墳の東側に位置する3間×3間の建物で南北方向に長い。7.32m×4.72mの規模を有し、面積は34.6㎡をはかる。主軸方位はN-1°-Eである。

なお、南東コーナーの柱穴には柱材が残る。

⑦ S B. 7 (第8図(1))

S B. 6によって切られる3間×1間の南北棟である。柱穴は一邊1m程度の隅丸方形で、8.04m×5.48m、面積44.1㎡の規模を有する。主軸方位はN-2°-Eである。

⑧ S B. 8 (第8図(2))

S B. 6・7との切り合いはないが、重複する2間×2間の南北に長い建物である。5.72m×4.08mの規模で23.3㎡の面積をはかる。主軸方位はN-2°-Eである。

⑨ S B. 9 (第9図(1))

B区南東側に位置し、井戸S E. 1によって切られる5間×3間の南北棟である。柱穴は一邊0.6~0.8mの方形で西側の南から3番目には柱材が残る(図版三)。8.4m×5.48mの規模で面積46㎡をはかる。主軸方位はN-7°-Eである。

⑩ S B. 10 (第9図(2))

S B. 9と重複する3間×3間の建物で5.44m×4.96mの規模を有する。面積27㎡で主軸方位はN-12°-Eを示す。

⑪ S B. 11 (第10図)

S B. 6~8の建物群の南西側に位置し、方形岡溝墓S X. 6、古墳3号墳を切る。4間×2間で8.32m×4.96mをはかり、面積41.3㎡である。主軸方位はN-5°-Eである。

なお、西側の2柱穴において礎板に使用されたとと思われる板材が感に残る。

⑫ S B. 12 (第11図)

S B. 11に切られる4間×3間の南北棟であり、北側より2列目に東柱を有する。9.72m×5.16mの規模で面積50.2㎡をはかる。主軸方位はN-3°-Eである。

⑬ S B. 13 (第12図(1))

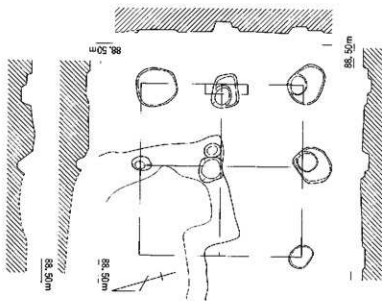
S B. 11・12の建物群の西側に位置する3間×2間の建物で南側より2列目に東柱を有する。4.72m×3.2mの規模で面積15.1㎡をはかる。主軸方位はN-6°-Wである。

⑭ S B. 14 (第12図(2))

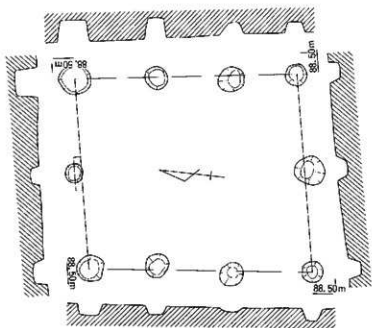
S B. 13・15と重複する2間×1間の建物であるが、切り合いはない。4.72m×2.16mをはかり、面積10.2㎡である。主軸方位はN-6°-Eである。

⑮ S B. 15 (第13図)

S B. 13を切り東柱を有する2間×2間の建物である。3.4m×3.2mの規模で面積10.9㎡をはかる。主軸方位はN-7°-Eである。



(1) SB.1

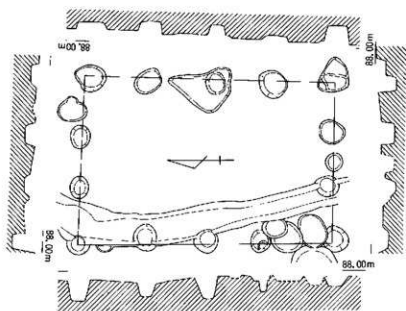


(2) SB.2

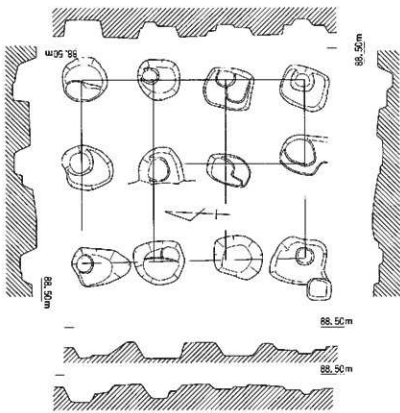
0 2m

第5図 掘立柱建物(1)





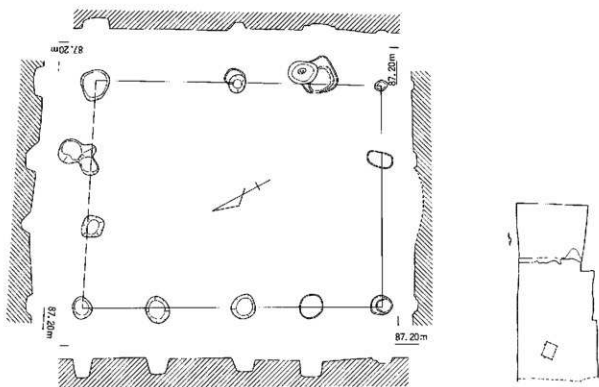
(1) SB.3



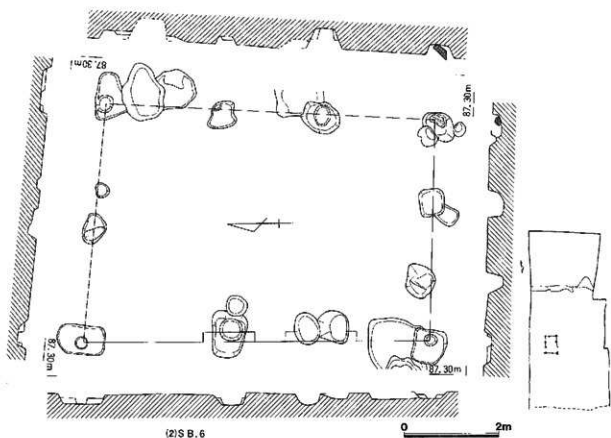
(2) SB.4

0 2m

第6圖 獨立柱建物(2)

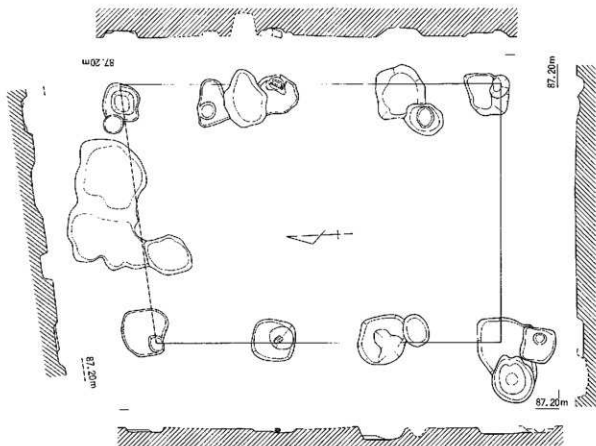


(1) SB.5

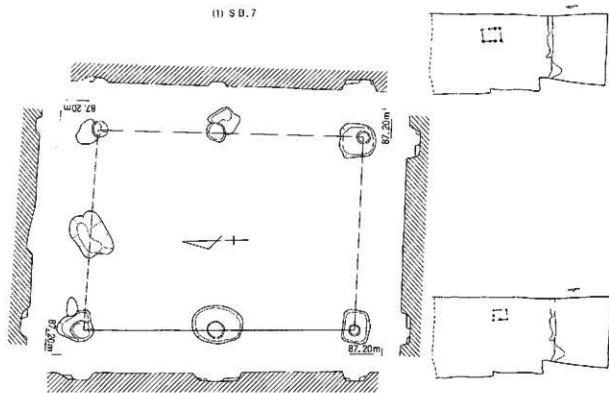


(2) SB.6

第7図 掘立柱建物(3)

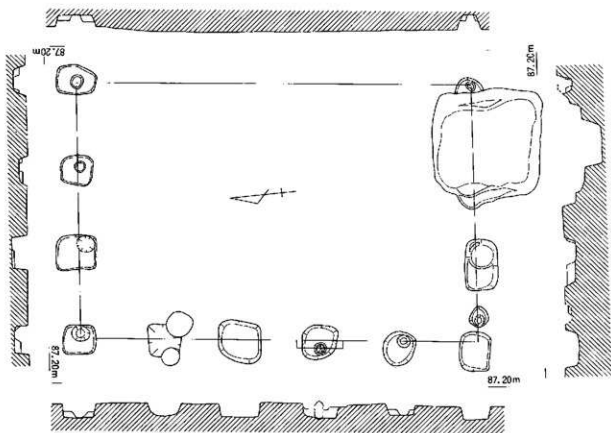


(1) SB.7

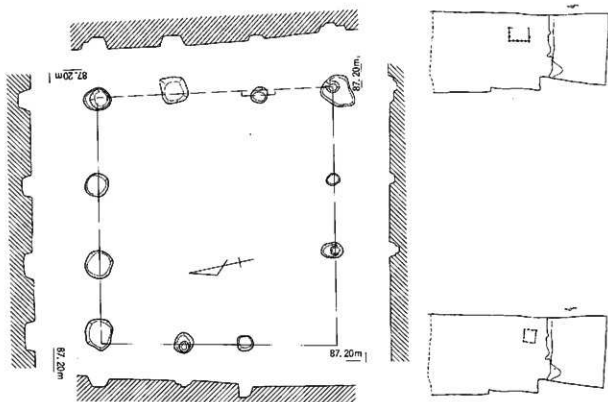


(2) SB.8

第6図 掘立柱建物(4)



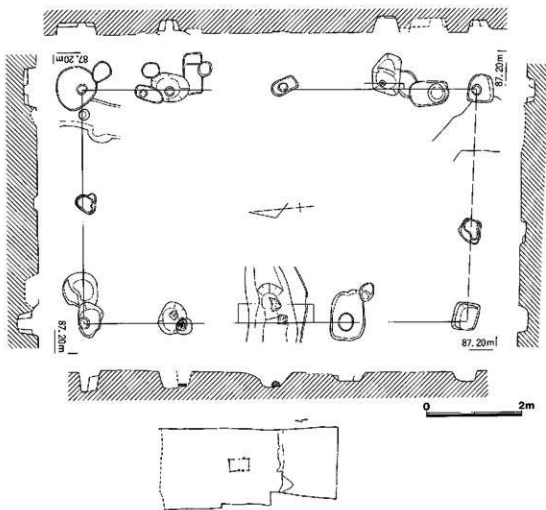
(1) S B. 9



(1) S B. 10

0 2m

第9圖 插立柱建物(5)



第10図 掘立柱建物(6) SB11

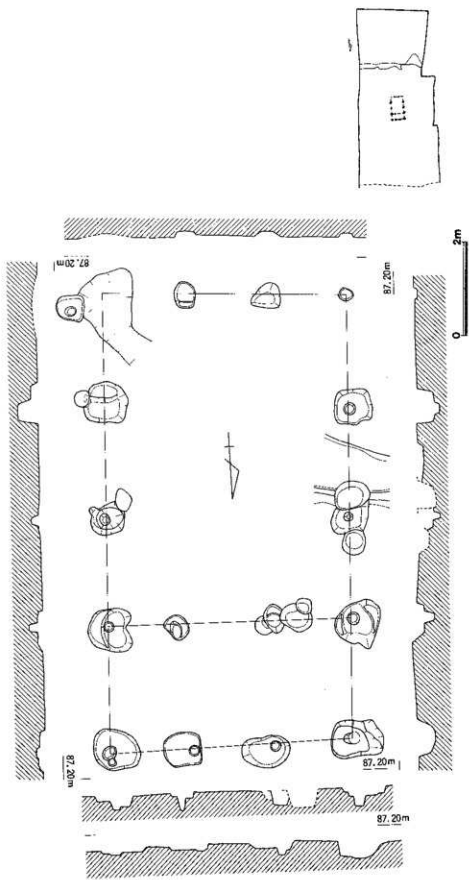
(2) 井戸 (SE. 1) (第16図)

SB. 10の北東部に位置し、東西2.5m、南北2.2mの隅丸方形のプランを呈し、深さ0.9mの二段掘りの掘り方を呈する。およそ長さ1.2m、幅0.15m、厚さ0.06mの板材を井桁状に組み合わせる。東・西側は5段分、南・北側は4枚分が残存するが、北側については一番下に薄い板材が1枚余分に置かれている。また、西側の井戸枠外には板の残りが残る。

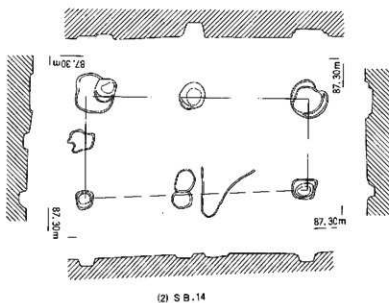
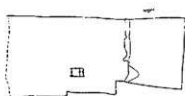
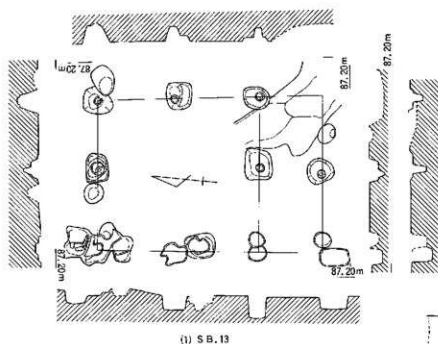
井戸枠内は黒褐色粘質土で一氣に埋まっており、底部には若干のレキが残り、ベースの灰色砂層からは現在も湧水があった。また、井戸枠内からは曲物・齋串片が出土している。

井戸枠外の掘り方からは須恵器の坏身が出土している(第15図40)。やや反気味の口縁部を有する坏部に断面方形の高台が付く。内外面ヨコナデ調整で、底部外面はヘラ切り後ナアが加えられる。

井戸枠に使用されている板材は(岡版型~器) 両側の上下にホゾの切られているものが全部で18枚あるが、東・西側の最上段の2枚はかなり磨滅が著しい。樹種鑑定によるとスギ材が使用されている。また、表面には加工時の手荒裏の鮮明に残っているものが多い(岡版器)。



第11図 独立柱建物(7) SB12



0 2m

第12回 孤立柱建物(8)

(3) 土塚

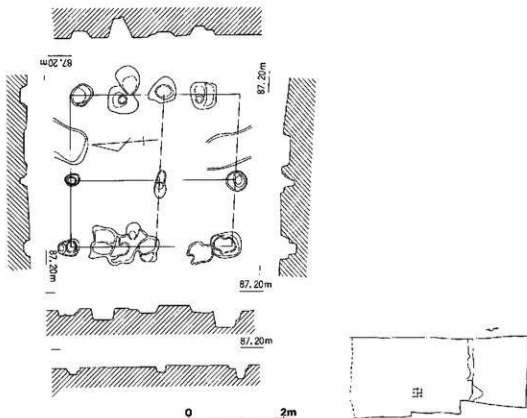
土塚としてはS.K. 1~12があるが、弥生・古墳時代の遺物を包含するものについてはすでに『長浜バイパスⅣ』にて報告済みである。ここではそれらも含めて奈良・平安時代の遺物を包含していたものについて規模・出土遺物等について述べる。

①S.K. 3

古墳1号墳の北東部で検出された東西4.4m、南北2mの細長い土塚である。

遺物(第15図8・9)

土師器と灰粘陶器がある。



第13回 掘立柱建物(9) SB15

8は土師器の小皿で口径8.2cm、器高1.2cmをはかり、口縁部が直線的に立ち上がる。

9は灰釉陶器の小皿で口径9.8cm、器高2.8cmをはかり、外気味の口縁部を有し扁平な高台が付く。

②SK. 4 (第14図(2))

SK. 1の南側で確認された直径約2mの円形土壇で、土師器・須恵器等が出土している。周囲に付属施設等は確認されていない。

遺物 (第15図10~21)

土師器には小皿・台付皿がある。

10・11は口縁部がわずかに屈曲してのび、底部に手づくね痕が残る。10は口径9.4cm・器高1.4cm、11は9.8cm・1.8cmである。

12~16は体部と底部との境が不明瞭で口縁部に丸味をもっており、底部に手づくね痕が残る。口径8.8~9.6cm、器高1.2~1.6cm。

17~19は体部と底部の境の不明瞭な坏に八の字状に開く手づくねの高い高台が付く。口径8.8~10cm、器高2.4~3cm。

③SK. 5

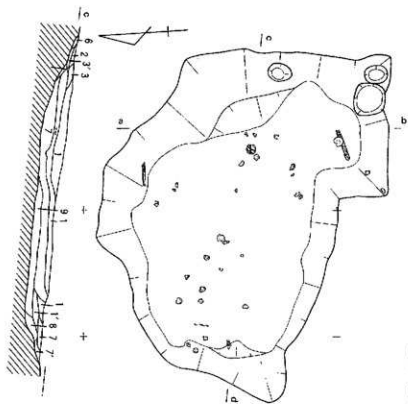
SK. 3の周溝を切断する東西1.2m、南北1.5mの土壇である。

遺物 (第15図22)

土師器の中皿が出土している。口径13.8cm、器高2.8cmをはかり、底部と体部の境が不明瞭である。

④SK. 8

東西0.8m、南北1.0mの土壇である。

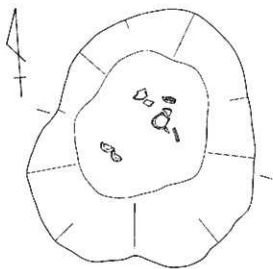


(1) SK.10

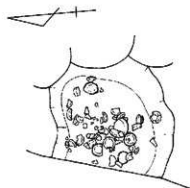
1. 黒褐色土
1. 黒褐色土 (砂を含む)
2. 灰褐色土 (砂を含む)
3. 暗茶褐色土
3. 暗茶褐色土 (砂を含む)
4. 暗茶褐色泥土
5. 暗灰褐色砂土
6. 黒褐色泥土 (砂を含む)
7. 暗黒灰色粘質土
8. 黒灰色砂土
9. 暗黒褐色粘質泥土



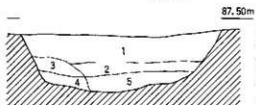
0 2m



(2) SK.4



(3) SP.94

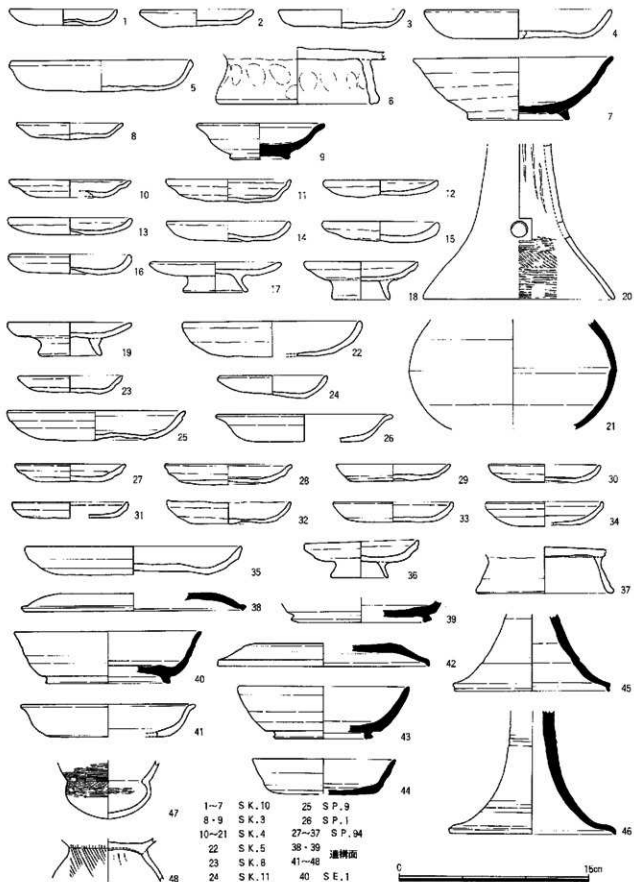


87.50m

1. 暗灰褐色土 (スミを含む)
2. 暗灰褐色粘土
3. 灰黄色砂粘質土 (灰褐色粘土含む)
4. 青灰色粘質土
5. 暗青灰色粘質土

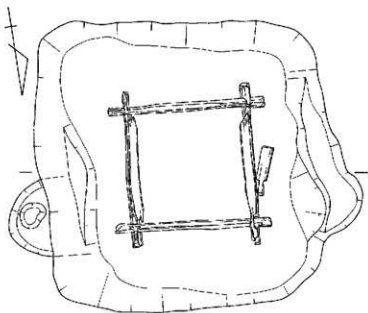
0 1m

第14図 土壌ピット遺物出土状況

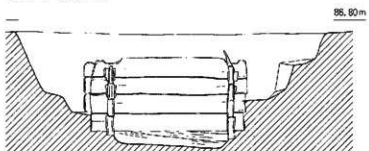


第15図 土埴他出土土器

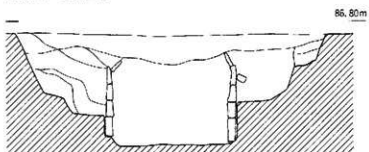
(1) 井戸平面図



(2) 井戸枠 北側断面図



(3) 井戸内 上層断面図



0 1m

第16区 井戸 (SE1)

遺物 (第15図23)

土師器の小皿が出土している。体部と底部との境にわずかに稜が残る。

⑤S K. 10 (第14図(1))

狐塚1号墳の北西に位置し、S B. 1を切る東西5.25m、南北3.75mの不定形土壌で南東部が若干張り出す。黒褐色土、暗黒褐色粘質土により漸次埋没したものと思われる。S B. 1と切り合うのみで付属施設等は見当らず、性格も判然としない。

遺物 (第15図1～7)

土師器は皿が12点、高台付皿が1点出土している。小皿(1～3)は口径8.2～9.8cmで、口縁部をナデ調整し体部と底部との境が比較的はっきりしており、底部には手づくね痕を残す。4・5は口径14.2～14.6cm、器高2.4cmの中皿で、ナデ調整し底部に手づくね痕が残る。1口縁部をつまみ上げる。6は平坦な底部に手づくねの高い直線的な高台が付く。

灰釉陶器の第15図7は、ナデによる凹凸の明瞭な浅い体部に断面逆三角形の高台が付く塊である。

⑥S K. 11

S B. 3の中央に位置する東西1.5m、南北1.3mの隅丸方形の上墳で、深さ0.2mと浅い。

遺物 (第15図24)

土師器の小皿が出土している。口縁部にナデ調整が残るが、体底部の境が不明瞭である。

(4) その他の遺構と遺物

①S P. 1

遺物 (第15図26)

土師器の坏が出土している。口径13.5cm、器高2.1cmをはかり、ロクロナデ調整で仕上げ、口縁部が大きく外反する。

②S P. 9

遺物 (第15図25)

土師器の中皿が出土している。ナデにより口縁外面に稜がめぐり、底部には手づくね痕が残る。口径13.8cm、器高2.2cmをはかる。

③S P. 94 (第14図(3))

掘立柱建物S B. 3の南西コーナーの柱穴に切られる直径0.9mの土壌で、黒褐色粘質土によって一気に埋没している。

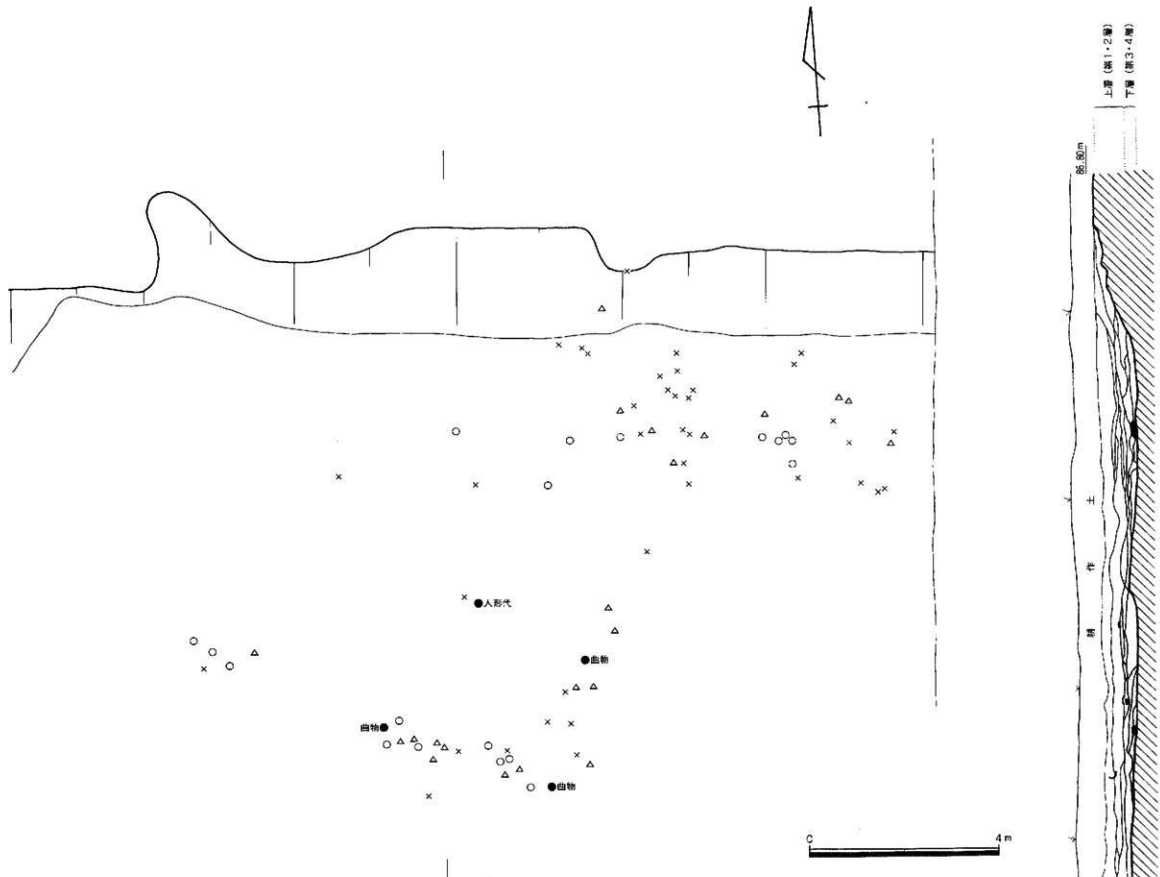
遺物 (第15図27～37)

土師器の小皿21点、中皿1点、台付皿2点、灰釉陶器1点が重なって出土した。

小皿は口縁部がわずかに稜を形成してのびる27～29と上方へつまみ出し気味にのびる30～34とがあるが、いずれも二度の強いナデ調整が認められる。口径8.6～10cm、器高1.2～2cmをはかる。

中皿(25)は口径17cm、器高2.2cmをはかり、強いナデにより口縁端部を上方へつまみ出す。

台付皿は、36が口径8.8cm、器高2.8cmで強いナデにより口縁端部を上方へつまみ出す体部にハの字状に開く高台が付く。37は底径10.6cmのハの字状に開く高台が付く。



第17図 落ち込み遺物出土状況 (x 須恵鉄, o 灰輪陶器, Δ 土輪器)

④遺構面直上の遺物

第15図38・39・41～48がある。須恵器には坏蓋・坏身・高坏があり、土師器は坏、古式土師器に小型丸底壺、「S字状口縁」甕の高台がある。

須恵器の坏蓋には38・41があり、前者は平坦な天井部（ヘラケズリ）から屈曲して口縁部へつながりさらに端部を下方へつまみ出すものであり、後者は平坦な天井部（ヘラケズリ）に端部を下方へ折り曲げた口縁部が付く。

39・42は高台の付く坏身、43は無高台の坏身である。39・42は底部と体部との境の明瞭な坏部にややふんばり気味の高台が付く。

43の無高台の坏身は平坦な底部に直線的にのびる体部が付き、底部外面はヘラ切り後未調整である。

44・45は八の字状に開く高坏脚部で、端部を下方へ折り曲げる。外面には1～2条の凹線がめぐる。

46は土師器の坏で口縁端部が大きく外反し、ロクロナデ調整で仕上げる。

47は口径が体部幅をしのぐもので外面を細かい丁寧なヘラミガキで仕上げる小型丸底壺である。

48は器壁の薄い「S字状口縁」甕の高台で外面に細かいハケ目が残る。

(5) 落ち込み遺構

琵琶田川より北約80mあたりから南へ0.4～0.5mの比高差のなだらかな落ち込み遺構が検出された。南北方向の土層断面観察による基本層位は、上層より灰褐色粘質土（第1層）、淡褐色砂レキ（第2層）、暗灰褐色粘質土（第3層）、暗灰褐色砂レキ土（第4層）から形成され、ベースは灰褐色砂レキとなる。

なお、この落ち込み遺構の検出地点は、現地形のうえで北側の畑地・水田と南側の水田とが1m近い段差をもっているラインと一致している。調査範囲内では南側の立ち上がりは確認されず、なだらかに傾斜していくだけで遺物の出土も南側へ向かうほど皆無となっている。

遺物と出土状況（第17～25図）

この部分からは多量の遺物が流れ込みによる堆積を示す状況で確認された。

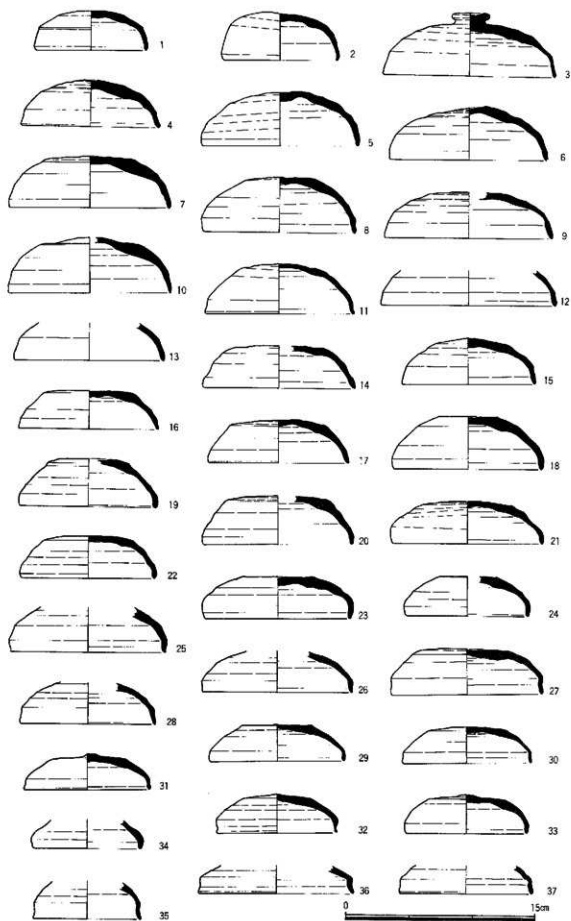
出土状況としては先に述べた第1・2層からは須恵器・土師器・灰粘陶器の土器類の他に鉄製品、佐波理皿、木製品（曲物・下駄・祭祀用木製品）等が検出され、また、下層の第3・4層からは須恵器（坏蓋・坏身A類）が検出されている。これらの遺物より落ち込み部分の上層地積は2時期に大別できる。

以下、これらの遺物について特徴を述べる。

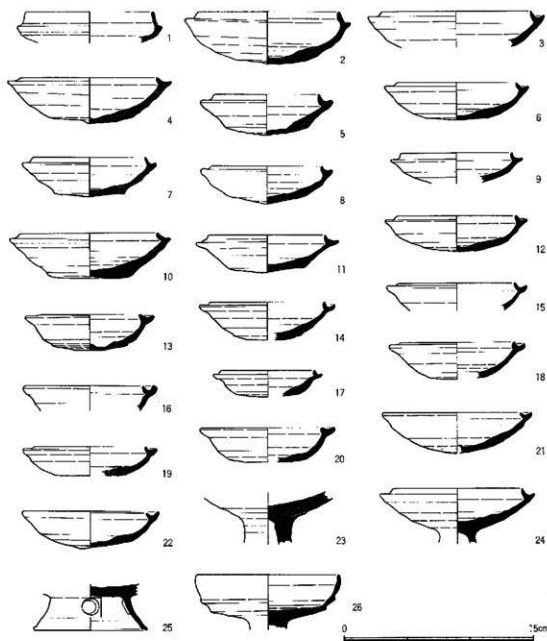
（須恵器）（第18～21図）

須恵器は、坏蓋・坏身・高坏・川面硯・長頸壺・平瓶・楕瓶・無頸壺・甕等がある。

坏蓋は、つまみをもたないもの（A類）とつまみをもつものがあり、後者はかえりのつくもの（B類）とつかないもの（C類）とに分けられる。A類（第18図）は、比較的小ぶりで口縁部と天井部との境を若干残すもの（A₁類）、全体に丸味をもちその境が不明瞭なもの（A₂類）、口縁部がやや丸味をもっておわるもの（A₃類）、口縁部が強いナデにより下方へ屈曲気味におわるもの（A₄類）に細分される。A₁類は1・2が相当し、口径8.6～9.0cm、器高3.2～3.6cmを計り、天井部にはヘラケズリ調整が残る。A₂類は4～17が相当し、口径10.4～13.6cm、器高3～4.4cmの法量を示す。口縁部は自然に外下方にのびており、天井部外面はわずかにヘラケズリが残り、他はヨコナデ調整である。A₃類はA₄類と類似するが、口縁部が内傾し丸味をもっておわる。18～21が相当し、天井部にやや平坦面をもち、ヘラ切り調整でおわる。口径9.6～11.6cm、器高3.2～4.2cmである。A₄類はやや小ぶりとなり、口縁部が直立ないしはやや内弯しておわる。25～37が相当し、口径8.4～12cm、器高2.8～3.6cmをはかる。



第18区 落ち込み出土土器(1)



第19図 落ち込み出土土器(2)

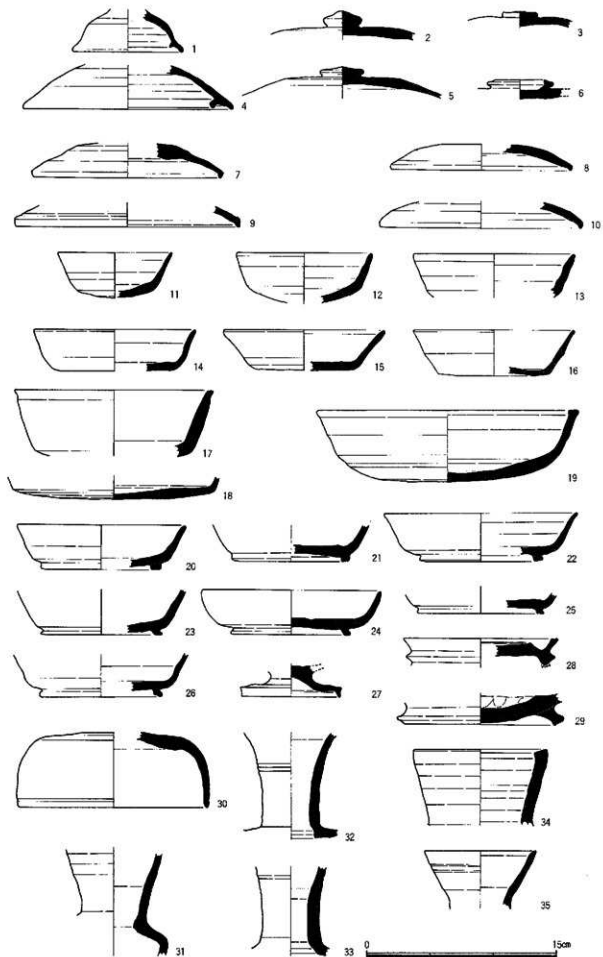
B類には第20図1・4があり、いずれも小破片である。かえりは短く、つまみ出されるものである。内外面ヨコナデ調整である。

C類も小破片であり(2・3・5・7~10)、天井部にやや平坦面を残しなだらかに口縁部にいたる。胴部は短く下方へ折り曲げられ、2・3・5のような比較的偏平なつまみが付くと思われる。

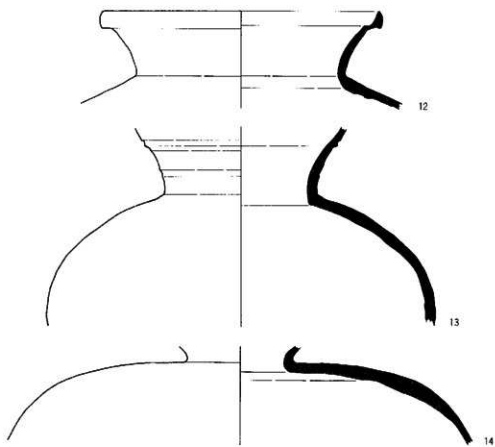
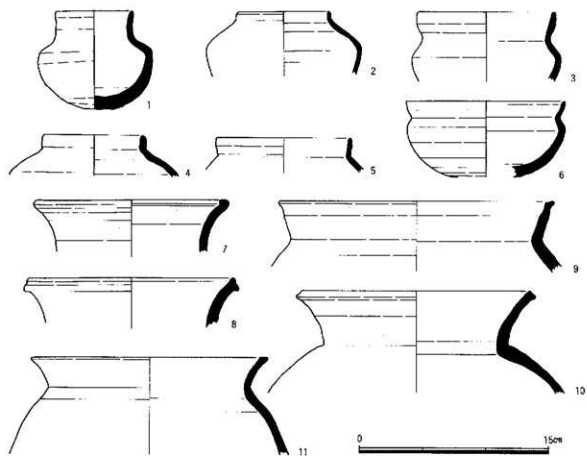
6は平坦な器壁に断面三角形のつまみを取り付く。

坏身は(第19図)立ち上がりの付くもの(A類)と立ち上がりの付かないもの(B類)と高台の付くもの(C類)に分けられる。

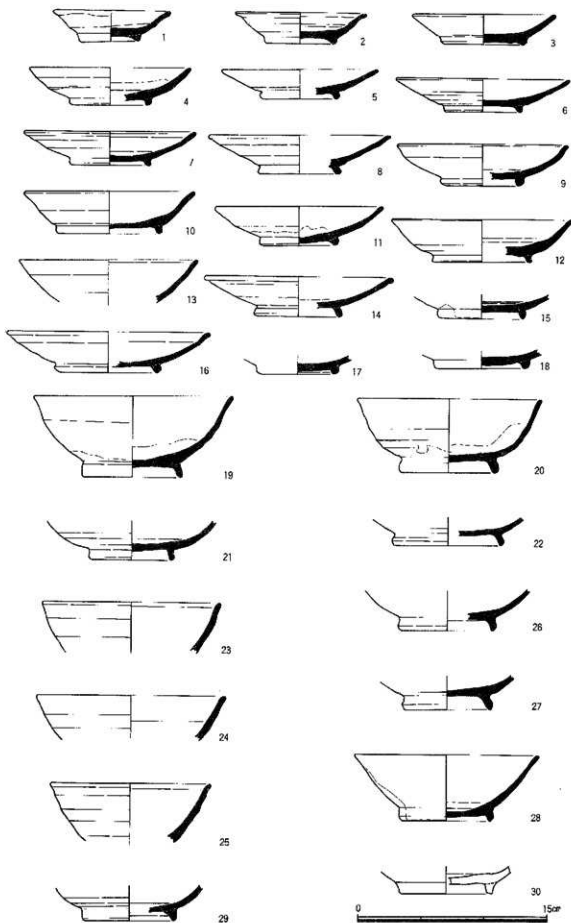
A類は坏蓋A類とセットをなすもので立ち上がりの若干長いもの(A₁類)と短いもの(A₂類)とがある。前者は第19図1・2があり、口径10・11.2cm、器高4cmをはかる。底部外面にヘラケズリ調整が残り、他はヨコナデ調整である。後者は(3~22)立ち上がりと受部との間に匙面を有し、底部に平坦面を残すものが多い。口径7~11.8cm、器高2~3.6cmで底部外面がヘラケズリ調整の他はヨコナデ調整である。



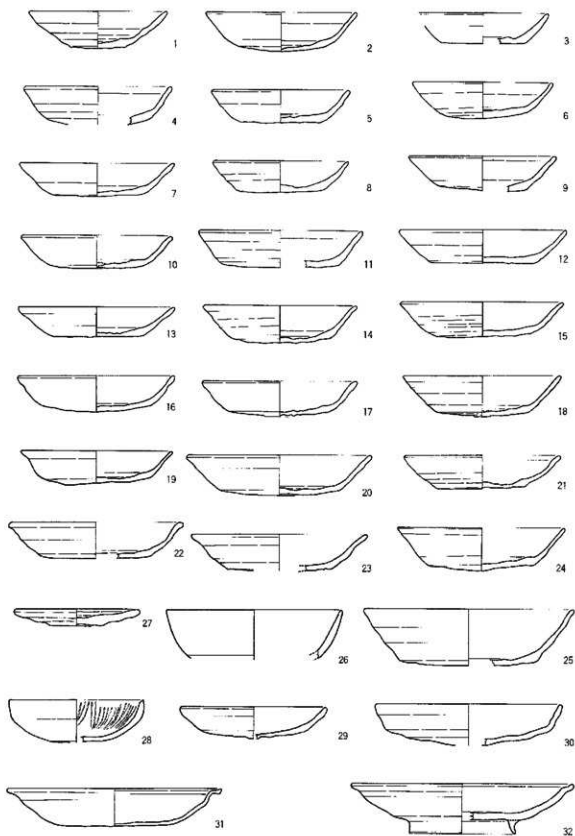
第20区 落ち込み出土土器(3)



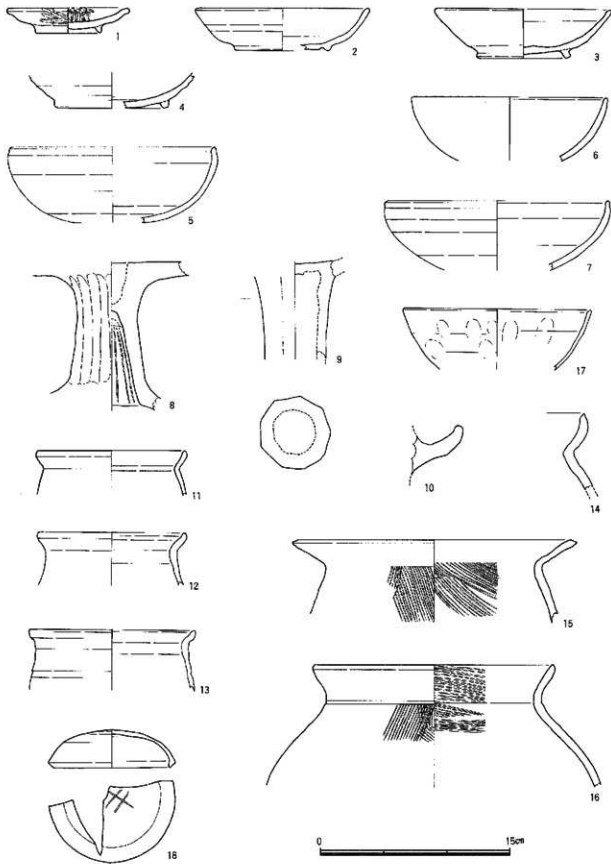
第21图 落ち込み出土土器(4)



第22図 落ち込み出土土器(5)



第23図 落ち込み出土土器(6)



第24図 落ち込み出十土器(7)

B類は第20回11～13のように底部が若干丸味をもち、口縁部が上方へ開くものB₁類、14～16のように底部と口縁部との境の屈曲が鋭く、口縁部が直線的にまっすぐのびるものB₂類、17～19のように法量が大きく大型のものB₃類がある。17は厚手で口縁端部外面に凹面がめぐる。19は口径20cm、器高5.6cmで口縁端部が肥厚し、底部外面はヘラケズリ調整である。

C類は高台の断面形態により2つに分けられる。20・21のように断面四角形のものC₁類と22～26のように外方へふんばり気味のものC₂類とがある。

高杯 (第19・20回)

高杯は杯部が杯身A類のように立ち上りの付くものA類(有蓋)、付かないものB類とに分けられる。

A類に属すると思われる第19回25は脚部のみの出土であるが、八の字状に開く偏平な脚部に比較的に長い立ち上りの残る杯部が付くと思われる。23・24は立ち上がりが低く、筒状の脚部が付く。

B類に属する26は杯部下平に2条の鋭い稜線がめぐる。

第20回27は低く偏平な脚部で端部が下方へ突出しておわる。B類の杯部の流れをくむ。

なお、第18回3は有蓋高杯の蓋である。偏平なつまみが付き、丸味をもった天井部はヘラケズリ調整が残る。

円面碗 (第20回28)

陸部は海部より一段高く、海部は断面がV字状を呈す。堤部端部に平凸面を有し、脚部上位に大きな稜がめぐる。方形の透しが施されると思われる。

長頸壺 (第20回32・33)

頸部のみの出土であるが、筒状で大きく外方へ開き、外面に1・2条の凹線がめぐる。

平瓶 (第20回31・35)

口縁部・頸部のみの出土であるが、逆八の字状に開き、35の外面には2条の凹線文がめぐる。

横瓶 (第21回14)

肩部のみ出土している。

短頸壺 (第21回1～6)

頸部の比較的に長いもの(1)、頸部が短く上方へまっすぐのびるもの(2～4)、やや内弯気味に外方へのびるもの(5・6)がある。

1は口径6cm、器高7.6cmの完形品である。外面下半がヘラケズリ調整の他はヨコナデ調整である。

2～4の肩部の張りが強いのに対し、5・6は弱い。

甕 (第21回7～13)

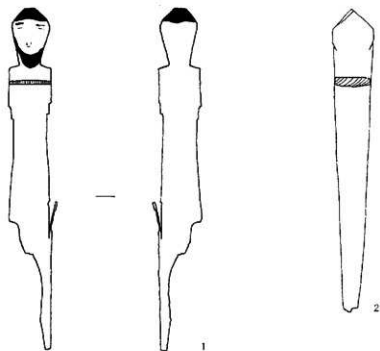
7は口縁端部を内側へ折りまげる。8～11は外反する口縁端部に面をとるものである。12は口縁部内面に匙面をもつもの、13は外面に稜線がめぐる。

〈灰精陶器〉 (第22回)

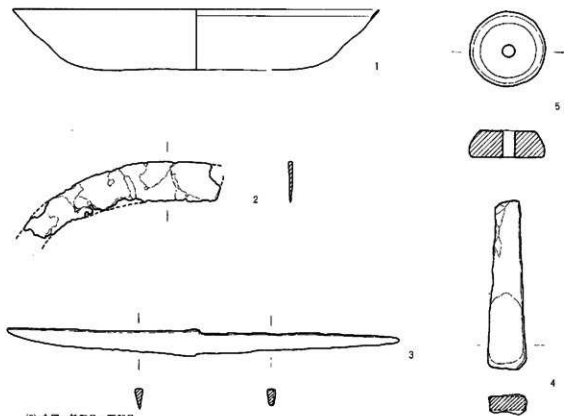
灰精陶器には小塊、壺、皿類がある。

小塊は1～3があり、いずれも完形品である。体部はほぼまっすぐのび、口縁端部がやや肥厚気味に丸くおわるもので、丸味を帯びた逆三角形の高台が付く。底部外面は1がナデ仕上げ、2・3には糸切り痕が残る。口径9.1・11.1cm、器高2.4・2.5cmである。

4・9・11・13～18は皿類である。直線的に体部・口縁部がのびておわるものA類(4～6)と口縁部がわずかに外反して丸味を帯びておわるものB類(7・9・11・14・16)とがある。両者共に断面逆梯形の比較的に低い

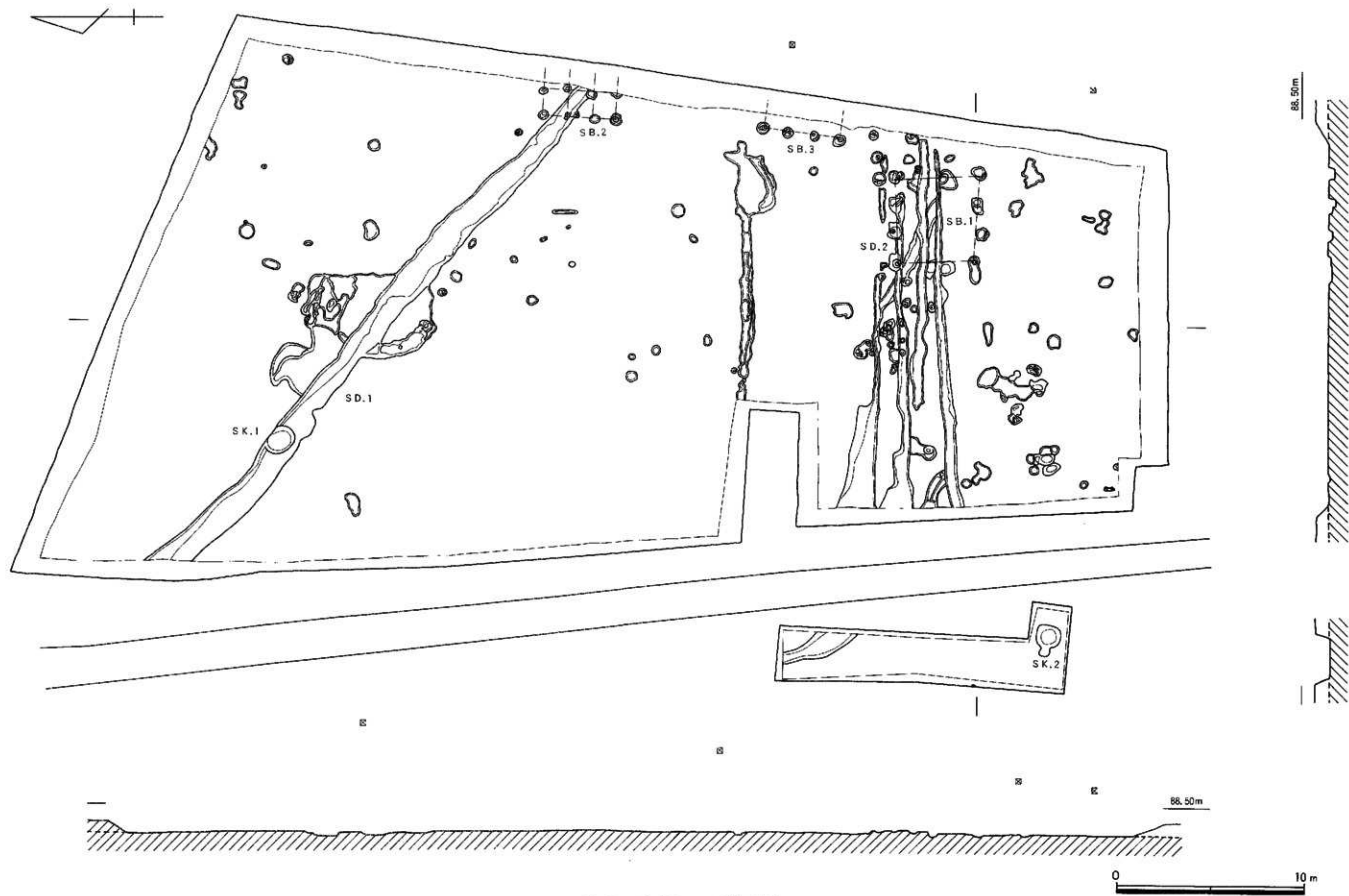


(1) 祭祀用木製品 1 人形代 2 斎串

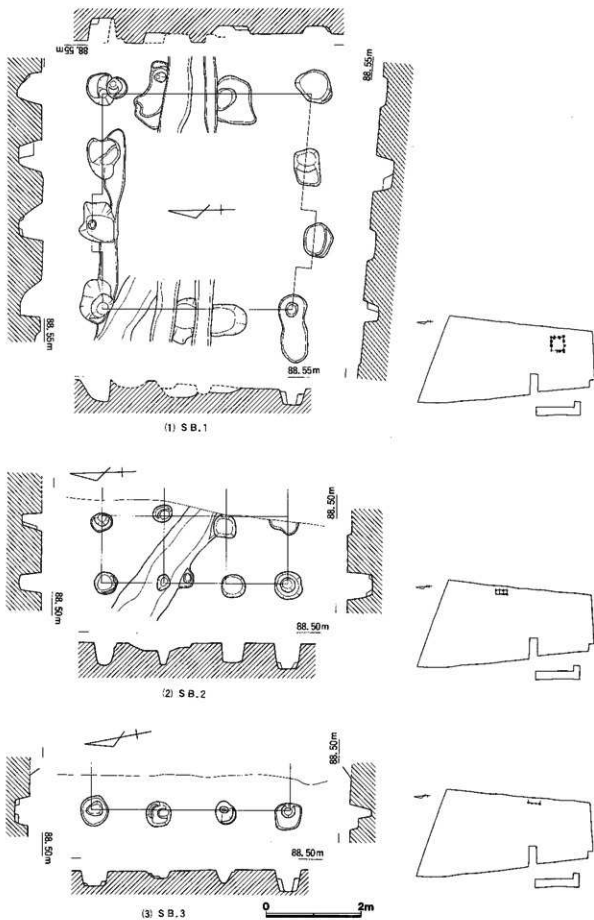


(2) 金属、鉄製品、石製品
1 佐渡理皿 2 鉄鎌 3 刀子 4 鉄製品 5 石製紡錘車

第25区 落ち込み、ビット内出土遺物



第26图 瓜埠遗址C·D区出土器物图



第27图 C区独立柱建物

高台が付く。底部外面は4が糸切り痕、11・15にヘラ削り痕が残り、他はナデ調整で仕上げる。

なお、15の底部外面、17の底部内面には墨痕が残る。口径12.2~15.8cm、器高2.3~3.3cmである。

境には19~29がある。19・20のように深く丸味を帯びた体部にやや外反気味の口縁部が付き断面三日月形の高い高台(21・22・26・27)を付すA類と直線的に開く体部に高い逆梯形の高台を付すB類(25・28・29)とがある。底部外面は19・20・28がヘラケズリ、27が糸切り痕、その他はナデ調整である。また、22の底部外面、29の底部内面には墨痕が残る。28の底部内面には重む焼き痕が残る。口径12.6~15.7cm、器高5.3~6.4cm。

〈土師器〉(第22~24図)

土師器には坏・高坏・甕類がある。

坏(第22~24図)

半球形の体部を有するA類(第23図28、第24図5~7)、ロクロ土師器で高台の付かないものとB類(第23図1~25)、高台の付くものC類(第22図10・12、第23図32、第24図1~4)がある。

A類はいずれも半球形に近い丸い体部を有するが、28は口径10.5cm、器高3.3cmで口縁端部を内傾させ、内面には放射状の暗文が残る。5~7は深く、口径15.3~17cm、器高6cm前後をはかる。

B類(第23図1~25)はいわゆるロクロ土師器で、体部をロクロナデ調整し、底部外面にヘラおこし痕をとどめる。法量の違いによって小型(1~10、口径10~12cm、器高2.4~2.8cm)、中型(11~24、口径12.2~14.3cm、器高2.4~3.4cm)、大型(25、口径16.4cm、器高4.5cm)に大別される。1は底部が小さく、口縁部が大きく直線的に開く。2~10は底部に丸味をもつ。中型の11~24は底部が平坦気味で体部との境の明瞭なものが多いが、16・19・22のように丸味をもつものである。11・14・15・18の内外面にはロクロナデによる凹凸が明瞭に残る。16・19・22の口縁部はやや外反気味におわる。

25はロクロナデによる凹凸が明瞭で、底部と体部との境もはっきりしている。

いずれも淡褐色・褐色の色調を呈し、胎土も精良である。

C類は底部と体部との境が不明瞭な坏部に断面方形の高台が付くもの(第22図10・12、第24図2~4)と口縁部が屈曲し断面三角形の高台の付くもの(第23図32、第24図1)とがある。前者はロクロナデ調整し、後者は32がロクロナデ調整、1は丁寧なヘラミガキ調整である。1は口径9.2cm、器高2.1cmと小型である。

皿(第23図26・29~31)

26は口径9.6cm、器高1.3cmをはかる底部と体部との境が不明瞭なロクロ土師器で底部外面に糸切り痕が残る。

29は口径11.2cm、器高2.4cmをはかり内外面ナデ調整である。

30は口径14.4cm、器高3.2cmをはかり内外面ナデ調整である。

31は口径16.6cm、器高3cmをはかり、口縁部を屈曲させ端部を上方へつまみ上げる。

高坏(第24図8・9)

平坦な坏底部に面取りした脚部が付く。

甕(第24図11~16)

口径12cm前後で頸部から口縁部へなだらかにつながり端部を上方へつまみ出す小型のもの(11~13)とそれ以外の長胴甕(14~16)とがある。

前者は全体をロクロナデによって仕上げる。

後者は口縁部の形態により内湾気味にのびるもの(11)、頸部で鋭く屈曲して直線的にのびるもの(12)、ゆるやかに外反するもの(13)とに分けられる。12・13は内外面を思いハケ目で仕上げる。

甌（第24図10）

甌の把手が出土している。

黒色土器（第24図17）

口径14.8cmをはかる内黒の埴で口縁端部に凹面がめぐり、内外面には指頭上痕が残る。

（祭祀用木製品）（第25図）

人形代（第25図(1)1）

全長18.1cm、最大幅2.3cm、厚さ0.2cm。頭部上端を削り、肩部はなで肩となっている。両手部はともに欠損しているが、側部の削りは残っている。足部は左足のみ残存し、足の叉部も一部分のみ残存する。顔面は、頭髮、眉、目、鼻、口（？）、あごひげが墨で描かれている。頭髮については、裏面に描かれており後頭部を表現している。

斎申（第25図(1)2）

残存長16.1cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cm。上端部は圭頭状に削っており、上部両側面に削り込みを入れている。両面側は、きれいに削ってある。下端部は欠損しており形状は不明であるが、先端部を尖らせたものになると考えられる。

今回出土した人形代の特徴は、顔面を墨で描いて表現していることであるが、このこと以外には特に墨で○印や×印などの表現は見られない。人形代が何らかの祭祀に使用された事は間違いないが、今回出土した人形代には、呪文などの墨書は無く、炭気平ゆに使用された痕跡などもないことから、「大威」などの威の行事の際に、斎申と一緒に使用され流されたものではないかと考えられる。^{注7)}

（その他の遺物）（第25図）

落ち込み部からの出土遺物として土器の他に佐波理皿、鉄製鎌、刀子が出土した。

佐波理皿（第25図(2)1）

口径19.5cm、器高3.3cmをはかるが、残存状況は全体の3/4程度である。口縁部を内傾へ折り曲げ、底部は平底である。鋳造後、ロクロ挽きにより仕上げられたと思われるが、その痕跡は見られない。なお、この佐波理皿について正倉院文部技官の成瀬正和氏に蛍光X線分析をお願いしたのでその結果を掲載しておく。

（近江町狐塚遺跡出土の佐波理皿の蛍光X線分析）

狐塚遺跡出土の佐波理皿について非破壊法による蛍光X線分析を実施した。皿は銅（Cu）（70～90%）を主成分とし、錫（Sn）（10%）、鉛（Pb）（2～3%）、ヒ素（As）（5%前後）を副成分として含む。その他、鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、銀（Ag）、ビスマス（Bi）が微量成分として含まれている。

ただし、上に掲げた半定量は表面の分析値で、中の地金の化学分析値ではない。正倉院の佐波理皿の中にも錫の含有量が少なく、ヒ素が数%含まれるものがある。^{注8)}

鉄製鎌（第25図(2)2）

かなりサビがひどく欠損している。最大幅2.1mで柄との装着部分は折り曲げる。

刀子（第25図(2)3）

長さ20.8cm（刃部10.3cm、柄部10.5cm）で刃部断面は逆二等辺三角形、柄部は逆梯形である。柄部の木質等は残存していない。

C区

(1) 独立柱建物

① S B. 1 (第27図1)

調査区の南東部に位置する3間×3間の東西棟である。後世の耕作に伴う溝によって切断される。4.56m×4.4mをはかり、面積20.1㎡である。主軸方位はN-1°-Eである。

② S B. 2 (第27図2)

C区中央の東壁沿いに位置し、東柱を有する3間×2間以上の建物である。直径0.4~0.5mの柱穴を有し、S D. 1(弥生時代後期)と重複する。主軸方位はN-2°-Eである。

③ S B. 3 (第27図3)

S B. 2の南に位置する3間×1間以上の建物である。S B. 1とほぼ同規模の建物と予想され、主軸方位はN-12°-Eである。

2. 法勝寺遺跡

法勝寺遺跡の調査は、土川沿いの一段低い水田部(A区)と、その南側の荒地と町道沿いの水田部(B区)とに分けA区より全面調査を実施した。

A区では表土下に暗茶褐色土がひろがり、その層内よりかなり磨滅をうけた弥生土器片が数点検出されたが、遺構等は検出されず、基本ベースは砂レキ及び淡青灰色粘質土層である。

なお、北東部の水源地跡部分はポンプ施設等の既設構造物によりすでに表土下1.9mまで攪乱をうけていることが、試掘トレンチにより確認されたので調査は実施しなかった。

B区との境より約0.4~0.5mの段差をもって南へ高くなっていることが表土掘削により判明し、この地域より多数の遺構・遺物が検出された。基本ベースは黄褐色砂レキ・淡青灰色粘質土である。主な検出遺構は方形周溝墓5基、古墳1基、独立柱建物19棟、溝状遺構、井戸、竈穴住居跡、土壇、ピット等である(第28区)。

以下にその主なものについて概略を述べる。

(1) 方形周溝墓

① S X. (第29図)

周溝を含む規模は南北13.1m、東西12.6mをはかり、ほぼ正方形プランを呈し主軸は北東-南西方向を向く。周溝は、深さ0.3~0.5mで西コーナーが切れており、他の3コーナーも浅くなっている。墳丘部は削平をうけて平坦になっているが、東コーナー及び北寄りに楕円形の土壇2基(1.3×2.4m、1.1×2.3m)が検出されたが、主体部と判断できる要素は得られなかった。

周溝内には供献土器が確認され、北・東・西周溝において比較的まとまっている(第30~32図)。いずれも周溝底部より浮いた状態であり、墳丘部にすえられていたものが土砂の流入により溝内に混入したものとされる。遺物と出土状況(第30~37図)

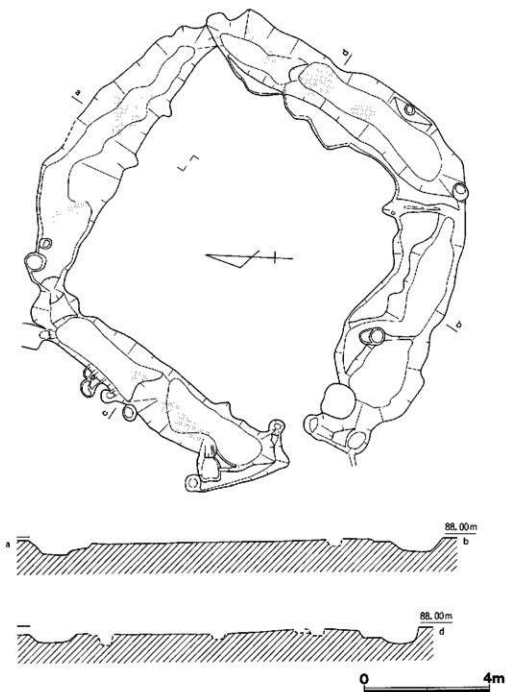
主な器種として広口壺、紅頸壺、無頸壺、「くの字状口縁」甕、「変口状口縁」甕、高環等がある。

(壺)

広口壺には、A~C類がある。



第28图 法隆寺遗址B区出土遗物图

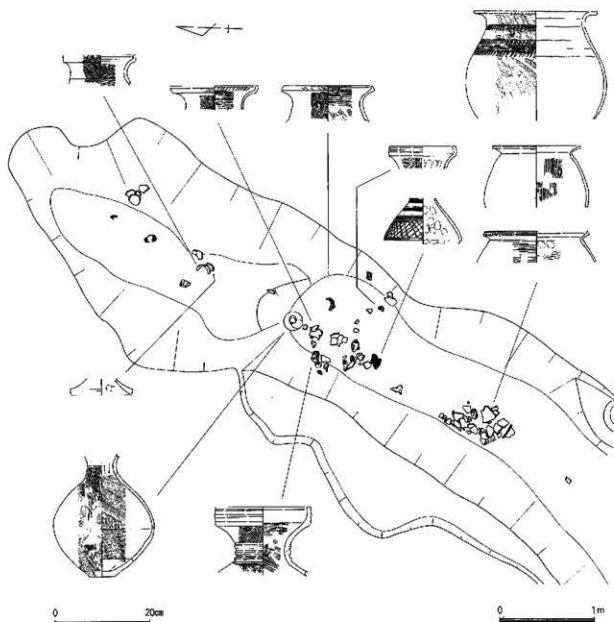


第29河 方形周溝墓 SX. 1

広口壺A類は、口縁部が大きく外反するもので端部が肥厚しておわるものA、類と垂下しておわるものA₂類とに分けられる。A₁類は第33図1～3・5が相当し、端面を櫛描による格子文・波状文・刺突文等で飾り、口縁部内面にも波状文・直線文を施す。A₂類の4は口縁部内面を綾杉文によって裝飾する。

1は東、2は北、4は西周溝からそれぞれ出土している。

いわゆる甕の「受口状口縁」風の11縁を有するB類(6)、受口状に立ち上がる口縁部外面に数条の凹線文を施すC類がある。B類の6は口縁部端が上方へのび口縁部外面に鋸齒文、頸部外面に刺突列点文を施し、ハケ目による調整を行なう。東周溝内より出土している。C類には、第33図7～10、第34図1・2がある。8・9、第34図1・2は口縁部外面に2条、7は4条の凹線文を施し、頸部外面には前者は突帯十刻目文、後者は3条の突帯を



第30図 方形周溝墓 S X. 1 東周溝内遺物出土状況

(白土スケールは土器に対応)

めぐらせる。内外面の調整は、基本的に粗いハケ目調整で仕上げる。なお、7は他にくらべ胎土が細かく焼成も堅い。第34図1・2は西周溝内より横倒しのまま押しつぶされた状態で近接して検出された。1は口径21.6cm、推定器高68cmで楕円形の体部を有し、2は口径17.4cm、推定器高45.6cmをはかる。

なお、7が東、8・10は北周溝内よりそれぞれ出土している。

細頸壺として体部中位に張りもち、筒状細い頸部の付くA類には第34図3がある。内外面は比較的細かいハケ調整である。口縁部を欠くが、外方へ大きく開いて単純に面をもっておわる口縁部が付くものと思われる。東周溝内より頸部を上方へ向け溝底より浮いた状態で出土している。

同じ細頸壺の類として第35図3のB類がある。体部 $\frac{1}{2}$ 程度の残存状況ではあるが、体部下半に張りもち、外面を櫛掻きによる直線文・麻状文・刺突列点文・斜格子文で裝飾し、筒状の頸部からやや内弯する口縁部へつがる。東周溝内より出土している。

第35図1は、弱く外反する口縁部が上方へのび受口状をなすC類である。口縁部外面に3条の凹線文がめぐり、体部は確認されていないが、中・下位に張りをもつ形態（B類に似る）を呈すると思われる。

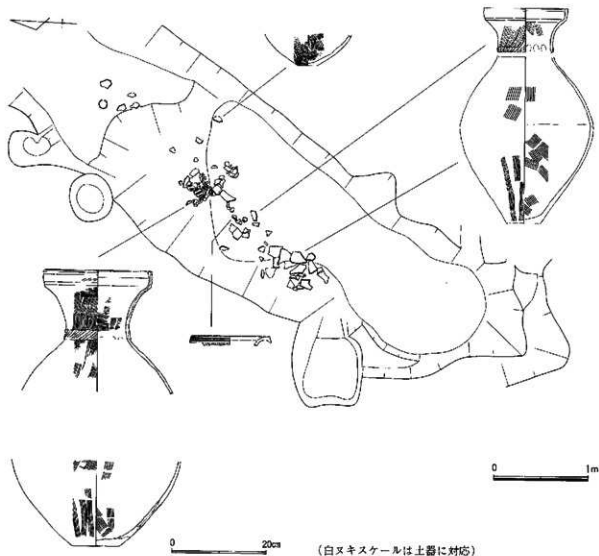
2は内等気味に立ち上がる口縁部の外面に凹線文がめぐるもので細頸壺D類として区別する。

無頸壺としては、第35図4のように体部中位に張りをもち、口縁部が短く外反するA類と5のようにくの字状口縁を有し、端部が上方へつまみだされるB類とがある。4は内外面粗いハケ目調整で口縁部に紐孔が認められ、北周溝内より出土している。5もハケ目調整し、体部中位外面には刻目文が施され、2個1対の紐孔が2ヶ所に認められる。

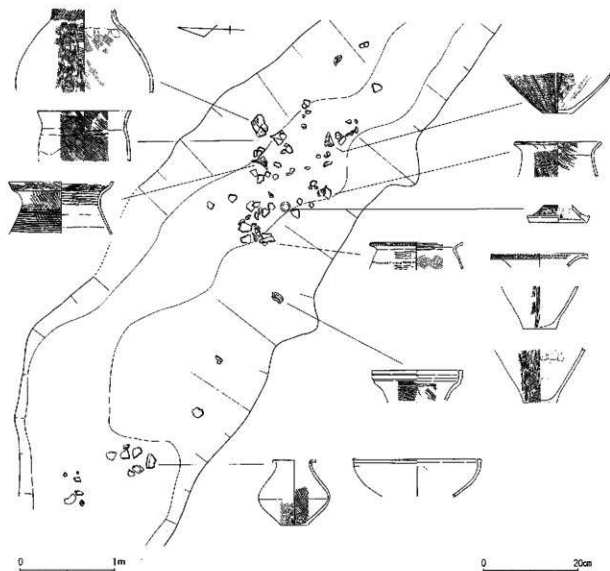
〈要〉

要は、口縁形態により「くの字状口縁」を有するA類、口縁部がゆるく外反するB類、「受口状口縁」を有するC類に大きく区分できる。

A類はさらに外反のゆるいA₁類（第35図7・8）、端部がややつまみ出されるA₂類（9～11、第36図1・2）に細分される。7・8は内外面にハケ目調整され、体部の張りが弱く、8の口縁部端面にもハケ目が残る。A₂類は口縁部端面に凹線文のめぐるもの（9、第36図2）と刻目文のめぐるもの（10・11、第36図1）とがあり、



第31区 方形周溝墓 S X.1 西周溝内遺物出土状況



第32図 方形周溝墓 SX. 1 北周溝内遺物出土状況（白ヌキスケールは土器に対応）

内外面の調整はハケ目が基本であるが、第35区11、第36区1の外面にはタキ目が残る。

なお、第35区7・8・11は北、9は南、第36区1・2は東周溝内よりそれぞれ出土している（第30・32図）。

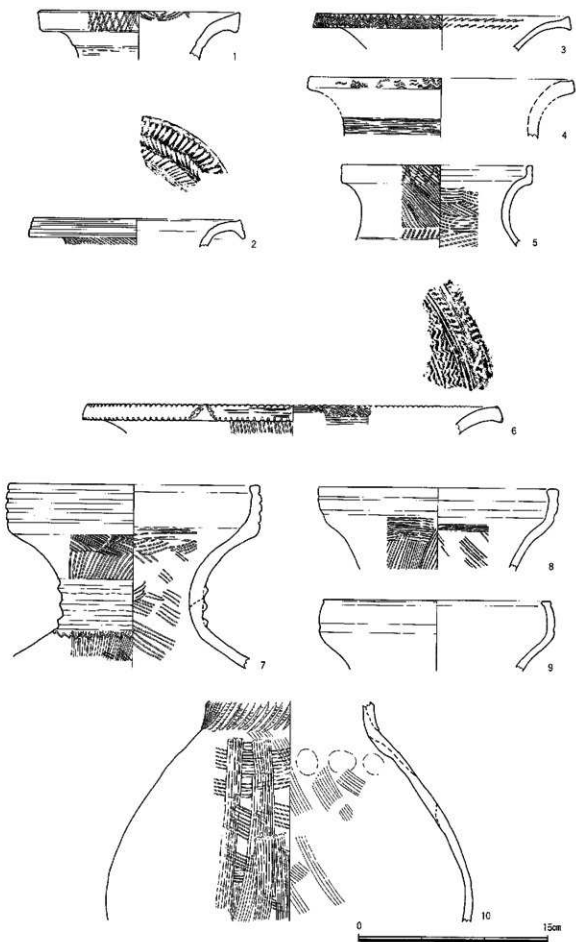
B類は第37区1～3に相当し、内外面をハケによって粗く調整、肩部を直線文・刻目文で飾りつける。1・3は口縁部端面の上下を刻んでいる。なお、3は東周溝内より出土している。

C類はいわゆる近江系の「受口状口縁」型で口縁部の立ち上がりがやや内湾気味の第36区3・4・8と、やや開き気味に立ち上がる5～7・9とがある。いずれも内外面を粗いハケ目調整し、刺突列点文・直線文等の装飾を加えている。4・5は東、6は南、7は北周溝内から出土している。

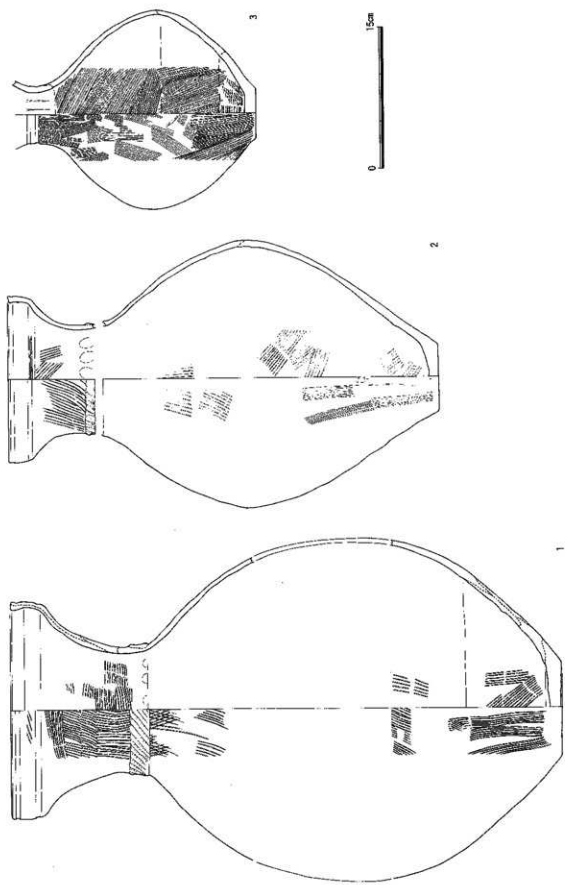
〈高坏〉

高坏には、水平に広がる口縁部の内面に突帯を有し、肩部が垂下する環部をもつA類（第37区4）と、壺形の環部の口縁部外面に凹線文のめぐるB類（第37区5）とがある。

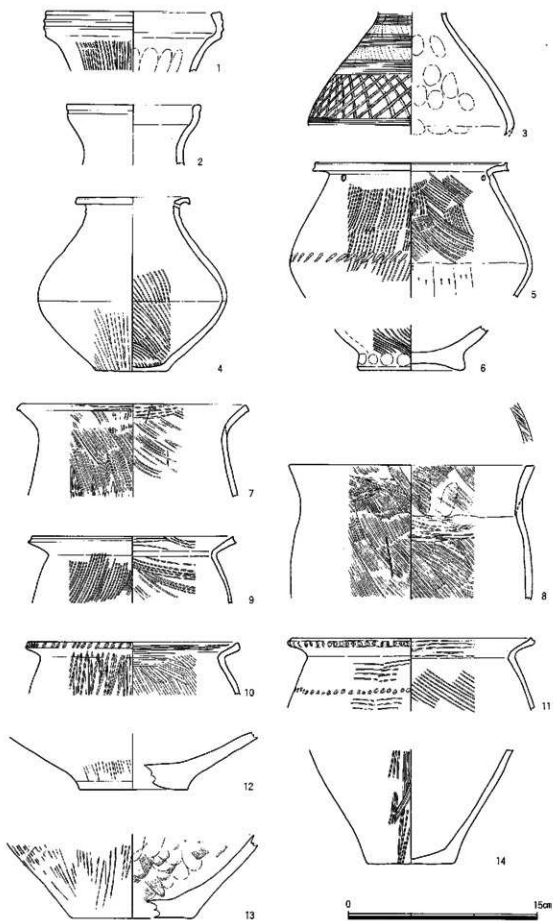
6・7は高坏の脚部で内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキ調整であり、7には2個1対の透しが6方向に穿たれている。



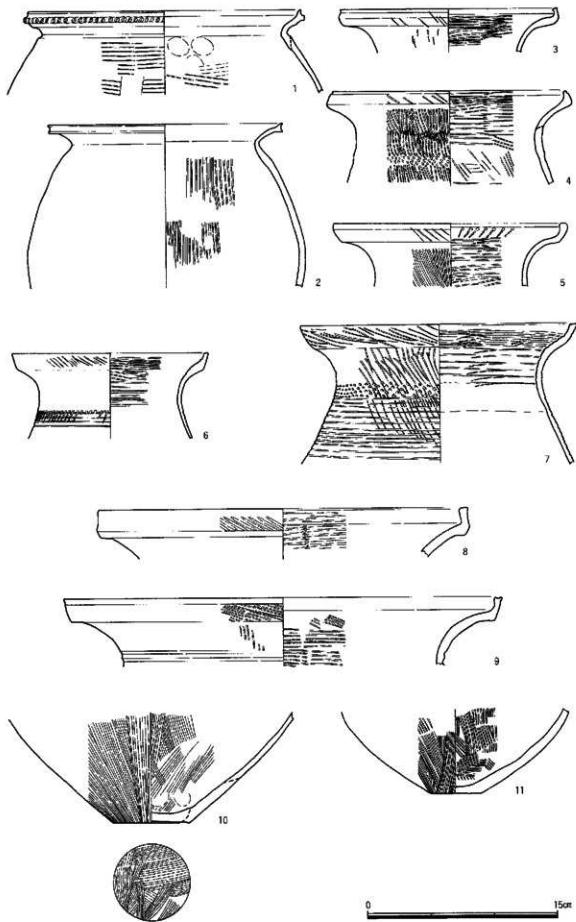
第33图 方形肩罐整 S X. 1 出土土器(1)



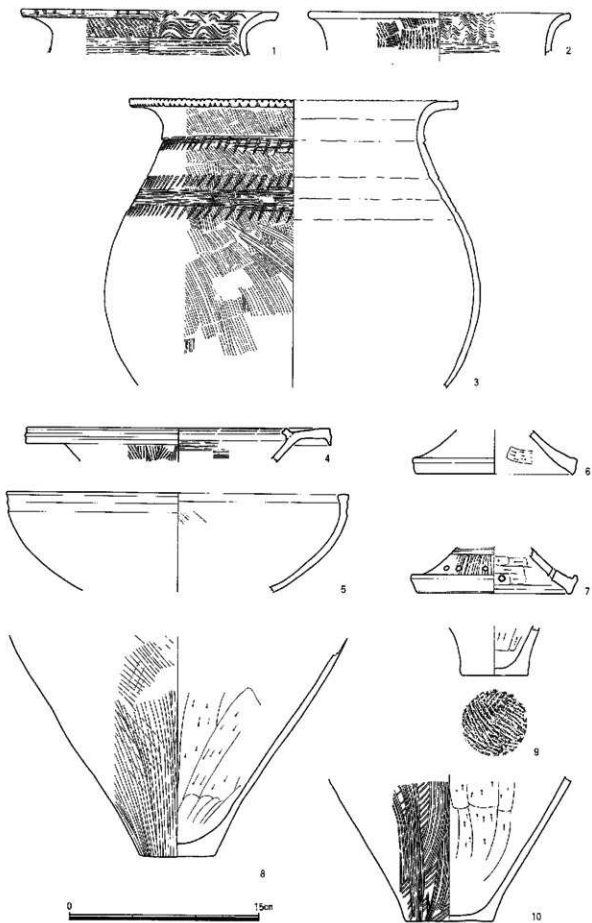
第34圖 方形陶甕墓 S. X. 1 出土土器(2)



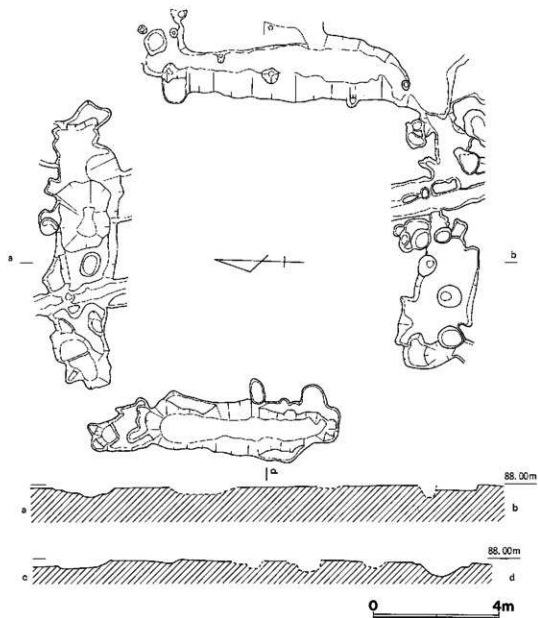
第35圖 方形周鬯 S X. 1 出土土器(3)



第36图 方形周沟釜 S X. 1 出土器(4)



第37图 方形周青铜 S X. 1 出土土器(5)



第38図 方形周溝墓 S X. 2

②S X. 2 (第38図)

孤立柱建物の柱穴、ピット等による凹凸がかなり著しいが、南北13.6m、東西13.3mをはかる正方形プランを呈する。周溝は幅1.5~2.0m、深さ0.2~0.5mと浅く、四コーナー共に切れている。主軸方位はほぼ南北方向である。

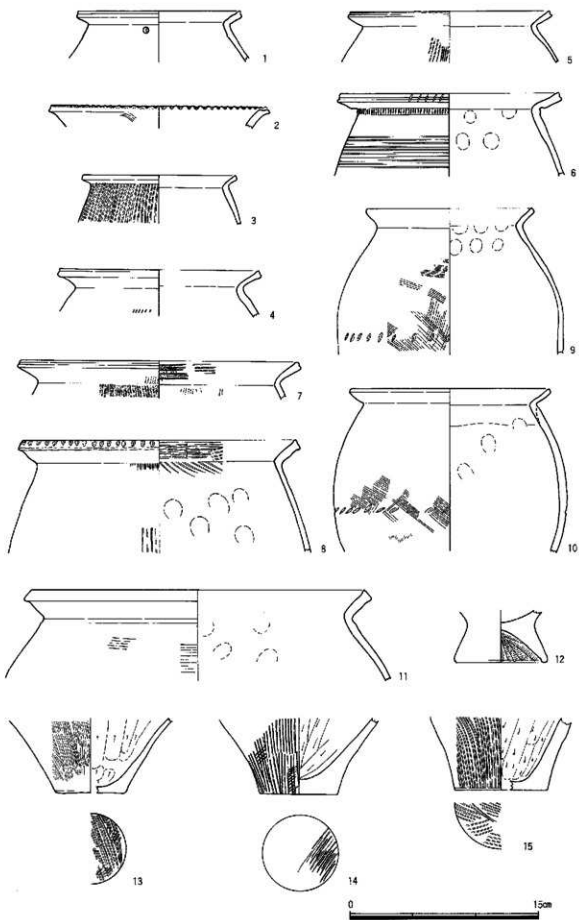
出土土器は他の周溝墓にくらべて少ない。

遺物と出土状況 (第39・40区)

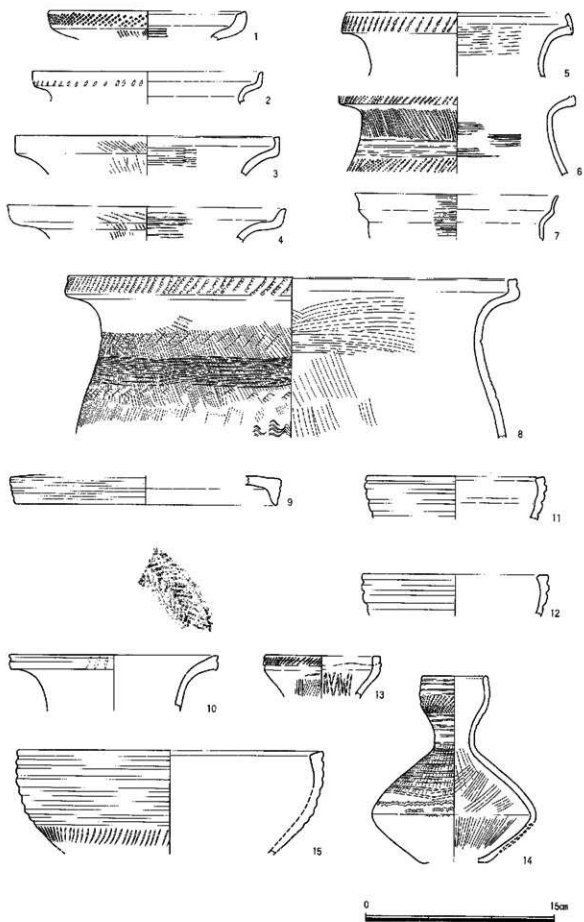
S X. 2の周溝内からは、広口壺、細頸壺、「くの字状口縁」甕、「受口状口縁」甕等が出土しているが、相片が多い。

〈壺〉

広口壺A類に属するものとして端部が肥厚しておわるA1類(第40区10)と垂下しておわるA2類(9)とがあり、前者の内面には綾杉文が認められる。



第39图 方形周溝墓 S.X. 2出土土器(1)



第40区 方形沟渠墓 S X. 2出土器(2)

11・12は小破片であるが、口径は小さく細頸壺C類に属するものであり、外面には3～4条の凹線文がめぐる。細頸壺B類に属するものとして14・15がある。中に張りをもつそばん玉形の体部に筒状の頸部から内穹気味の口縁部につながるもので外面に凹線文・刺突列点文・直線文・波状文で飾る。底部のみを欠くが、淡黄褐色の色調を呈し、東周溝内の土層観察用断面より浮いた状態で出土している。15は内穹気味の口縁部外面に凹線文・刻目文をめぐらしており、B類の大型品である。

13は内穹気味に立ち上がる口縁部外面に凹線文がめぐり刺突列点文を加える。D類に属する。

無頸蓋第39図1はくの字状口縁を有し、端部が上方へつまみ出されるB類に属する。紐孔を有する。

(要)

壺については「くの字状口縁」壺A類(第39図2～11)と「受口状口縁」壺C類(第40図1～6・8)とがある。

A類は口縁端部に面をもっておわり、凹線文ないしは刻目文が施される。調整はハケ目が基本と思われるが、タタキ目を残すものはない。7は頸部外面をやや肥厚させて刻目文を施し、肩部には直線文がめぐる。また、7・10は肩部の張りが弱く、中に刻目文がめぐる。

C類は第40図1～6・8がある。1・2・5・6・8の外面は刺突列点文・直線文・波状文によって裝飾され、3・4はハケ目調整である。8は口径35.2cmと他に比べて大きく、SX. 3でも類似品が出土している(第43図11)。

③SX. 3(第41図)

東コーナー部は大木根により調査不可能であったが周溝は西コーナーで切れ、南北10m、東西11.2mをはかる。

SX. 1と20m弱隔てて立地するが、主軸方位はほぼ等しい。墳丘部は削平をうけて平坦である。

北周溝内から比較的まとまって供献土器が検出されたが、いずれも溝底より浮いた状態で確認されている。

遺物と出土状況(第42～45図)

SX. 3は西周溝内からの遺物の出土が多い。

主な器種として大口壺・細頸壺・「くの字状口縁」壺・「受口状口縁」壺・高環等がある。

(壺)

大口壺はA₂類(第43図3)の他に口縁端部を下方へ折り曲げ外面に刻目文を施すA₃類(1)、受口状口縁風に端部を上方へつまみ上げるA₄類(2)がある。3は表面の刺刺が著しいが口縁端部を垂下させ、外面に3条の凹線文、内面に刻目文を施す。西周溝内より出土している。2はつまみ上げた口縁部外面に襷杉状の刻目文を配し、内外面をハケ目で仕上げる。

細頸壺D類として4がある。口縁部外面に凹線文がめぐる。

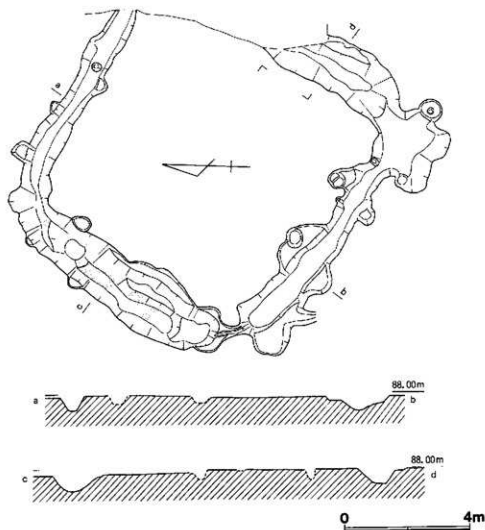
6は細頸壺E類で口径6.9cm、器高12.3cmの完形品で口縁端部が丸く上方へつき出す。裝飾はなく、上半はナデ、外面下半はハケ目、内面はヘラケズリによって仕上げる。

(要)

壺は「くの字状口縁」のA類(第44図1～8)、「受口状口縁」のC類(11、第45図1～5)、二重口縁のD類(第44図9・10)がある。

A類の第44図1・2・5は、端部をわずかに上方へつまみ上げ、端面に凹線文がめぐる。3・7・8の端面は刻目文が残る。8の口縁部はやや外反気味である。6・8は西周溝内から出土している。

C類は、口縁部が内傾するもの(第45図1・3)とそうでないもの(第44図11、第45図2・4・5)とがある。



第41図 方形周溝墓 S.X.3

前者は外面に刺突列点文・直線文の装飾を加え、内面頸部に横方向のハケ目が残る。後者のうち第44図11は口径が大きく大型で口縁部外面に刺突文、頸部外面に刺突文・波状文を施し、全体をハケ目調整で仕上げる。西周溝内より出上している。また、第45図5は口縁部が上外方へのび、頸部外面には刻目文が乱雑に並んでいる。

二重口縁の変として第44図9・10がある（D類）。頸部が屈曲し、ゆるく内弯気味に立ち上がる口縁部を有する。

〈高環〉（第45図）

高環は碗形の環部の外面に凹線文のめぐるB類（第45図6）と脚部が出上している。脚部の7は外面ヘラケズリ調整し、端面に凹線文がめぐる。8は外面に8条の凹線文がめぐる、9は頸部を肥厚させ外面をハケ目調整で仕上げる。

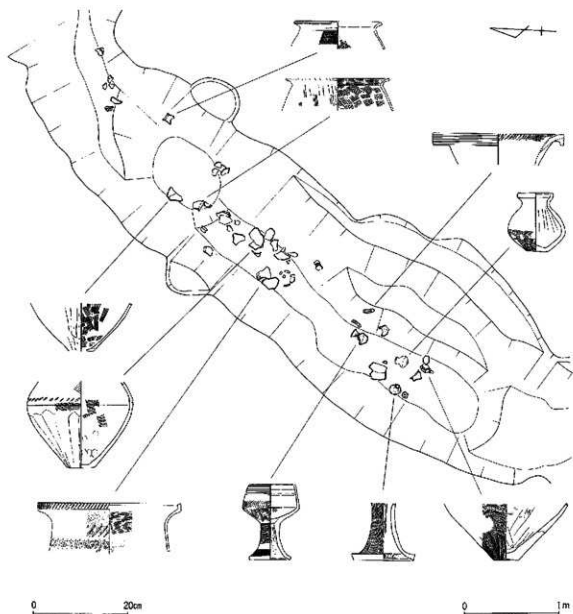
10は完成品で（口径9.6cm、器高15.9cm）、ワイングラス形を呈し、口縁外面に4条の凹線文・綾杉状の刻目文、脚部外面には凹線文が2段にめぐる。8も同様の高環脚部片であろう。C類とする。

なお、9・10は西周溝内から出土している。

第43図7・10・11の壺体部は倒卵形を呈し、外面上半・内面はハケ目、外面下半はヘラケズリ調整である。

④ S.X. 4（第46図1）

調査区南東隅にL字状の周溝を確認したが、昭和57年度の試掘調査の折に第4トレンチにて検出済みのS.D.



第42回 方形周溝墓 S X、3 四周溝内遺物出土状況 (白ヌキスケールは土器に対応)

8と連結したため、一辺14m余りの方形周溝墓と判断する。

主軸方位は南北方向を向き、北・西・南周溝の一部を検出した。北周溝内より比較的まとまった土器の出土を確認した。

遺物と出土状況 (第47~49回)

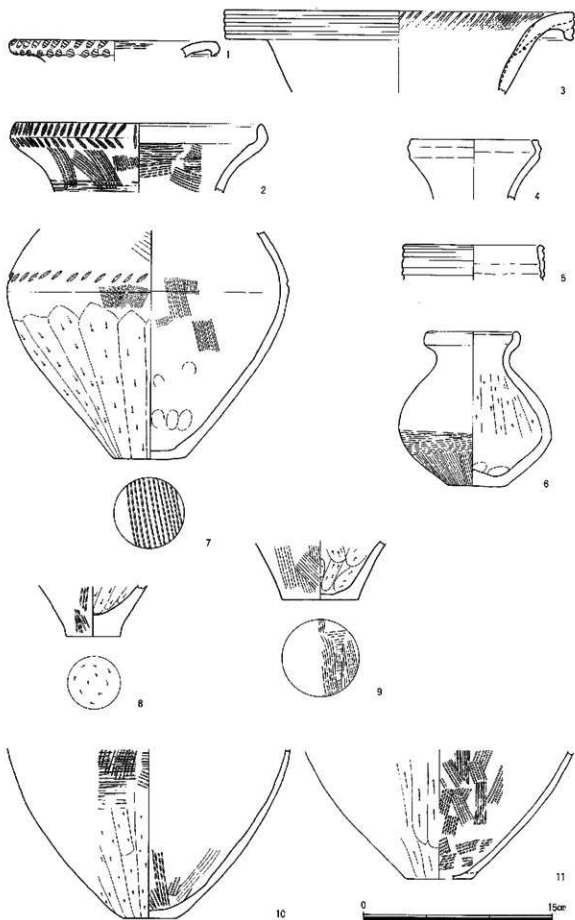
器種として広口壺、「く」の字状口縁壺、「受口状口縁」壺、「S」字状口縁壺、手埴形土器、「受口状口縁」鉢、高坏等がある。

〈壺〉 (第48回)

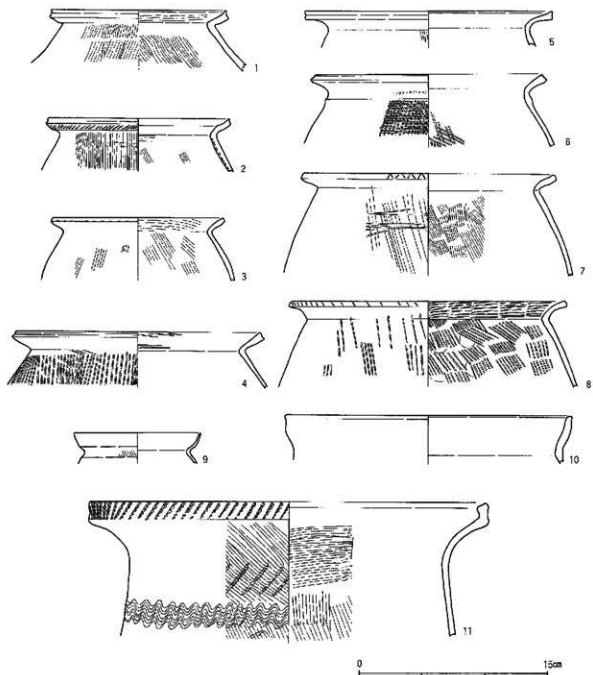
広口壺A類として第48回1があり、大きく外反する口縁部の端面に凹線文がめぐる。

2は口縁端部を上方へつまみ上げる形態である。

3はいわゆるパレススタイル形の壺D類であり、球形の体部に端部が大きく垂下する口縁部が付く。端面には4条の凹線文がめぐり、肩部外面は直線文・円形文で飾る。



第43图 方形周薄器 S X. 3出土十器(1)



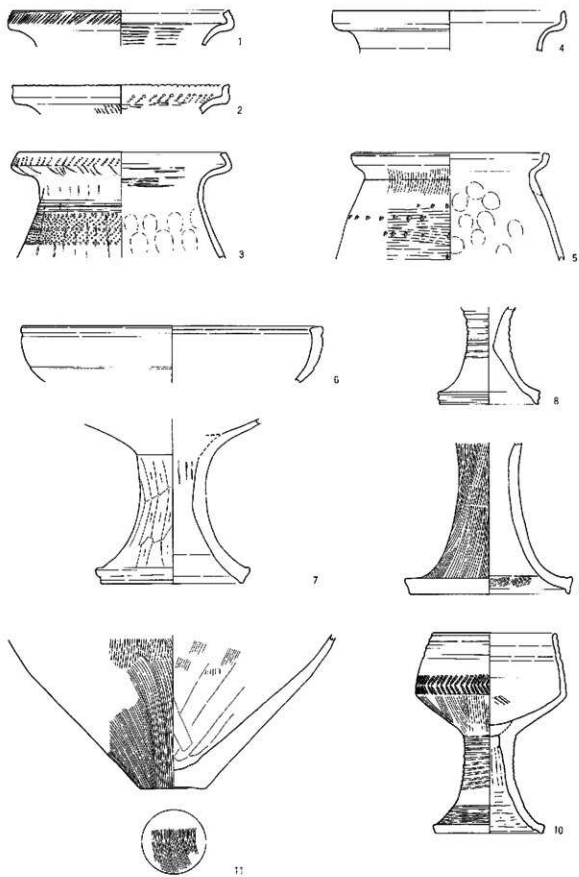
第44図 方形周溝碗 S X. 3出土土器(2)

(變) (第48・49図)

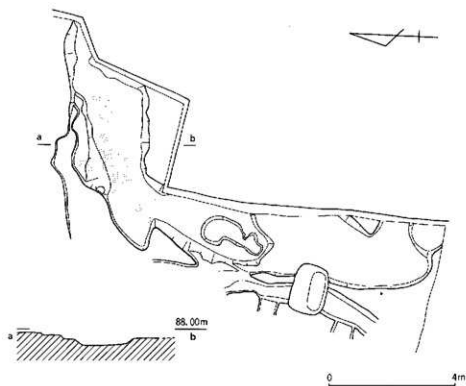
A類の「くの字状口縁」甕は第48図15があるが、口縁部は直線的にのびて外部にはタタキ目が残る。

C類の「受け状口縁」甕には口縁部がほぼ上方へのびるものC類(第48図4・5・8)、頸部が若干長く端部が上方へのびるものC₁類(6・7・9)、口縁部が屈曲して上方へのびるものC₂類(10・11)、口縁部全体が外上方へのびるものC₃類(12~14)がある。4・5の外表面には刺突列点文ないしは直線文が残る。6~8は刻目文・直線文が残る。12は球形の体部に屈曲の強い口縁部が付く。

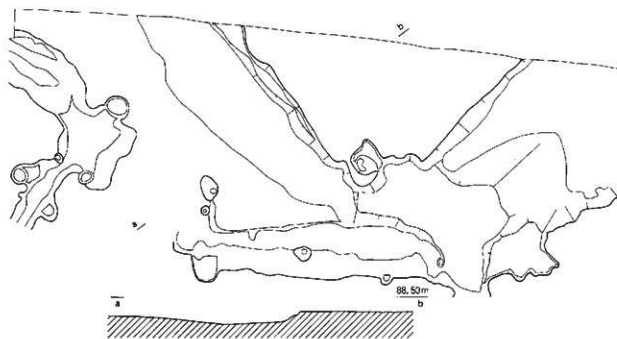
第49図1は、いわゆる東海系の「S字状口縁」甕(D類)で、口縁部外面には雑な刺突列点文、内外面にハケ目が残る。2はその脚台で非常に薄手であり、外面にハケ目が残る。色調は暗褐色を呈し、他とは異なる。



第45图 方颈陶器 S X. 3出土器(3)

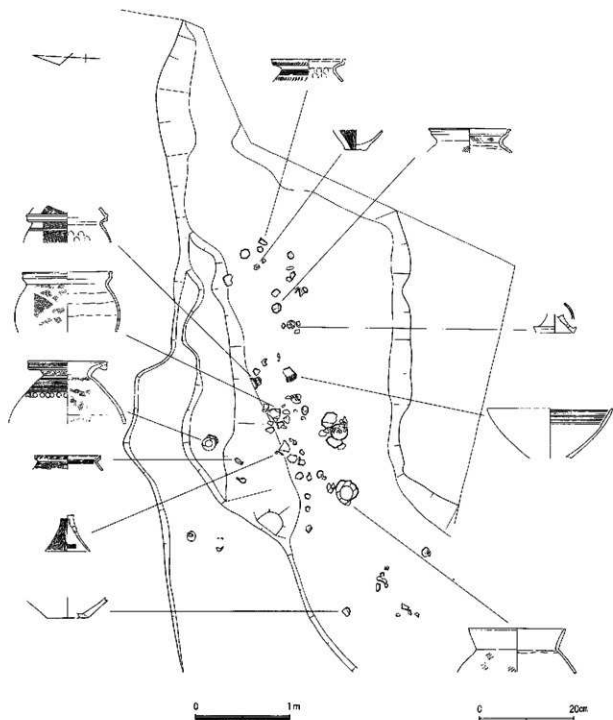


(1) 方形周溝墓 S X. 4 (断面は土器出土地点)



(2) 方形周溝墓 S X. 5

第46区 方形周溝墓 S X. 4・5



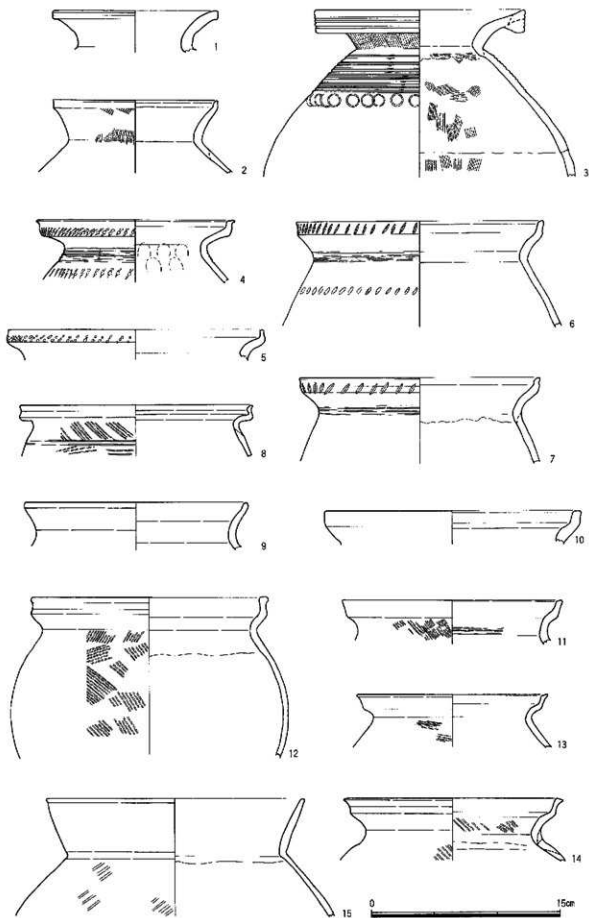
第47図 方形坑溝墓 S X. 4北周溝内遺物出土状況

〈手埴り形土器〉(第48図)

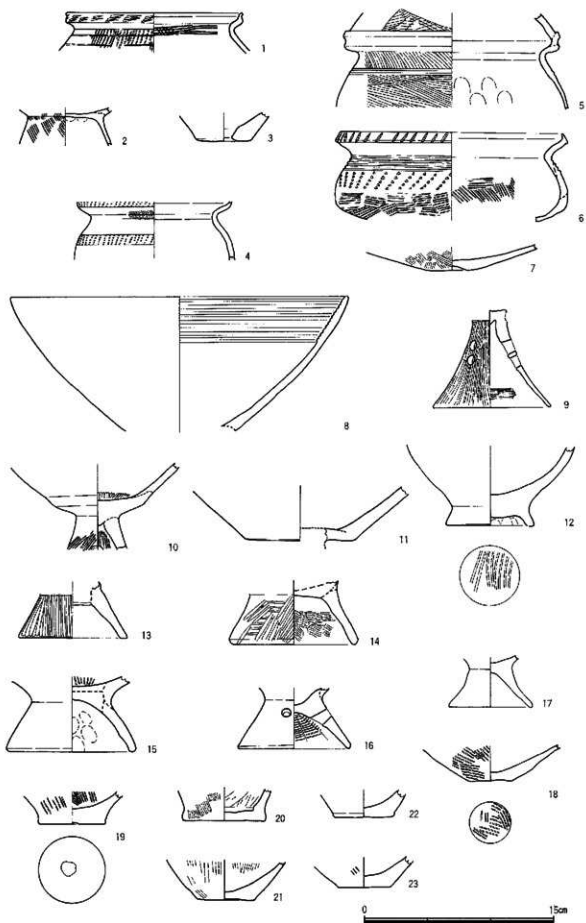
第49図5は手埴り形土器で「受口状口縁」形の鉢に笠状の天井部の付くものである。天井部外面には線刻が残り、体部外面はハケ目で仕上げる。淡褐色を呈し胎土は精良である。

〈鉢〉(第49図)

「受口状口縁」を偏平にした形態をとる鉢で外面を刺突列点文・直線文で飾り、内外面をハケ目調整で仕上げる。鉢A類とする(第49図4・6・7)。3は有孔鉢の底部である。



第48图 方形沟墓 S X. 4出土器(1)



第49图 方形瓦甬 S X. 4出土土器(2)



第50圖 S X. 5遺物出土状況

〈高環〉(第49図)

高環は環部口縁が大きく開き、内面を肥厚させて数条の凹線文がめぐるD類(第49図8)が出土している。11はその底部にあたり、口縁部との境がはっきりしている。

10は環底部が小さく口縁部が大きく開く形態(E類)を呈す。

9は八の字状に開く脚部でヘラミガキ調整し、2段3方向の円孔が穿たれている。

〈その他〉

第49図12~17は台付變の脚台部、18~23は壺・甕の底部である。12は他にくらべて脚台が低く、底部内面にハケ目が残る。

⑤S X. 5 (第49図(2))

調査区東壁沿いに西側半分のみ確認した方形周溝墓でS X. 2の東側周溝部と切り合うが、前後関係は切り合ひでは確認できなかった。S X. 5は法勝寺地区内で今回確認された方形周溝墓の中で最も規模が大きいと判断されるが周溝部の残存状況は良好とは言えないため外側の周溝部の立ち上がりは判断としない。また、出土土器についても、S X. 5検出面の直上には黒褐色土の遺物包含層が堆積している。後で述べるように本来のS X. 5の周溝内遺物と遺物包含層の遺物とが混在した状況で検出されているため、S X. 5の築造時期決定にやや不安をいだかざるを得ない点のあることをこたわっておく。

推定規模は周溝を含めて一辺約20m程度をはかると思われ、主軸は北東・南西を向く。

遺物と出土状況(第50図)

S X. 5は北・西周溝のみ確認できたにすぎないが、その出土土器は非常に多量である。しかし、周溝墓検出面の直上には遺物包含層があり、その層内の遺物と本来のS X. 5の遺物との区別については検出時には困難であった。ゆえに、とりあえず造構面にレベル的に近いものをS X. 5の遺物として取り上げたものであるが、混在しているものと思われる。

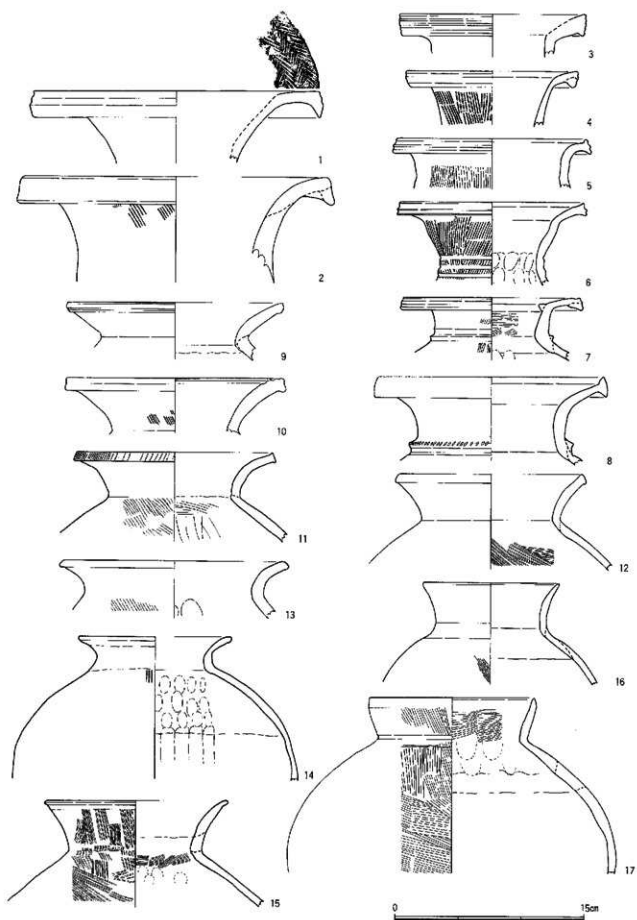
器種としては、広口壺、直口壺、長頸壺、細頸壺、小型壺、「くの字状口縁」甕、「受口状」縁甕、「S字状口縁」甕、「受口状口縁」鉢、高環、器台、小型器台、手づくね土器等がある。

〈広口壺〉(第51~53図)

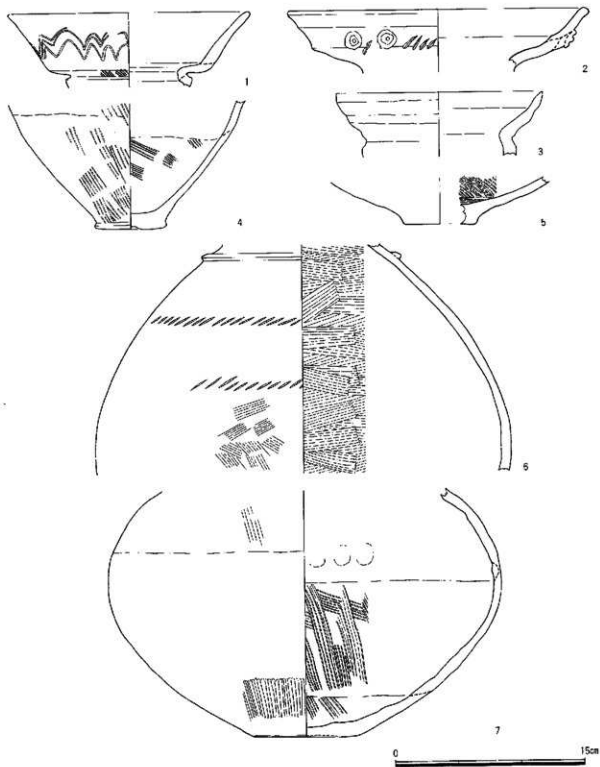
広口壺にはI縁部が大きく外反し、端部の垂下しておわる第IV様式のA₁類の流れをくむもの(第51図1・2)、端部を肥厚させて凹線文をめぐらせるA₂類の流れをくむもの(3~6)、外反度が大きく端部を内外に肥厚させ肩部外面に突帯のめぐるもの(7・8)、大きく外反した口縁端部に面をとるもの(9~12)、肩部のカーブが丸味をもち短くI縁部の外反するもの(13・14)がある。

第52図1~3は二重口縁壺で、1は頸部から大きく屈曲してI縁部へのび外面には非常に雑な波状文がめぐる。2は頸部とI縁部との境で角度を変えて外上方へのび、その境には円形浮文・刻目文の装飾を加える。3は口縁部の外面に縁線がめぐるものである。1~3はいずれも残存状況が悪くその全容は明確でない。

第53図1・2はいわゆるバレススタイル形の広口壺である。1は頸部外面に断面三角形の突帯がめぐり、外面に刻目文が施され、口縁端部は下方に肥厚させて外面に凹線文がめぐる。また、内面には沈線文・縹彩文が装飾される。2は頸部外面に円形刺突文のある突帯がめぐり、端部の垂下する口縁部外面には凹線文と棒状浮文が施される。さらに内面に細かい波状文・円形刺突文・沈線文が加飾される。一部朱が塗彩されている。4はこの形態の体部となるもので中位に張りもち、円形の底部が付く。肩部には直線文・刺突列点文がめぐり、体部外面をヘラミガキで仕上げる。

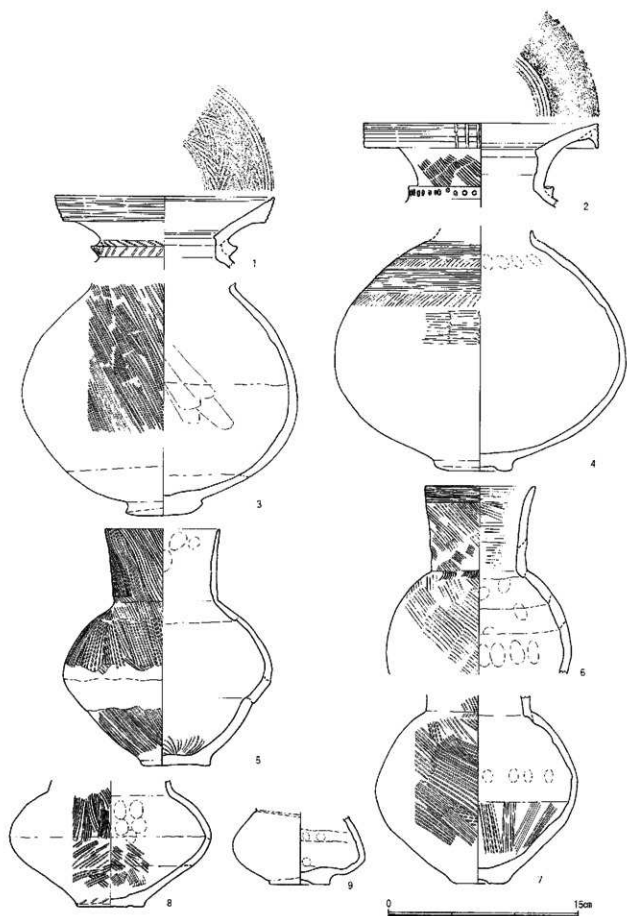


第51图 方形高溝墓 S X. 5出土土器(1)



第52図 方形溝墓 S X. 5出土土器(2)

第52図6・7、第53図3は、広口壺の体部と思われる。6は肩の張らない球形の体部の内外面をハケ目で仕上げ、肩部には突帯・刻目文がめぐる。7は中位に張りのあるやや扁平な体部で外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整で仕上げる。第53図3はややいびつな球形体部を外表面は粗く雑なハケ目、内面をケズリ上げ、円形の底部が付く。



第53图 方彩周清墓 S X. 5出七上器(3)

〈直口壺〉(第51図)

第51図15～17は直口壺の類で、15・16はほぼ球形の体部に、直口気味にわずかに外反し先細りに終わるI線部の付くものである。17は口縁部が外反せず、端部をつまみ出しておわるもので外面に細かい丁寧なハケ目が残る。

〈長頸壺〉(第53図)

頸部はあまり長くない、直線的で先細り気味におわる。第53図5～7があり、5は中位に張りのあるややソロバン玉形に近い体部と口縁部外面を丁寧にハケ目で仕上げる。6は体部に張りがなく球形に近く、外面及びI線部内面をハケ目で仕上げる。7も同様にハケ目とナデによって仕上げる。

8も細頸壺の類かと思われるが、体部が扁平で内外面ハケ目・ナデによって仕上げ、9は手づくねの体部である。

〈細頸壺〉(第54図)

短く直線的にのびる頸部を有し、体部はソロバン玉形を呈する。内外面はヘラミガキで仕上げられると思われるが、残存状況が悪い。第54図1～8がある。

〈甕〉(第54～56図)

甕は、第IV様式からの流れをくむ「くの字状口縁」を有するA類、「受口状口縁」を有するC類、東海地方の影響下の「S字状口縁」を有するD類がある。

「くの字状口縁」甕の第54図12～16は、口縁部の外反が大きく端部に面をもっておわる。12は口縁部ののびが直線的で肥厚しており、13は端部外面に刻目文が残る。14の体部内外面はハケ目、15・16の外面には左下がりの平行タタキ目、内面はナデ調整である。17はこの形態の体部と思われ、外面には左下がりの平行タタキ目、内面にはハケ目が残る。

「受口状口縁」甕には第54図18～23、第55図、第56図がある。

第54図18～20は口縁部外面が若干凹み、端部に内傾面を有する。I線部外面の屈曲部には刺突列点文が残り、肩部外面に櫛描直線文がめぐる(C類)。第54図21・22、第55図1～7は基本的に「受口状口縁」形態を呈するが、屈曲部にシャープさがなく、口縁端部の面もあまり丸味を帯びる。21・22は無文であるが、1～7は、口縁部外面に刺突列点文・刻目文、肩部外面には櫛描直線文・刺突列点文が残る。内面は頸部に指頭上痕が残り、他はナデないしハケ目調整である。第54図23、第55図8、10は、頸部が上方へ立ち気味で屈曲し口縁部も上方へのびる。無文である。

第55図12～19、第56図1～7は頸部が長く外上方へのび、I線部は短く立ち上がる(C₂類)。口縁部外面及び肩部外面に装飾を加えるものが多く、刺突列点文は第55図13・14・17・第56図1～7に、刻目文が第55図12・16・18・19、第56図2・4・6にそれぞれ加飾され、肩部の装飾には櫛描直線文と共に認められる。内外面の調整は、外面はハケ目を中心で、内面には指頭上痕及びナデが残る。体部の形態は張りが弱く、中位に最大径をもつ。第56図6は他にくらべて異質で外面のハケ目、装飾も粗く雑である。

第56図9は器壁が薄く口縁部の屈曲がシャープで無文である。体部は球形を呈すると思われる。

10・11はI線部の屈曲が弱く上方へのびた状態を呈し、端部に外傾面を有する。球形の体部外面に左下がりのタタキ目を残し、内面はナデ調整である。9の退化形態と思われる。

第55図20～22はC₂類の甕底部に付く高台であり、器壁は厚くハの字状に開く。

〈鉢〉(第57図)

鉢には甕の口縁形態C類をほぼ踏襲するものA類(第57図1～12)とハの字状に開くB類とがある。量的には

A類の方がはるかに多い。

A類には甕の形態と同様に口縁部の屈曲が丸味をもち、外面に刺突列点文・刻目文・直線文で加飾し、内外面をハケ目で仕上げるもの(1・2・5・10)と頸部が比較的長く口縁部が短く立ち上がり、刺突列点文・刻目文・直線文で加飾されるもの(3・4・6・9・11・12)がある。7の口縁端部は極端につまみ上げられ、11の肩部外面には直線文の他に雑な波状文が認められる。12の口縁端部は内側に折り曲げられた縁相を呈し、体部下位に突帯がめぐる。無文である。体部の形態は中位に張りをもち、扁平である。

B類として蓄連的なものは図化していないが若干認められ、体部は八の字状に開き内外面ハケ目調整である。13はやや内弯気味に開き、ハケ目調整で仕上げるが、本来、壺として作成されかけたものが途中で鉢に転用されたと思われる。

〈高坏〉(第57・58図)

高坏は第V様式に特徴的な外方へ大きく開く底部に角度を変えて大きく外反する口縁部の付加された坏部を有し、八の字状に大きく開く脚部の付くF類(第57図14~17)と口縁部と底部に明瞭な境を形成する碗形の坏部を有するC類に(18)、口縁部と底部との境があまくなったE類(第58図1・2)、大きく内弯気味に開く口縁部内面を肥厚させて数条の凹線文をめぐらせるD類(3~6)があり、その形態はバラエティに富んでいる。

第57図14~17は坏部の口縁部と底部との比率が等しいか口縁部の方が大きくなっている。内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。口縁部の外反はかなり外方へ流れている。17は小型化しており、口縁部内面に一条の凹線文がめぐる。

18は大きく内弯する坏部で内外面ヘラミガキ調整で仕上げる。口縁部外面に凹線文をめぐらせ、八の字状に開く扁平な脚部が付加するものと思われる。

第58図1・2は極端に小さくなった底部に直線的に開く口縁部の付く坏部で境が明瞭ではなくなっている。内外面ヘラミガキ調整である。

3~6は内弯気味に大きく開く口縁部内面を肥厚させて凹線文をめぐらせるもので極端に小さな底部が付き、7~9のようにやや内弯気味に開く脚部が付加するものと思われる。10~12は八の字状に開く脚部で、10は凹線文・刻目文が施される。

〈器台〉(第58・59図)

器台は、エ字状に開くA類(第58図14・15・19)、受部と脚部との内面の被線の明瞭なB類(第58図18、第59図1~9)、脚部がやや筒状を呈して大きく開くC類(10~16)、口縁端部が大きく垂下するものD類(第58図16・17)、小型器台に属するものE類(20・21)がある。

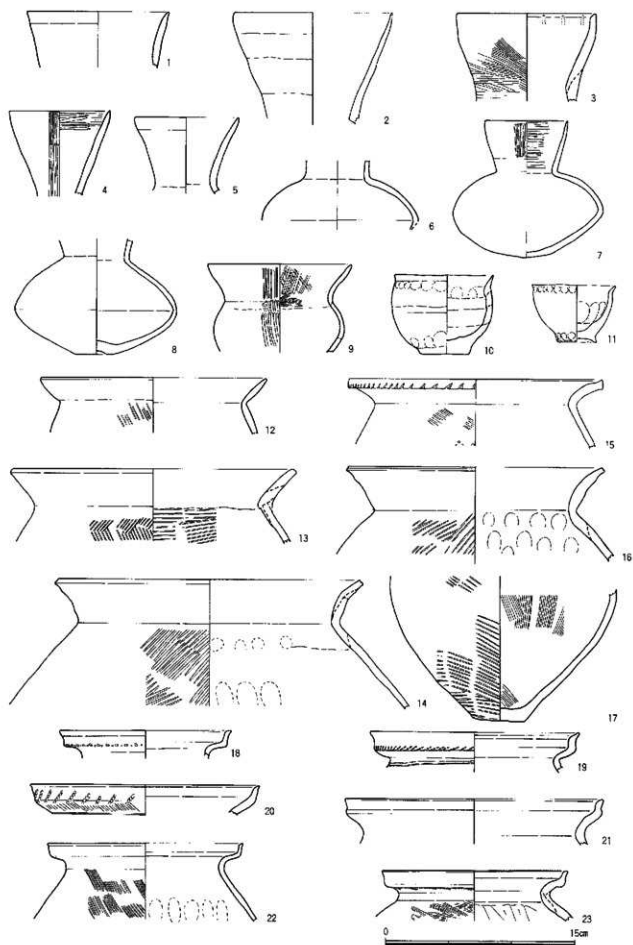
第58図15・19は14にくらべて外反が著しく外面に丁寧なヘラミガキが残る。

受部と脚部との境の明瞭なB類のうち、18は受部がやや内弯気味で増部に凹線文がめぐるのに対し、第59図3~9は受部ののびが直線的で増部に平坦面をもっておわるのみである。脚部は、高坏脚部のように大きく開くのみである。5の脚部外面には凹線文がめぐる。

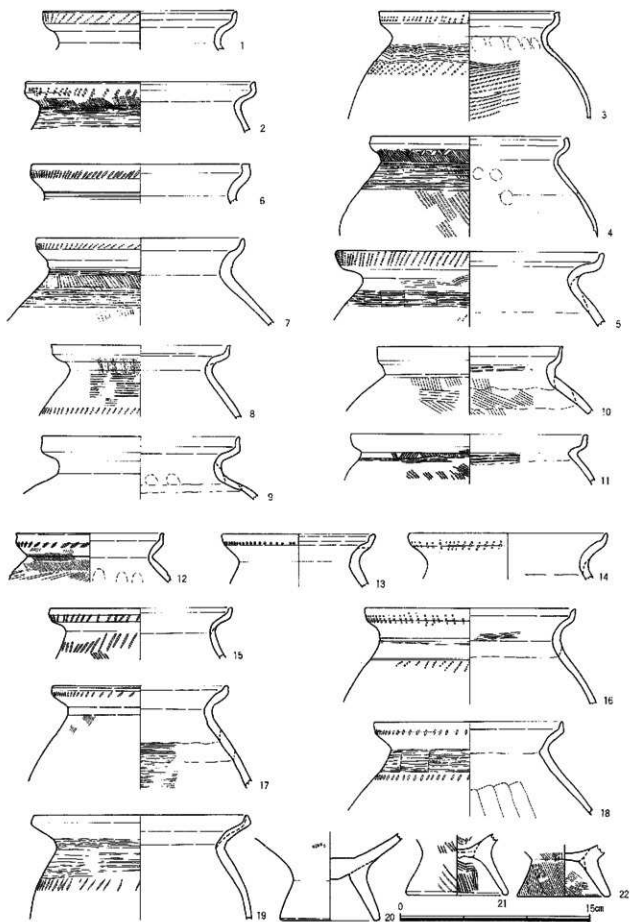
C類の10~16は、受部は直線的であると思われる。外面には細かい丁寧なヘラミガキが残る。

第58図17・18は垂下する口縁部外面に刻目文、凹線文をめぐらせるが、B類と同様な形態を呈すると思われる。

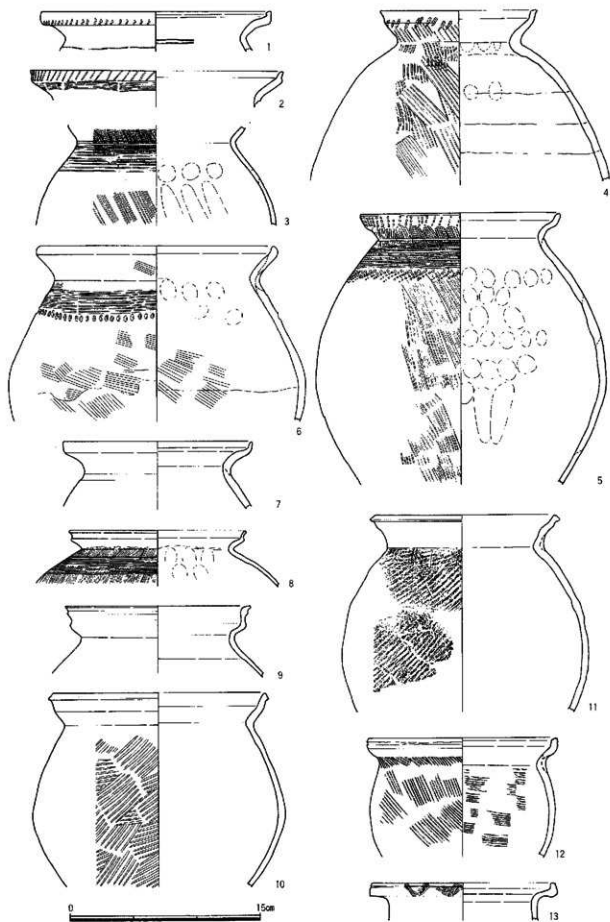
20・21は口径8cm程度の小型器台で、逆八の字状に開く受部のみ確認した。



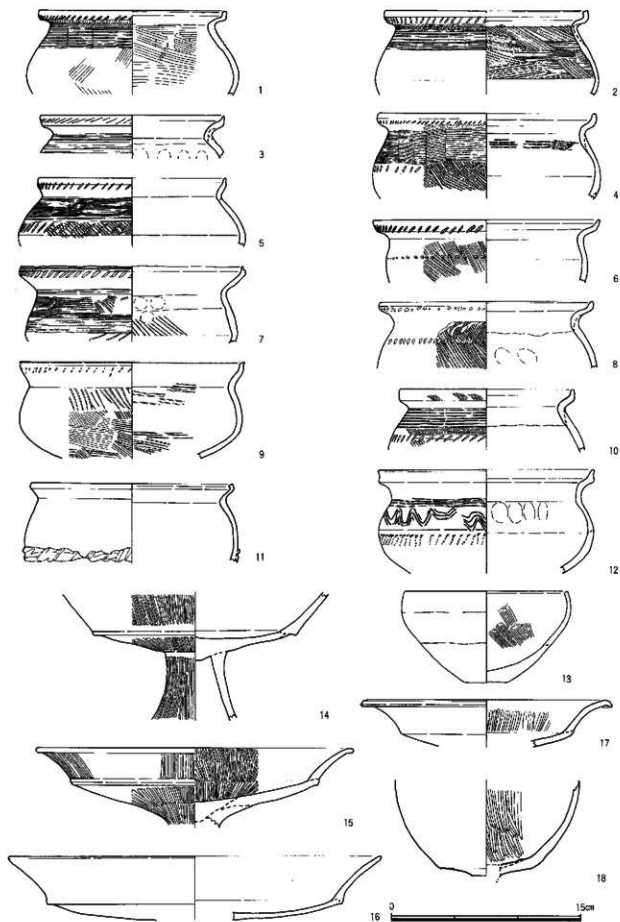
第54图 方形周溝墓 S X. 5出土土器(4)



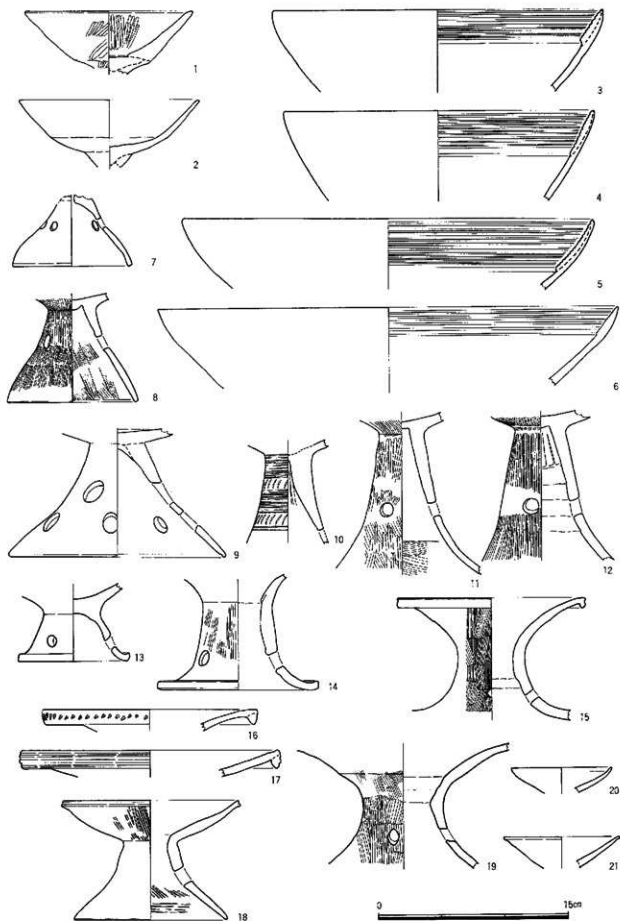
第55(河) 方形周满篇 S X. 5出土器(5)



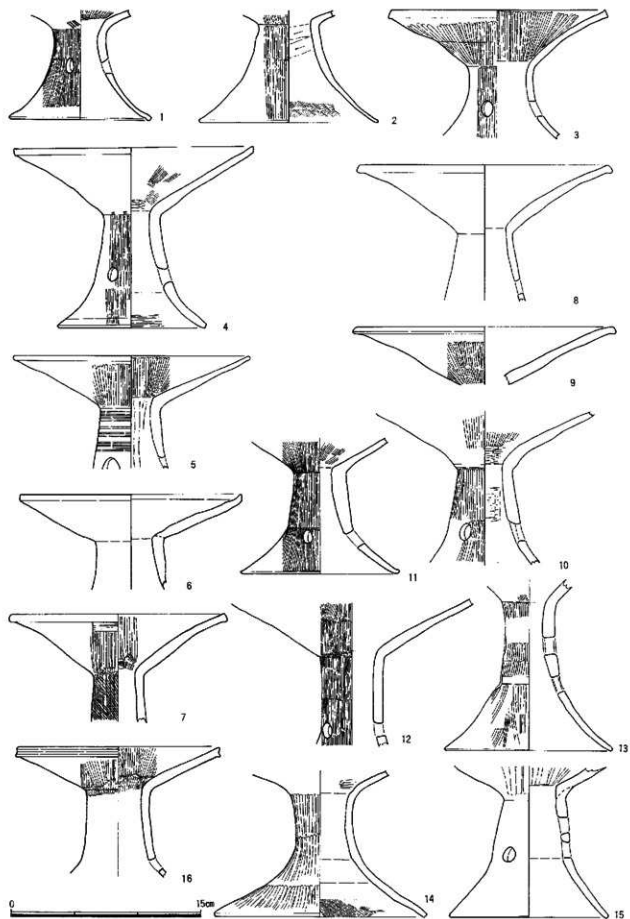
第56图 方颈青瓷 S X. 5出土石器(6)



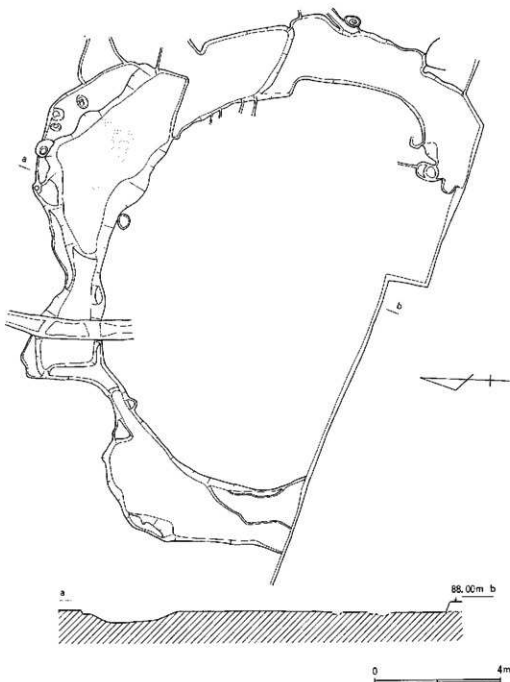
第57图 方颈陶器 S X. 5出土土器(7)



第58图 方彩陶器 S X. 5出土器(8)



第59圖 方形陶滎墓 S X. 5出土土器(9)



第60図 古墳1号墳（斑点は土器出土地点）

(2) 古墳（第60・61図）

B区南端で円墳1基を検出した。現水田下に位置するため墳丘は完全に削平をうけ、南側切についても現町道下にあたり、周濠のみを確認したにすぎない。周濠を含めた直径は約16mをはかり、周濠幅は最大で約2m、深さ0.25mである。出土遺物は周濠内より須恵器が出土している。

遺物と出土状況（第61図）

北東周濠内より須恵器坏身2、甕1が出土した。周濠内埋土は黒褐色土で砂レキが混じる。甕は11縁部を下にしておしつぶされた状況で検出され、さらにその下より坏身が出土した(第61図)。

坏身1は11径12.5cm、器高4.8cmの完形品で立ち上がりは短く上方へのび、受部は短く丸味を帯びる。体部外面

下半ヘラケズリ、内面に同心円文タキが残り、他はヨコナデ調整である。外面に自然釉が付着する。

坏身2は底部を欠くが口径10.6cmをはかる。1にくらべて立ち上がりがやや内傾し、受部共に丸味を帯びる。体部外面下半はヘラケズリのあとヨコナデ調整である。

甕は口縁部の外反があまり大きくなく、端部に外傾面をもっておわる。外面はカキ目調整、体部外面に平行タキ、内面に同心円文タキが施される。円化していないが、下半の体部片も出土している。

(3) ピット内の出土遺物

弥生土器

S P. 1 (第62図9)

「くの字状口縁」甕A類が出土している。口縁端部に刻目文を施し、内外面を粗いハク目で仕上げる。

S P. 3 (第62図2)

頸部から口縁部にかけてゆるく外反する広口壺D類が出土している。口頸部のみ的小破片であるが、内面には円形刻目文、外面には梯描直線文が施される。体部は張り下位にあるソロバン玉形を呈すると思われる。

S P. 6 (第63図8)

北陸系の流れをくむ二重口縁の甕D類が出土している。内外面の調整は磨滅のため不明である。口縁部の立ち上がりは外上方へ流れる。

S P. 69 (第62図1)

頸部が長く大きく外反する口縁部を肥厚させ端部に波状文、内面に扇形文を施し、肩部外面には直線文と波状文を交互に配置する。

S P. 83 (第63図18)

高坏の脚部が出土している。端部が上方へそりかえる。

S P. 135 (第63図6)

「受口状口縁」甕C類が出土している。口縁部の屈曲はシャープで外面に刺突列点文が残る。

S P. 144 (第63図20)

台付甕の高台片が出土している。器壁が厚く八の字状に開く。

S P. 155 (第62図11)

塊形の受部を有する高坏B類が出土している。外面に凹線文をめぐらせ、2つの穿孔が認められる。

S P. 168 (第63図13)

頸部にかけて強く屈曲する高坏脚部が出土している。

S P. 171 (第63図2)

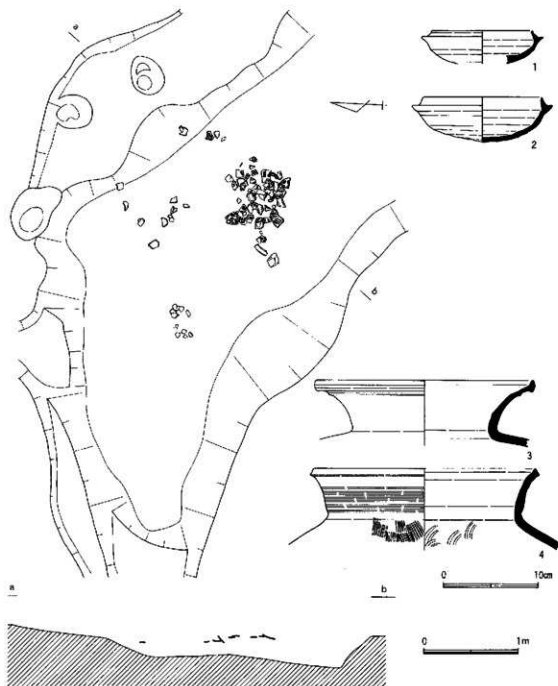
口頸部が短く直立気味に上方へ伸びる短頸壺が出土している。体部外面、口縁部内面をハケ目調整し、頸部外面には刻目文がめぐる。

S P. 198 (第62図6)

肩部が張らず、短くゆるやかに口縁部の外反する広口壺が出土している。

S P. 243 (第62図5)

屈曲して立ち上がる口縁部外面に凹線文のめぐる広口壺C類が出土している。小型で頸部外面に刻目文がめぐる。



第61図 古墳1号墳周縁内遺物出土状況と出土土層

S P. 251 (第63図4)

「受口状口縁」甕C類の小型品が出土している。

S P. 257 (第63図16)

口縁端部内面が肥厚し凹線文のめぐる高坏類が出土している。

S P. 261 (第62図4・8・10)

細頸壺D類(4)、「くの字状口縁」甕A類(8・10)が出土している。

S P. 286 (第62図3)

短頸壺の類と思われる体部が出土している。内外面を粗いハケ目で調整し、肩部外面には線刻が確認される。

S P. 336 (第62図13)

長さ5cm、最大径1.2cmの土鐘が出土している。

S P. 340 (第63図12・17)

「受口状口縁」鉢A類、八の字状に開く高坏脚部片が出土している。頸部が長く、口縁端部のみを屈曲させるもので表面の岩波が著しく調整等は不明である。

S P. 344 (第63図11)

S P. 340と同期の鉢が出土している。口縁端部外面に刻目文を施し、外面はハケ目で仕上げる。

S P. 386 (第62図7)

ゆるやかに外反する口縁端部を上方へつまみ上げる甕が出土している。内外面ハケ目調整。

S P. 415 (第62図12)

端部を肥厚させ凹線文のめぐる高坏脚部片が出土している。

S P. 529 (第63図7・10・15)

「受口状口縁」甕C類(7)、鉢A類(10)、八の字状に開く高坏脚部片(15)が出土している。7・10共に口縁部外面に刺突列点文が残り、15は脚部端部内面に凹線がめぐる。

須恵器・土師器・灰輪陶器

S P. 41 (第64図14)

体部径より口径の大きい土師器で、口縁はなだらかに内湾気味に開く。内面は粗い横方向のハケ目であるが、外面は不明。

S P. 97 (第64図12)

丸味をもった体部に外反する口縁部の付くクロ土師器の坏である。

S P. 102 (第64図10)

灰輪陶器の碗の底部片で端部を欠くが、高い高台が付くと思われる。

S P. 128 (第64図8)

須恵器の甕で、大きく開く口縁部の端部を内外面に肥厚させる。

S P. 142 (第64図2)

須恵器の無高台の坏身で直線的に斜め上方へ立ち上がる口縁部は丸味を帯びておわる。内外面ヨコナアで底部外面はヘラ切り未調整である。口径12.2cm、器高3.2cm。

S P. 144 (第64図13)

口径17cm、器高3cmの土師器の中皿である。直線的に開く口縁部の端部は内傾面をもっておわる。

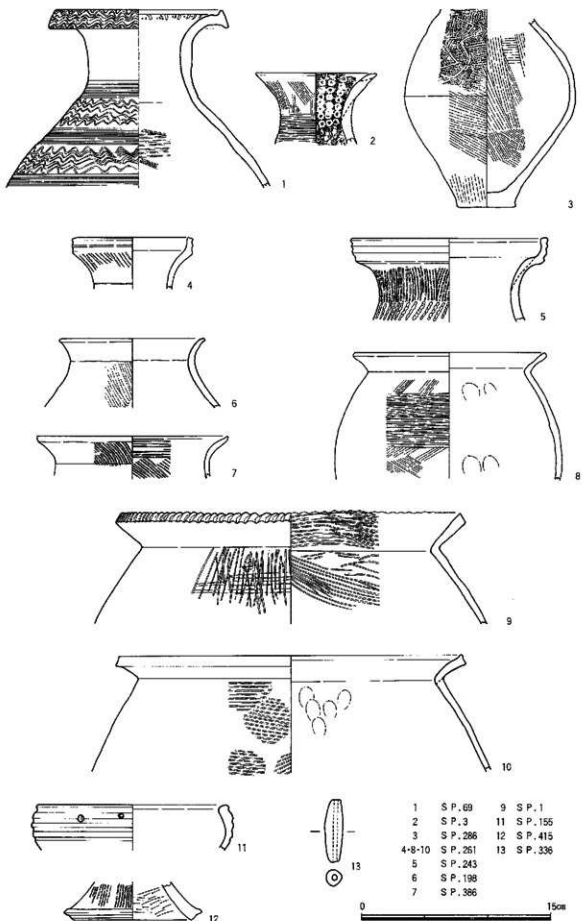
S P. 164 (第64図3～5)

平坦な底部に明確な境を有して直線的な口縁部がつながり、断面方形の高台を境目近くに付す須恵器坏身C₁類である。

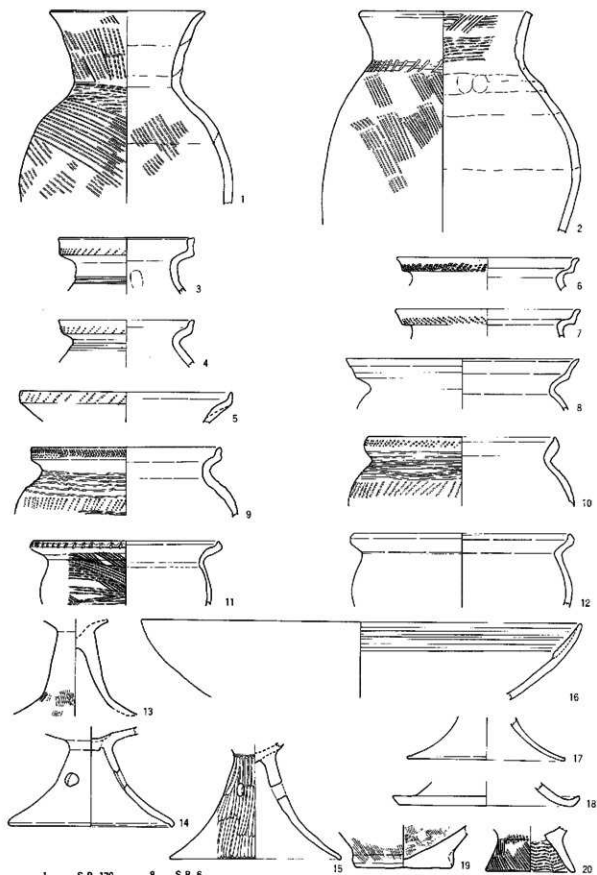
S P. 189 (第64図9・11)

9は外面に稜を残して開く灰輪陶器の坏の口縁部である。

11は低い高台の付く山茶碗の底部片である。

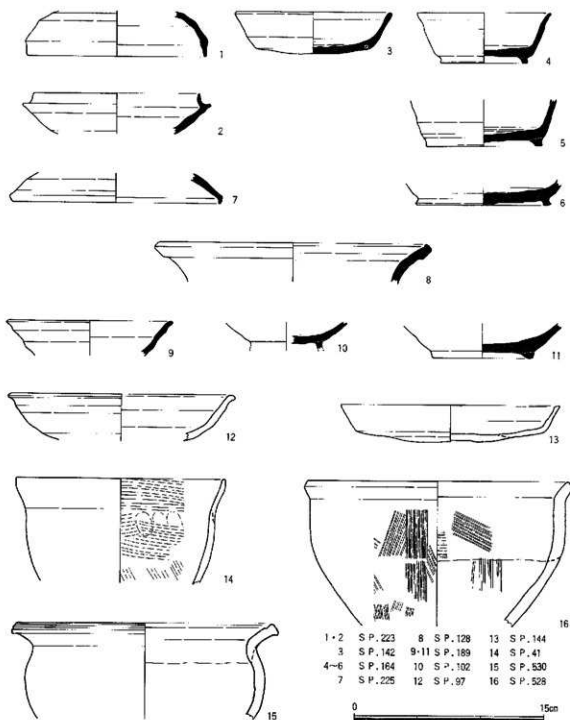


第62図 ビット内出土遺物(1)



- | | | | |
|-------------|----------|---------|----------|
| 1 | S P. 170 | 8 | S P. 6 |
| 2 | S P. 171 | 9 | S P. 15 |
| 3 | S P. 180 | 11 | S P. 344 |
| 4 | S P. 251 | 13 | S P. 168 |
| 5 · 12 · 17 | S P. 340 | 14 · 18 | S P. 83 |
| 6 | S P. 135 | 15 | S P. 257 |
| 7 · 10 · 15 | S P. 529 | 19 · 20 | S P. 145 |

第63図 ビット内出土遺物(2)



第64図 土椀・ビット等出土遺物(3)

S P. 223 (第64図6)

口縁部の立ち上がりが低い須恵器坏身A類である。

S P. 224 (第64図1)

口縁部が直線的にのびる須恵器の坏蓋A類である。天井部外面にヘラケズリが残る。

S P. 255 (第64図7)

口縁端部を下方へ折り曲げる須恵器の坏蓋C類である。

S P. 528 (第64図15)

口径20.6cmの土師器で口縁部を外方へ折り曲げる。器壁は厚手である。

S P. 530 (第64図16)

口径20cmの土師器で口縁部は外反し端部に凹縁がめぐる。

(4) 竪穴住居跡

① S H. 1 (第65図)

方形周溝墓 S X. 1 の南周溝を引いて立地する竪穴住居跡で東西7.8m、南北7.4mをはかる。周りに壁溝がめぐり、3本の柱穴を検出した。削平をかなりうけており、残存状況は良好ではないが、埋土は黒褐色土で南東コーナーで焼土の広がりを確認した。

なお、時期判断される遺物等は出土しなかった。

② S H. 2 (第66図(1))

方形周溝墓 S X. 1 の東周溝を切って立地する竪穴住居跡で、S D. 2 に切られる。残存状況が非常に悪く南東及び南西の壁は確認できなかったが、東西4.2mをはかると思われる。埋土は、淡黒褐色土で砂レキを含み S D. 2 と重複する部分より焼土が確認された。

遺物等は出土していない。

③ S H. 3 (第66図(2))

S H. 2 の西側に位置する南北3.6mの竪穴住居跡で壁溝のみ検出した。

(5) 掘立柱建物

① S B. 1 (第67図(1))

調査区の北端に位置し、東側を S D. 2 によって切られる。2間×1間の建物で6.76m×3.4mをはかり23.4㎡の規模をもつ。主軸方位はN-9°-Eである。

② S B. 2 (第67図(2))

方形周溝墓 S X. 1 の周溝と重複しており東側中心の柱穴は確認できなかった。2間×2間で束柱をもち、6.56m×5.8mをはかり38.05㎡の規模を有す。N-0°-Wの方位を示す。

③ S B. 3 (第68図(1))

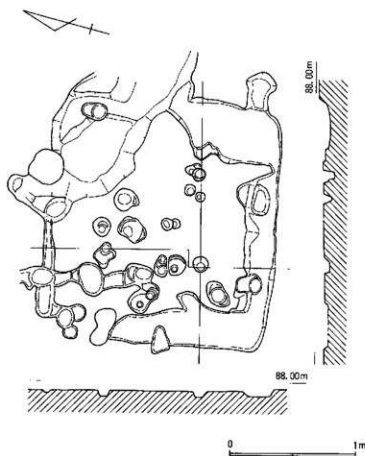
3間×2間の建物で4.72m×5.04mをはかる。S D. 1 によって切られ、主軸方位はN-8°-Wである。S B. 1 とほぼ同一方位を示す。

④ S B. 4 (第68図(2))

6間×4間の東西棟である。6.56m×4.8mで31.49㎡の規模をもち、直径30~95cmの円形の柱穴を有す。S D. 3 によって切られる主軸方位N-4°-Wの建物である。

⑤ S B. 5 (第69図(1))

調査区東側中央に位置し、S X. 3 と重複する4間×2間の建物である。4.96m×4.16mで規模20.63㎡をはかる。N-19°-Wの主軸方位を示し柱穴は40~90cmの直径をもつ。



第65図 竪穴住居跡(1) SH1

⑥ S B. 6 (第69図(2))

S B. 7・8と切り合い、S X. 4と重複する調査区内で最も規模の大きい4間×2間の建物である。柱穴の直径も80~140cmと大きく、規模8.16m×6m、面積48.96㎡である。主軸方位はN-18°-Wの南北棟である。

⑦ S B. 7 (第70図(1))

S D. 3の東辺によって切られる3間×2間の建物で、規模3.72m×3.28m、面積12.2㎡をはかる。主軸方位はN-11°-Wである。

⑧ S B. 8 (第70図(2))

S B. 6と切り合い、S D. 2によって切られる4間×3間の東西棟である。4.96m×4.08mをはかり、面積20.24㎡を有す。主軸方位はN-4°-Eである。

⑨ S B. 9 (第71図)

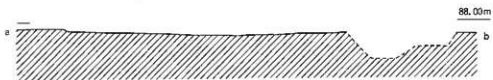
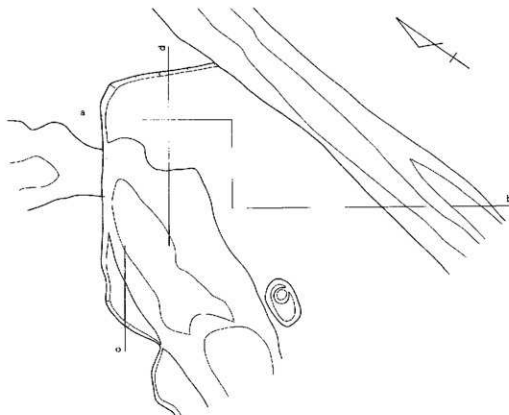
調査区のはほぼ中央に位置する2間×2間の建物であるが、中央をS D. 1によって切断されており、東柱をもつものかもしれない。規模5m×4.4m、面積22㎡で、主軸方位はN-14°-Eを示す。

⑩ S B. 10 (第72図)

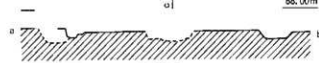
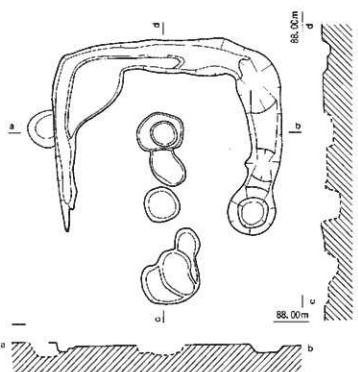
調査区中央に位置し、中央をS D. 1・2によって切断され、西側でS B. 11と重複する。4間×2間の東西棟で柱穴が直径80~100cmをはかる。8.16m×4.8mで面積は39.2㎡である。主軸方位はN-0°-Wを示す。

⑪ S B. 11 (第73図)

S B. 10の西側に位置し、S B. 10に切られる。3間×1間の東西棟で6.88m×5.12mをはかる。面積は35.2㎡で主軸方位はN-6°-Eを示す。



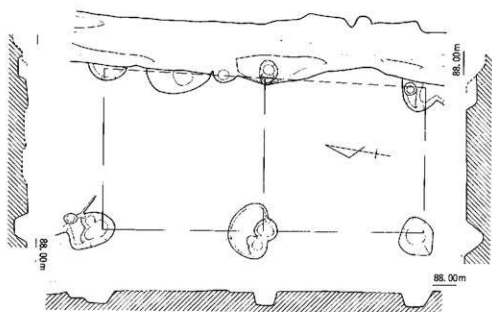
(1) S.H. 2



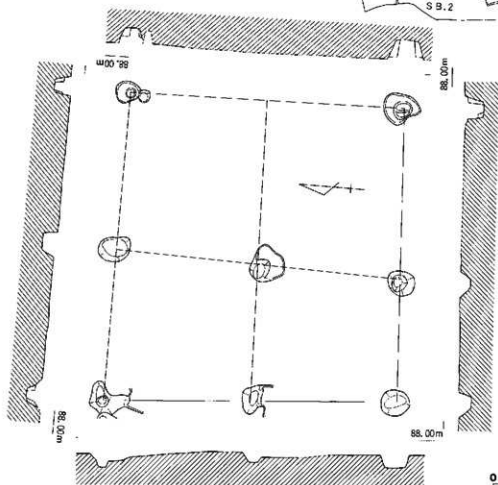
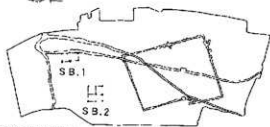
(2) S.H. 3

第66图 竖穴住居跡(2)





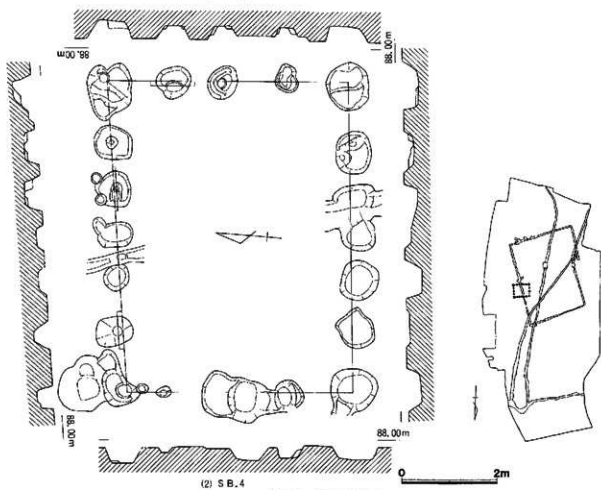
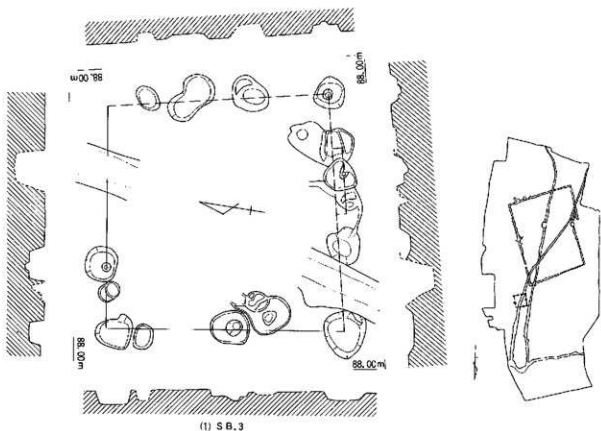
(1) SB.1



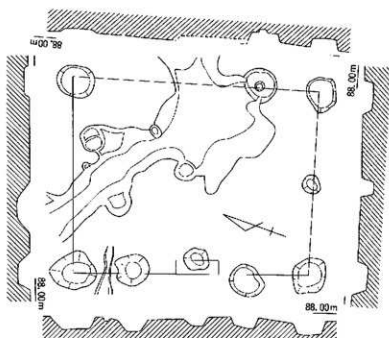
(2) SB.2

第67号 掘立柱建物(1)

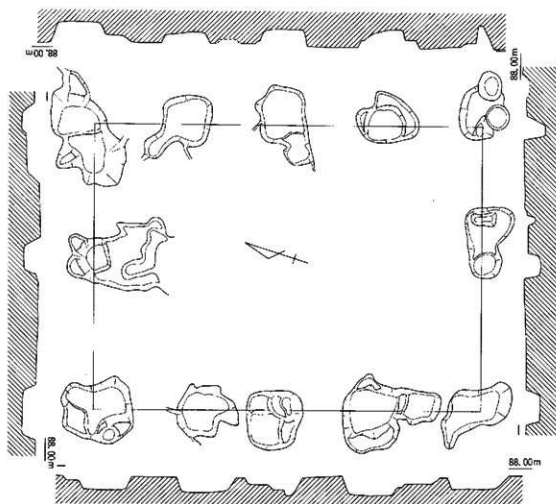




第68图 掘立柱建物(2)



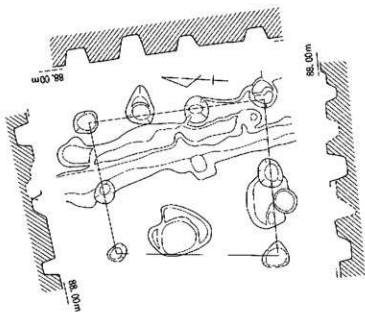
(1) SB.5



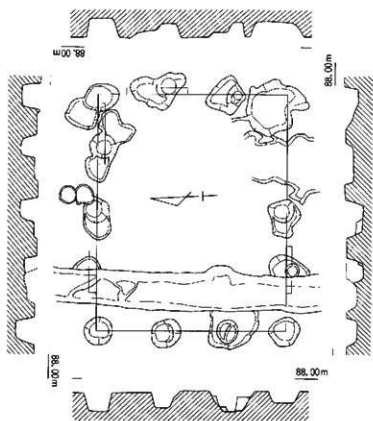
(2) SB.6

第69図 獨立柱建物(3)

0 2m



(1) SB.7

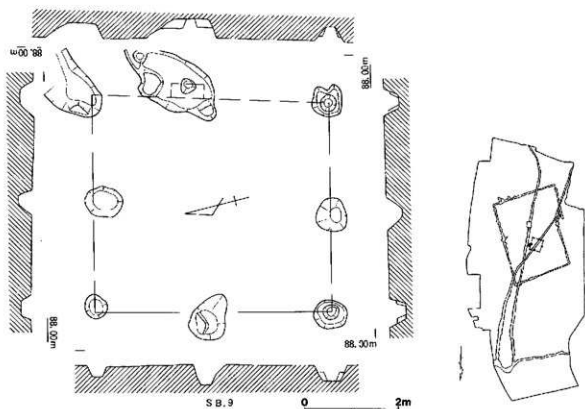


(2) SB.8

0 2m

第70图 獨立柱建物(4)





第71図 掘立柱建物(5)

⑫ S B. 12 (第74図(1))

調査区南東側に位置し、3間×2間で束柱を有す。5.44m×4.2mをはかり面積22.8㎡である。主軸方位はN-2°-Wを示す。

⑬ S B. 13 (第74図(2))

調査区南側に位置し、山墳1号墳周濠によって切断される。3間×2間の規模で5.76m×4.56m、面積26.3㎡である。主軸方位はN-15°-Eを示す。

⑭ S B. 14 (第75図(1))

調査区南西隅に位置し、西側で削平をうけた3間×2間以上の建物である。柱穴の直径は90~120cmで、規模は5.52m×2.64m以上をはかる。主軸方位はN-20°-Eである。

⑮ S B. 15 (第75図(2))

調査区東端沿いのS X. 5の墳丘部に位置する。2間以上×2間以上で束柱を有する。規模は5.61m以上×4.8m以上をはかり、主軸方位はN-37°-Wである。

⑯ S B. 16 (第76図(1))

寝穴住居跡S H. 1を切る3間×2間の束柱を有する建物である。規模は5.92m×4.16m、面積24.6㎡をはかる。主軸方位はN-4°-Wである。

⑰ S B. 17 (第76図(2))

方形周溝墓S X. 1の西コーナーと重複する2間×2間の束柱を有する建物である。規模5.8m×4.92mで面積28.5㎡をはかる。主軸方位はN-2°-Wである。

⑬ S B. 18 (第77図(2))

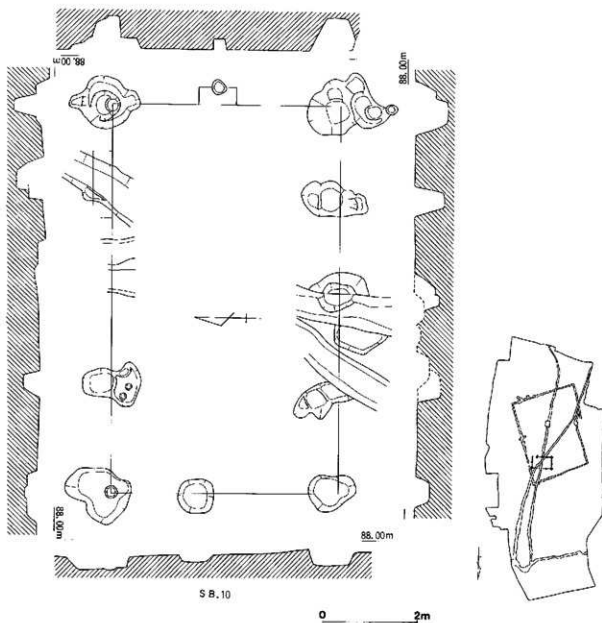
調査区南西隅に位置し、S B. 14と重複する。2間×2間以上で西側が攪乱をうけている。規模3.36m×2m以上。主軸方位はN-21°-Eである。

(6) 溝状遺構 (第72図)

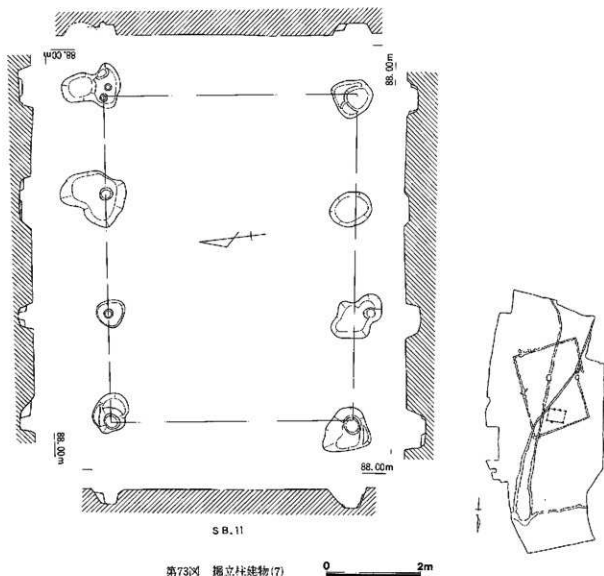
南北方向にのびるS D. 1・2、長方形のプランを呈するS D. 3、隅丸方形にめぐるS D. 4がある。

① S D. 1

調査区を対角線上にやや蛇行気味に南北方向へ横切る幅0.8~1.0m、深さ0.5~0.6mのV字状の溝で、S D. 2を切る。北側では二段掘りとなっており、埋土は下層にレキを含んだ黒褐色土、上層に暗茶褐色土が堆積する。溝内からは須恵器・土師器・灰釉陶器が出土している。



第72図 楕立柱建物(6)



第73図 掘立柱建物(7)

遺物と出土状況(第78図1~3)

- 第78図1は低い偏平な高台の付く土師器の坏である。
- 2は断面逆梯形の高台が付く灰釉陶器の壺である。
- 3は1縁端部に凹面を有する須恵器の甕である。外面に平行タタキ目が残る。

②S D. 2

S D. 1と同様調査区を南北方向に対角線上に横切る幅0.8~1.0m、深さ0.5~0.6mのV字状の溝であるが、S D. 1にくらべて直線的で切られている。埋土は暗褐色上である。

遺物と出土状況(第78図4~23)

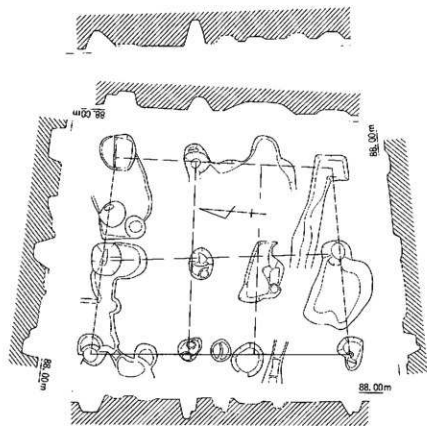
S D. 2内からは須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師器が出土している。

須恵器

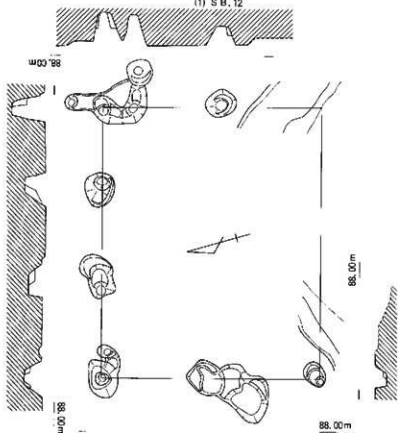
出土量は少く、無高台の坏身・壺体部片等がある。

灰釉陶器(第78図4~19)

遺物の中で最も出土量が多く、器種には壺・甕がある。壺は深く丸味を帯びた体部に断面三日月形の高い高台の付くA類(8~15)とやや浅めで偏平な低い高台の付くC類(4~7)がある。14・15の底部外面にヘラ刮り



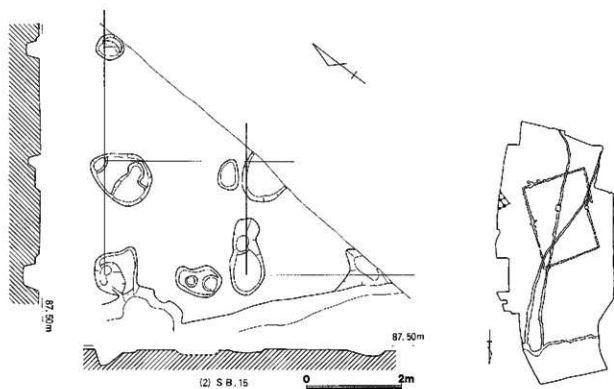
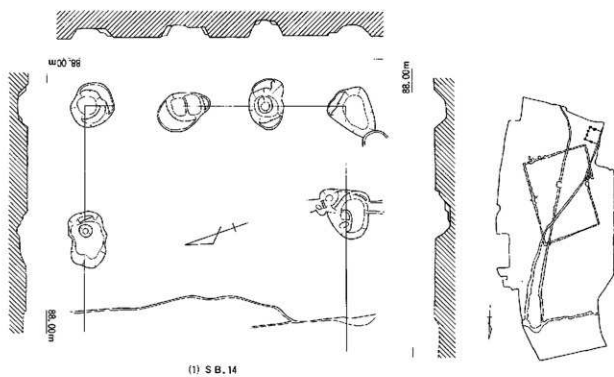
(1) S.B. 12



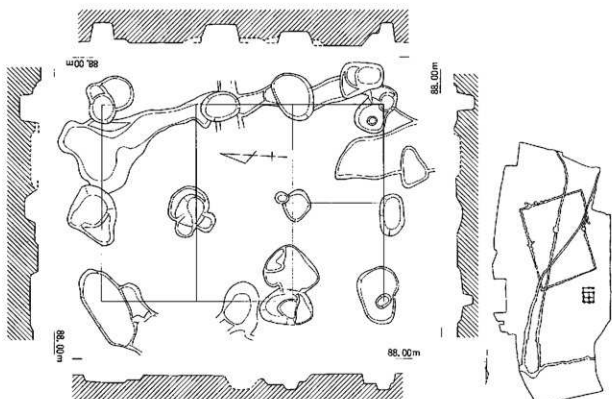
(2) S.B. 13

0 2m

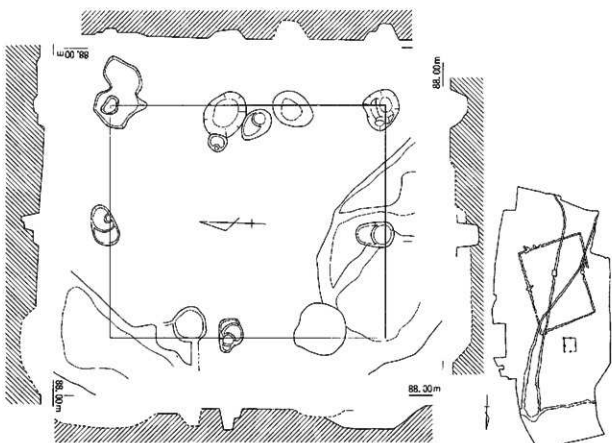
第74区 掘立柱建物(8)



第75区 掘立柱建物(9)

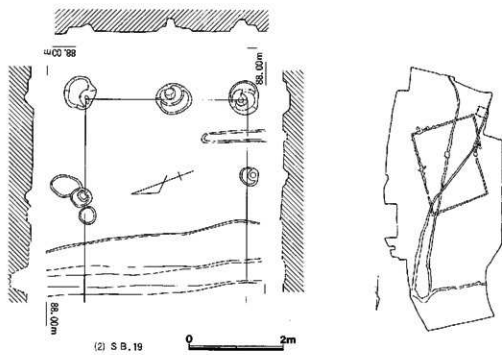
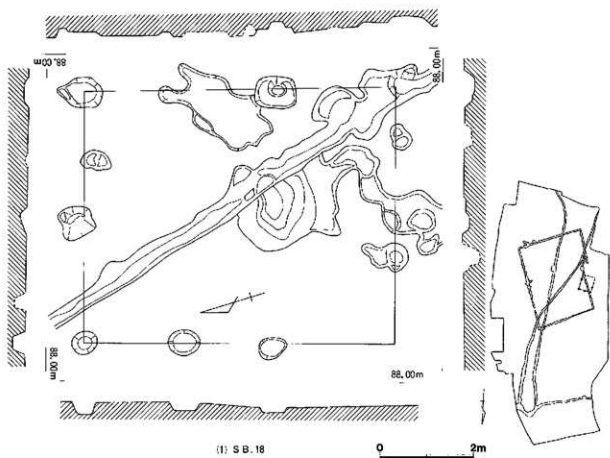


(1) S.B. 16

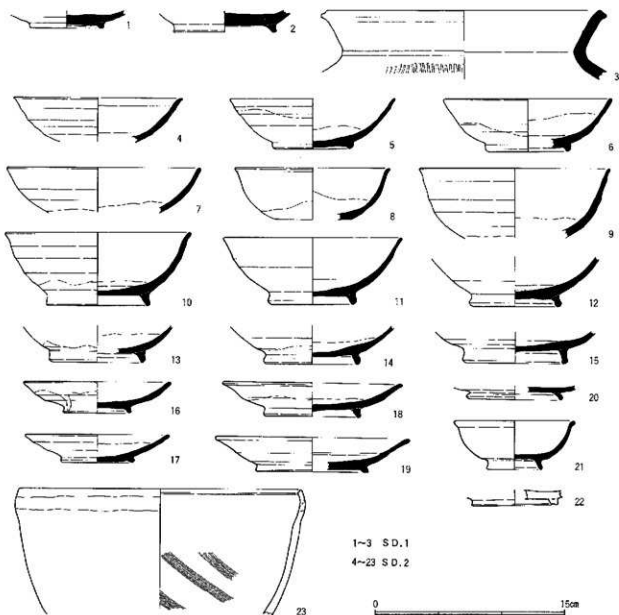


(2) S.B. 17

第76区 掘立柱建物(1)



第77圖 獨立柱建物(1)



第78図 溝 S D 1, 2出土土器

が残る他はナデ調整である。ⅡはⅠ縁部がわずかに外反気味におわるもの(16~18)で断面逆梯形の高台が付く。19は段皿で内面の段が不明瞭である。いずれも色調は淡灰褐色を呈す。

緑輪陶器(第78図20~22)

20は平坦な底部に二日月形の高台が付き、釉の色調は暗緑灰色である。

21は小碗で丸味を帯びた体部に端部の外反した口縁部が付く。高台は高く、色調は暗緑灰色である。

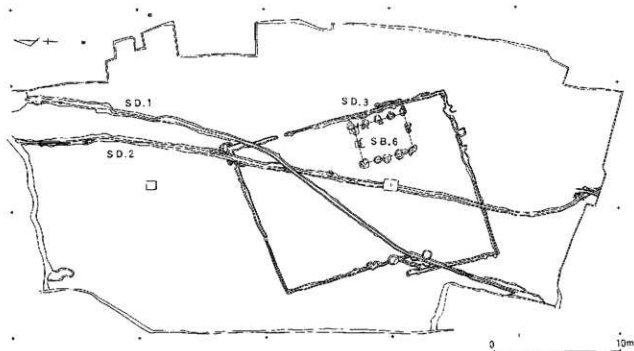
22は増部に段を形成する断面方形の高台が付き、緑灰色を呈す。

上師器(第78図23)

Ⅰ径16.5cmで内湾気味に開く土師器である。口縁端部に凹面を有し、体部内面にはハケ目が残る。

③S.D. 3

S D 1・2に切られる長方形プランV字状断面の溝で幅0.8~1.0m、深き0.5~0.6mをはかる。長辺は長さ約34m、短辺は北側で約24m、南側で約27mを呈し、主軸方位はN-18°-Wである。西側は中央で切断され、く



第79図 溝

いらがっている。主軸方位が一致する掘立柱建物はSB. 6のみで、SR. 7・8・18はSD. 3に切られている。

遺物と出土状況

須恵器・灰輪陶器・土師器の小破片が若干出土している。須恵器は無高台の坏身、灰輪陶器は境・皿類があり、器形はSD. 2出土例とはほぼ同形態のものが認められる。

④SD. 4

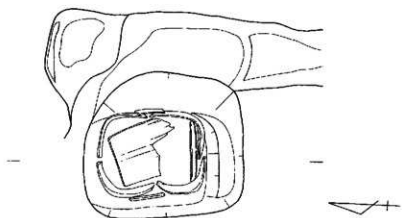
調査区南端に位置する一辺約13m余りの隅丸方形の溝状遺構である。幅0.4～0.5m、深さ0.3mで古墳の周溝、井戸（SE. 1）等に切られている。昭和57年度の試掘調査時に確認されていた段階では方形周溝^{埋90}であろうと予測していたが、他の方形周溝に比べて周溝は貧弱であり、プランも異質であることから現段階では方形周溝と判断する要素に欠ける。なお、周溝内から弥生土器の破片が出土している。

(7) 井戸（SE. 1、第80図）

昭和57年度の試掘調査時に確認された井戸で、SD. 4を切っている。南北1.25m、東西1.15m、深さ1.1mの楕円形の掘り方内に、丸太材をくりぬき、さらに4分割した材を枠として使用している。東と西側の枠のつなぎ部分にはそれぞれ板材をはめこみ、南側底部は内側から板材によって補強されている。底部中央には浮いた状態で板材が出土し、底部には小レキが薄くひかれている。また、北東側の枠板の下端部には方形の透しが穿たれている。

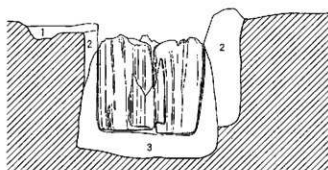
さらに、枠材は側面および底部を淡青灰色粘土によってつつみこむようにおおわれている。

出土遺物は、図化していないが須恵器の坏身片が出土している。



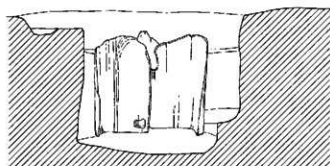
(a) 平面図

87.70m



(b) 側面図 1. 暗茶褐色土 2. 淡褐色土(黒褐色土が混じる) 3. 淡青灰色粘土

87.70m



(c) 西側の枠板撤去後、側面図

0 1m

第80図 井戸 (S.E. 1)

5. 遺構と遺物について

1. 狐塚遺跡

狐塚遺跡においては今回報告分について掘立柱建物19棟、土壌、井戸が検出されており、これらの建造時期等について若干の検討を行なってみよう。

(1) 掘立柱建物について (表1、第81図)

狐塚遺跡では、今回の調査でA～C区あわせて18棟の掘立柱建物が検出されたが、表に示すようにその規模は2間×2間が3棟 (S.B. 1・8・15)、3間×1間1棟 (7)、3間×2間3棟 (2・4・13)、3間×3間3棟 (6・10・C-3)、4間×2間1棟 (11)、4間×3間3棟 (3・5・12)、5間×3間1棟 (9) に分かれる。床面積は20㎡以下、20～30㎡、40～50㎡に分割される。主軸方位は表1に示されるごとく、N-6°-W (S.B. 2・4)、N-1°-7°-E (6・9・11-15・C-1・3)、N-12°-E (10・C-2)、N-19°-E (5) の4方向に区別できる。単純に主軸方位から考えると少なくとも4時期以上にわたって建物が建造されたと思われる。

また、S.B. 6とS.B. 7、S.B. 11とS.B. 12、S.B. 13とS.B. 15とはそれぞれ建物の規模・主軸方位が類似し、近接して掘り方の切り合いがみられることから単期間に建てかえが行なわれたと思われる。

次にこれらの建物の建造時期であるが、建物の柱穴や直接関連した所からの遺物の出土が非常に少ないため、時期決定は困難である。ただ、可能性として建物に付随するかあるいは近接している土壌等からの出土土器、遺構検出作業中に出土した遺構面直上の出土土器等から判断すると7世紀後半～8世紀初めと11世紀～12世紀頃の二時期が考えられる。

さらにいわゆる古地割と統一系¹¹⁰⁰との関係から主軸方位をみみると、南北地割(古地割)に規制されていたと思われるN-1°-7°-Eの一群とそれ以外のいわゆる統一系が施行された後の一群に大別できる。つまり、前者が7世紀後半～8世紀初め (S.B. 6～9・11-15・C-1・3) であり、後者が11世紀～12世紀頃である。

また、B区南端の落ち込み部上層の土器群は、ロクロ土師器・灰釉陶器を中心とした10世紀後半～11世紀のものであり、下層は7世紀～8世紀の須恵器を中心とした土器群がそれぞれ埋没していたわけであるが、先に述べた掘立柱建物の二時期に対応している。つまり、南北地割にもとづく建物の集落が7世紀後半～8世紀初めに営まれ、その後の水田開発等により削平をうけた集落の遺物が南側の落ち込み部に流入する。さらに10世紀後半頃、今度は方格地割に基づいて集落構成が実施されたと思われる。12世紀以降再び集落は廃絶をうけ、遺物だけが落ち込み部に流入し残存するにいたったのではなからうか。

(2) 井戸について

井戸枠外から、時期決定できる土器としては須恵器坏身(第15図40)が出土しているのみである。体部が直線的に外上方へのび、口縁部がわずかに外反し、断面方形の短い高台が付く。これらの特徴から8世紀後半に位置付けられる。ただ、出土地点が枠外の掘り方埋土であるためこの井戸はこの時期に掘削されたと思われる。

(3) 土壌・ピットについて

土壌・ピットからの出土土器は須恵器・土師器・灰釉陶器と若干の古式土師器がある。

S.K. 4・5・8～10・12、S.P. 94については手づくねの上師器皿が出土しているが、淡褐色を呈し、口縁

部は1ないし2回のナデにより内寄気味にのびており、横山洋三氏の言うA₂タイプに属するものが多く、11世紀後半～12世紀代に位置付けられよう。

S K. 10からは土師器匡の他に灰輪陶器の碗(第15図7)が出土しているが、比較的直線的にのびる体部に断面逆三角形に近い高台が付いており、11世紀後半頃の時期に相当する(美濃窯の丸石^{注09}2号窯)。

(4) 遺構面直上の遺物

遺構面直上出土の遺物として弥生土器の他に第15図38・39・41～46の須恵器・土師器がある。須恵器環蓋は天井部が平坦で口縁端部は下方へ折りまげる。高台付環は体部と底部との境の稜線がやや明瞭で外方へふんばる高台が付く。無高台環は底部が平坦で口縁部は直線的に開く。高台脚部は八の字状に開く長脚で端部を下方へ折り曲げる。これらの特徴を相互すると7世紀後半から8世紀初めの年代が与えられる遺物である。

(5) 落ち込み遺構

落ち込み遺構からは、須恵器・土師器・灰輪陶器の上器類が比較的まとまって出土しているのでその時期・特徴について触れておきたい。

須恵器

環蓋A₁類は天井部と口縁部との境の稜線が若干残り、小ぶりのものであり、出土須恵器環蓋の中で最も古いもので6世紀後半頃に比定される。

環蓋A₂類は天井部と口縁部との境が不明瞭となりわずかな段や角度の変化により区別できるもので、環身A₂類とセットをなす。6世紀末頃に比定される。

環蓋A₃類は全体に偏平となり、口縁部も丸味をもっておわる。環身も立ち上がりが高く偏平となったA₂類の第19図4～12が同時期に相当する。7世紀前半頃である。

環蓋A₄類は再び小ぶりとなり口縁部が下方へ屈曲しておわる。環身A₄類のうち小ぶりの第19図13～22がこれとセットをなす。7世紀中頃に比定できる。

かえりの付く環蓋B類は小破片で点数も少ないが、天井部が高く、つまみは高い宝珠形のもが付くと思われ、環身B₁類がセットをなすと思われる。7世紀中頃に比定される。

なお、高環の第18図3の蓋は環蓋A₁類の形態を踏襲している。脚部の第19図25は低脚であり、出土須恵器の中で古い要素をもつ。第19図23・24の環部は環身A₂類の形態を踏襲する。

環蓋C類は小破片で点数も少ないため正確な特徴はつかみ難いが、偏平なつまみが付き平坦な天井部に口縁部は下方へ短く折り曲げられている。環身B₂類が同時期のものと思われ、7世紀後半～8世紀初めに比定される。環身C類もほぼ同時期で8世紀代に位置付けられる。

なお、環類以外の円面碗・長頸壺・壺類は7世紀後半～8世紀頃に比定される。

土師器

土師器としては、環・皿・高環・壺がある。

環類は、半球形の体部に端部に内傾面をもつ口縁部がついているA類が飛鳥Ⅲ・Ⅳ期に相当し(環Cにあたる)、7世紀第3・4四半期に比定される。

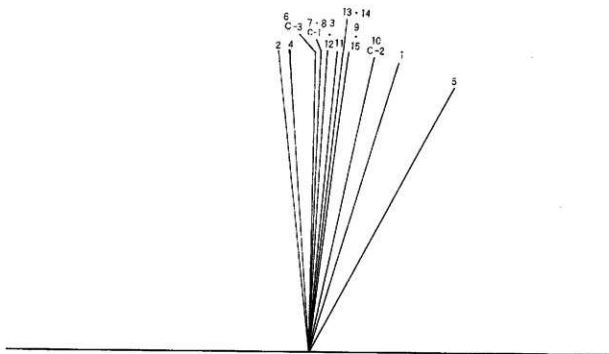
いわゆるロクロ土師器と称される環B類は、形態は無高台の須恵器に類似しているが、淡褐色・褐色を呈し、ロクロナデによる凹凸が明瞭である。10世紀後半頃に比定される。

建物番号	構造・規模	面積(㎡)	桁		間		梁	建物方位	備考
			行	行	間	間			
A・B区									
S.B. 1	2間(3.60m)×2間(3.44m)	12.4						N-17°-E	
S.B. 2	3間(4.72m)×2間(4.00m)	18.9	1.48, 1.64, 1.76				2	N-6°-W	
S.B. 3	4間(5.44m)×3間(3.60m)	19.6	1.28, 1.32, 1.44				1.04, 1.2	N-3°-E	
S.B. 4	3間(4.72m)×2間(3.84m)	18.1	1.52, 1.68				1.76, 2	N-4°-W	東柱をもつ。
S.B. 5	4間(6.32m)×3間(4.72m)	29.8	1.52, 1.76				1.32, 1.8	N-29°-E	
S.B. 6	3間(7.32m)×3間(4.72m)	34.6	1.8, 2.32, 3.12				1, 1.6, 1.8, 2.32	N-1°-E	柱材残る。
S.B. 7	3間(8.04m)×1間(5.48m)	44.1	2.4, 3.24				5.48, 5.52	N-2°-E	
S.B. 8	2間(5.72m)×2間(4.08m)	23.3	2.48, 2.84, 3.12				1.88, 2.4	N-2°-E	
S.B. 9	5間(8.40m)×3間(5.48m)	46.0	1.68				1.68, 1.76, 1.82, 2	N-7°-E	柱材残る。
S.B. 10	3間(5.44m)×3間(4.96m)	27.0	1.52, 1.73, 1.92, 2				1.28, 1.6, 1.76, 1.92	N-12°-E	
S.B. 11	4間(8.32m)×2間(4.96m)	41.3	1.84, 2, 2.4, 2.6				2, 2.48, 2.96	N-5°-E	礎板残る。
S.B. 12	4間(9.72m)×3間(5.16m)	50.2	2.16, 2.24, 2.4, 2.56, 2.64				1.44, 1.72, 2	N-3°-E	東柱をもつ。
S.B. 13	3間(4.72m)×2間(3.20m)	15.1	1.32, 1.6, 1.8				1.6	N-6°-W	東柱をもつ。
S.B. 14	2間(4.72m)×1間(2.16m)	10.2	2.4				2.16	N-6°-E	
S.B. 15	2間(3.4m)×2間(3.2m)	10.9	1.6, 1.76				1.36, 1.84	N-7°-E	東柱をもつ。
C・D区									
S.B. 1	3間(3.96m)× ^{2間以上} 1.40m		1.32				1.4	N-2°-E	東柱をもつ。
S.B. 2	3間(4.20m)×1間以上		1.4					N-12°-E	
S.B. 3	3間(4.56m)×3間(4.40m)	20.1	1.4, 1.52, 1.76				0.8, 1.28, 1.6, 1.84	N-1°-E	

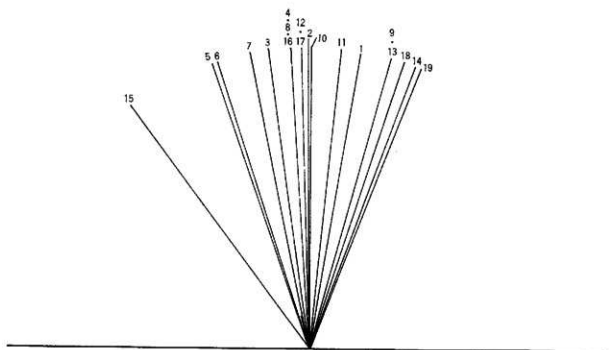
表1. 狐塚遺跡掘立柱建物一覧表

S.B. 1	2間 (6.72m) × 1間 (3.40m)	23.39	3.36		3.08, 3.4	N-9°-E	東柱をもつ。
S.B. 2	2間 (6.56m) × 2間 (5.80m)	38.05	2.6, 3.2, 3.36, 3.44		2.9, 3.08	N-0°30'-W	
S.B. 3	3間 (4.72m) × 2間 (5.04m)	23.79	1.28, 1.52, 1.72		1.68, 2.52, 2.96	N-8°-W	
S.B. 4	6間 (6.56m) × 4間 (4.80m)	31.49	0.84, 1, 1.2, 1.6		0.84, 1.28, 1.6	N-4°-W	
S.B. 5	4間 (4.96m) × 2間 (4.16m)	20.63	1.24		1.96	N-19°-W	
S.B. 6	4間 (8.16m) × 2間 (6.00m)	48.96	2.04		3	N-18°-W	
S.B. 7	3間 (3.72m) × 2間 (3.28m)	12.2	1.24		2	N-11°-W	
S.B. 8	4間 (4.96m) × 3間 (4.08m)	20.24	1.24		1.12, 1.44	N-4°-E	
S.B. 9	2間 (5.00m) × 2間 (4.40m)	22	2, 2.48, 3		2.2, 2.32	N-14°-E	
S.B. 10	4間 (8.16m) × 2間 (4.80m)	39.2	1.84, 2, 2.24		1.84, 2.24, 2.56, 2.96	N-0°-W	
S.B. 11	3間 (6.88m) × 1間 (5.12m)	35.2	2.08, 2.4		5.12, 5.36	N-6°-E	
S.B. 12	3間 (5.44m) × 2間 (4.20m)	22.8	1.4, 1.68, 1.88, 2		1.8, 2, 2.2	N-2°-W	
S.B. 13	3間 (5.76m) × 2間 (4.56m)	26.3	1.6, 2.04		2.32, 2.56	N-15°-E	
S.B. 14	3間 (5.52m) × $\frac{1}{2}$ 間 (2.64m)		1.84		2.56	N-20°-E	
S.B. 15	2間 (5.64m) × $\frac{2}{3}$ 間 (4.80m)		2.64, 3		2.4	N-37°-W	
S.B. 16	3間 (5.92m) × 2間 (4.16m)	24.6	1.92, 2		2.08	N-4°-W	
S.B. 17	2間 (5.80m) × 2間 (4.92m)	28.5	2.4, 3.4		2.12, 2.44, 2.8	N-2°-W	
S.B. 18	3間 (6.56m) × 2間 (5.28m)	34.6	1.76, 2.04, 2.32, 2.48		2.64, 2.8	N-18°-E	
S.B. 19	2間 (3.36m) × $\frac{1}{2}$ 間 (2.00m)		1.64, 1.76		1.6, 2	N-21°-E	

表. 2 法勝寺遺跡 掘立柱建物 一覧表



(1) 狐塚遺跡



(2) 法勝寺遺跡

第81圖 狐塚・法勝寺遺跡 孤立柱建物主軸方位
(数字は建物番号)

高台付の環C類については、高台が低く、10世紀末～11世紀初めに相当すると思われる。

皿類のうち第23図31は、10世紀末～11世紀初めに比定される。

灰釉陶器

埴・皿類がある。

碗類は深く丸味を帯びた体部に断面三日月形の高い高台の付くA類と真約的に開く体部に断面逆梯形の高台の付くB類とがあるが、これらは前者が美濃窯の大原2号窯（猿投窯の折戸53号窯）に相当し、10世紀後半頃、後者は美濃窯の丸石2号窯（猿投窯の百代寺窯）にそれぞれ比定されよう。小埴・皿類についても前者の時期に相当する。

落ち込み遺構の土層の堆積状況は、先に述べたように上層と下層に大きく二分されるが、それに対応するように出土土器についても二時期に大きく区分される。つまり、須恵器類にみられる7世紀代を中心とした6世紀末～8世紀初めの一時期と、土師器と灰釉陶器に象徴される10世紀後半～11世紀の時期であり、この落ち込み遺構には少なくとも2回にわたってこれらの多量の遺物が何らかの要因によって流れこんだことが推察される。

2. 法勝寺遺跡

法勝寺遺跡においては、方形周溝墓5基、古墳1基、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物19棟、井戸、溝、土壇等が出されたが、ここでそれらについて若干の検討を加えてみたい。

(1) 方形周溝墓

(時期)

まず、それぞれの時期的位置付けを供献土層から表示しておきたい。^{注07}

SX. 1は墳丘・主体部等は失われているが最も検出状況が良好であり、供献土器も量的に多く器種もそろっている。特に目立つのは受口状に立ち上がる口縁部外面に数条の凹線文がめぐる広口壺C類の出土である。各周溝より1棟部片が確認されているが、第31図に示されているように西周溝内からは2個体が検出された。この広口壺C類は搬入品ではないが、生駒西麓地域に顕著に認められる器種で近江とこの地域との交流がうかがい知れる。なお、焼成後の体・底部穿孔の痕跡は確認されていない。

細頸壺B類は、肩部のみの破片であるが、細い筒状の口頸部が付くと思われ、この器種は東海系の影響をうけたものと思われる。

壺B類は、外面をタテ方向のハケ目で仕上げ、口縁部内面には波状にハケ目を施す。また、「受口状口縁」壺に見られるような施文パターンも認められる。

「くの字状口縁」壺については、短く折れ曲がる口縁端部に凹線文のめぐるものが多く、体部外面にタタキ目の認められるものが存在する。

近江型の「受口状口縁」壺は、口縁部の屈曲が弱く外方へのびており、頸部内面のハケ目も顕著であり、いわゆる第V様式併行期に典型的なこの器種よりも前段階の特徴を有していると言える。

高坪A類は、口縁部内面の突帯の長さ、端部の垂下の度合いも退化傾向にある。

以上のようにSX. 1出土土器の特徴を抽出してみるとこの方形周溝墓は弥生時代中期後半、いわゆる第IV様式併行期に築造されたものと推察される。

SX. 2からは、広口壺の出土例が明確に押えられないが、細頸壺B類が認められ、肩部の装飾はSX. 1出

	規 模 (m)	出 土 遺 物	遺物の土地点	時 期	備 考
〈狐塚遺跡〉					
S X. 1	14.4×13.6	壺	東・北周溝	後期前半	北・東辺のみ周溝残
S X. 2	(10×10)			(中期)	北辺のみ周溝残
S X. 3					南辺のみ周溝残
S X. 4		壺・甕	南周溝	中～後期	北端部 陸橋
S X. 5	8.6×8.2	甕	東・北周溝	後期後半	東・西端部 陸橋
S X. 6	10.2×10.4	壺・高坏	東・西・南周溝	後期中頃	南東・南西辺のみ周溝残
S X. 7	(11×11)	壺	東周溝	後期	
〈法勝寺遺跡〉					
S X. 1	13.1×12.6	壺・甕・高坏	北・東・西周溝	中期後半	西端部 陸橋
S X. 2	13.6×13.3	壺・甕	東周溝	中期後半	四隅すべて陸橋
S X. 3	10.0×11.2	壺・甕・高坏	西周溝	中期後半	西端部 陸橋
S X. 4	(14×14)	壺・甕・手槍り・鉢・高坏	北周溝	後期後半	(西半部のみ確認)
S X. 5	(20×20)		北西・南西周溝	後期中～後半	(西半部のみ確認)

表 3 狐塚・法勝寺遺跡方形周溝等一覧表

上例にくらべると簡略化されつつある。

「くの字状口縁」甕ではS X. 1と大きな差違は認められない。「受口状口縁」甕は口縁部の屈曲が強くなりつつあり、外面の刺突列点文も明確になっている。

S X. 2出土土器については、S X. 1出土資料にくらべるとやや新しい要素を有すると思われるが、同じく第Ⅳ様式併行の時期に比定されよう。

S X. 3については、広口壺A₁・A₂類の出土例が特徴的である。特にA₂類は受口状の口縁部を有しハケ目調整である。刻目文を施すが、東海地方の影響をうけたものと判断する。^{注28}

「くの字状口縁」甕については、S X. 1・2出土資料と大差はなく、口径より体部最大径が等しいか、大きくなっている。「受口状口縁」甕の口縁形態はS X. 2資料と類似してやや内傾気味に立ち上がっている。

高環C類の類似品としては県内で長浜市鳴田遺跡^{注29}、近江八幡市山町遺跡^{注30}（第4次調査）等の出土例がある。

S X. 3出土土器は、S X. 2出土土器と似た様相を呈しており、やはり第Ⅳ様式併行期に比定される。

S X. 4については、パレススタイル壺D類、口縁部の屈曲があまくなり外方へのびる形態の日立つ「受口状口縁」甕C₁～C₄類、平底部が小さく口縁部が大きく開く高環F類の存在等から試案してみると築造時期は、これまで述べた中期のS X. 1～3とは異なり、弥生時代第Ⅴ様式後半頃に比定できると判断する。

また、パレススタイル壺D類にみられるごとく東海地方の影響下にあることが推察でき、この他にも「S字状口縁」甕、台付甕、高環D類の存在にも同様な傾向がうかがわれる。

S X. 5の出土土器は多量であるが、大きく3時期に分けることが可能である(第82図)。

(1期)

広口壺A₁(第51図3～6)・A₂(1・2)類で口縁部を垂下ないしは上下に肥厚させるもの、頸部が強化傾向にある長頸壺(第53図5～7)、「受口状口縁」形態を呈するがシャープさがなく「湖北的」とでも呼ぶべき甕(第55図1～7)及び鉢(第57図1・2)、大きく外反する口縁形態を残す高環F類(14～17)等の存在する時期で、第Ⅴ様式中頃に比定される。

(2期)

口縁部の肥厚の度合いの小くなった広口壺A₁(第51図9～12)、外面の装飾(刺突列点文・直線文)の簡素化・省略化が目立ち、口縁部の屈曲が上方へのび気味となる「受口状口縁」甕の変化、同形態の鉢、底部が小さく口縁部が大きく開く高環(第58図1・2)F類、受部と脚部との内面の縁の明確な器台B・C類等の存在があげられる。第Ⅴ様式後半頃に比定される。

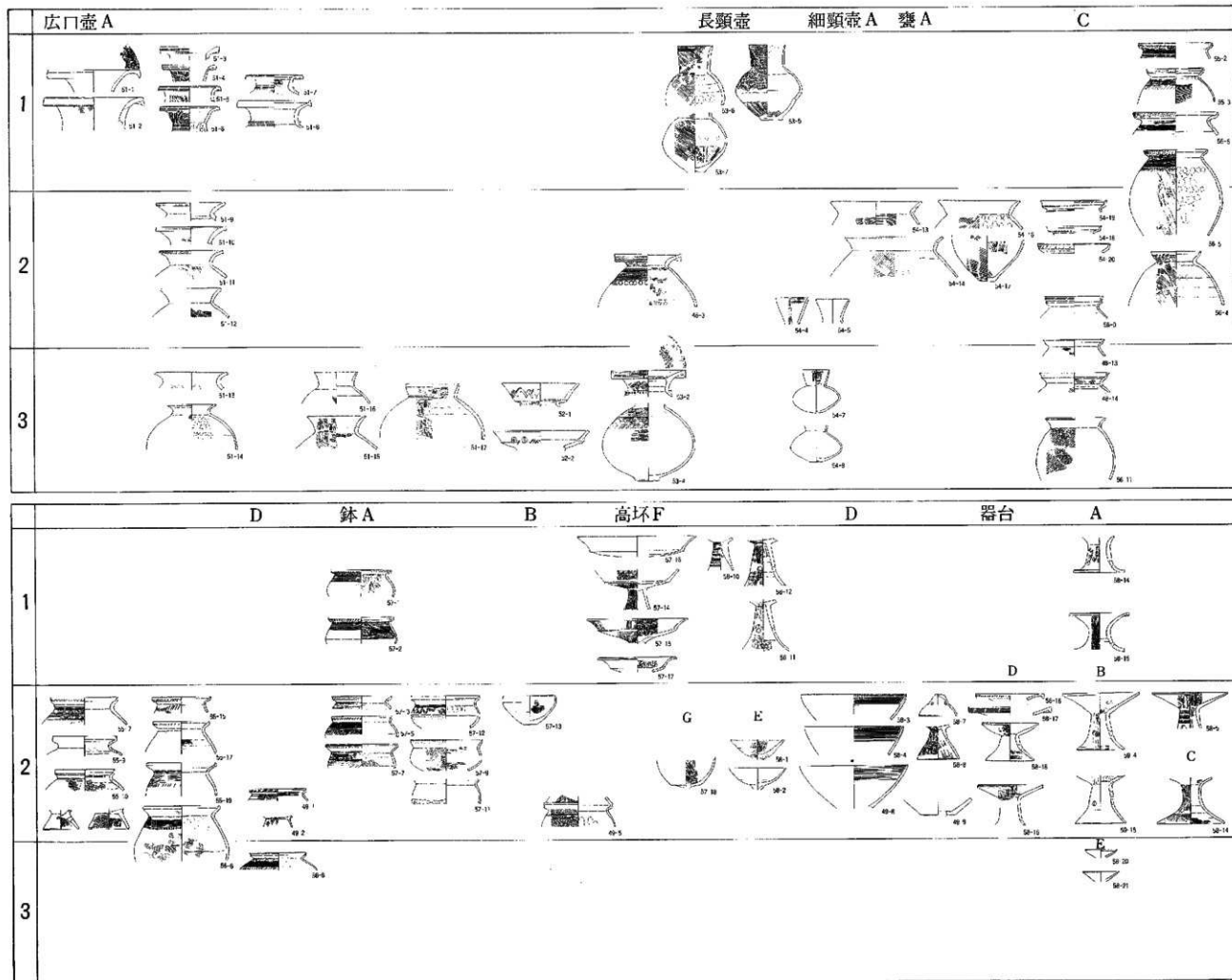
なお、先に述べたS X. 4出土土器はこの時期に相当する一群であると思われる。

(3期)

口縁部が短く外反するのみのA₂類(第51図13・14)、廣口壺(15～17)、二重口縁壺(第52図1・2)、加脂性に富むパレススタイル形壺(第53図1～4)、ソロバン玉形の体部に短い口縁部の付く細頸壺(第54図6～8)、球形の体部にわずかな稜を残すのみの口縁形態の甕C類、小型器台の存在等がある。近江的な存続性を失いつつあり、かわりに畿内色が浸透してきつつある時期で、いわゆる庄内式併行期に比定される。

S X. 5の時間的位置付けであるが、上層の遺物包含層の時期をこの3期のうち最も新しい(3期)庄内式併行期と単純に考えるならば、S X. 5は第Ⅴ様式中頃～後半に築造されたと判断される。

以上の時間的判断から方形周溝墓の築造順序をみると、まず、最初に弥生時代中期後半頃にS X. 1が築造され、間を置かずしてS X. 3ないしはS X. 2が続き、後期後半頃にS X. 4、5が隣接して築造されたと



第82図 法隆寺遺跡出土の弥生時代後期の土器群 (S X, 5出土土器を中心として)

考えられる。

(分布)

次に方形周溝墓の分布状況を孤塚遺跡の資料と共に見てみたい。

孤塚遺跡においては弥生時代後期頃にS X. 1、5～7が相前後して築造され、主軸方位もほぼ北東—南西方向にそろっている。S X. 1がやや規模的に優位性を示しているが、他は一辺が約10m前後の中規模の周溝墓群である。それぞれの周溝の共有関係は認められず、独立している。A・B区に立地するS X. 3は削平のため北周溝を残すのみであり、出土遺物も皆無で時期等不詳であるが、方位・規模からみてS X. 5～7の一群に属するものであったと思われる。

法勝寺遺跡では、明らかに弥生時代中期からS X. 1と3がほぼ同時存在した可能性が高い。主軸方位も北東—南西方向にそろい、規模は若干、S X. 1に優位性が認められる。また、出土土器よりS X. 2も同時期に存在したと思われるが、主軸方位を南北に向け、周溝のプランも四コーナーが切れており、前者とは異質である。

後期後半頃になるとS X. 5・4が築造される。特にS X. 5は規模も大きくそれまでの中期の周溝墓群を削平してその築造がなされたようである。

(2) 古墳

直径約16mの円墳で、墳丘は完全に削平をうけ周溝を残すのみの状態で現水田下より検出された。出土須恵器の坏身は立ち上がりが高く受部も丸味を帯びたもので陶色編年のⅡ—3段階に位置付けられる。

昨年度報告済みの孤塚古墳群(1～4号墳)との位置関係としては北約80mに立地する。古墳群のうち、直径約16mで陶色編年Ⅱ—3段階に位置付けられる2号墳と規模・築造時期が類似しており、同時存在の可能性が高い。ゆえに、この法勝寺地区で検出された円墳も古墳群中の一基として位置付けてよいであろう。

(3) ビット内出土の遺物

ビット内からの出土遺物は弥生土器・須恵器・土師器がある。

弥生土器は第62・63図に示されている土器であり、先に述べた方形周溝墓の時期、つまり弥生時代中期後半～後期後半頃までの時期に比定される。

遺構の性格を推しはかることのできる遺物はないが、方形周溝墓に本来伴っていたものか、それ以外の土壌墓等に作っていたものかの推察がなされる。

また、須恵器・土師器については、7世紀初め(S P. 223・224)、7世紀後半(S P. 142・255)、8世紀後半(S P. 164)、10世紀後半～11世紀(S P. 97)等の時期に位置付けられる遺物である。

(4) 竪穴住居跡について

竪穴住居跡はS H. 1～3の3棟が検出されたが、いずれも壁の残存状況が悪く数cmの掘り込みが確認されたにすぎない。特にS H. 1・2は方形周溝墓の周溝掘り込み作業時に कारणうじて検出できたほどである。

S H. 1・2についてはそれぞれ焼土が一部で確認できており、カマド等の設置を予想させる。

S H. 3の周溝内で弥生土器片が検出されたが、時期判定は難しく、S H. 1・2においてもほとんど出土土器がない状況で時期決定はできない。ただ、方形周溝墓との切り合い関係では、周溝を住居跡が切っている。

(5) 掘立柱建物について

法勝寺遺跡では19棟の掘立柱建物が検出されたが、その構成は2間×1間1棟(SB. 1)、2間×2間が3棟(2・9・17)、3間×1間1棟(11)、3間×2間が5棟(3・12・13・16・18)、4間×2間3棟(5・6・10)4間×3間1棟(8)、6間×4間が1棟(4)、その後4棟である。3間×2間が5棟と普遍的で、6間×4間のSB. 4は柱間が多いわりには一柱間の距離が短く、床面積も31.49㎡と広くない。床面積はSB. 6以外が20~40㎡で類似する。主軸方位は、N-37°-W(SB. 15)、N-12°-19°-W(5・6)、N-0°-8°-W(2・4・7・8・10・16・17)、N-6°-9°-E(1・11)、N-14°-21°-E(9・13・14・18・19)の5つに大別できる。

東柱を有するSB. 2・12・15~17は倉庫的な建物を想定できる。SB. 10・11はほぼ同一規模で、柱穴の切り合いがみられることから建てかえが予想される。SB. 4とSB. 10は主軸方位が一致し、近接しているが、柱穴に切り合いがみられ、同時期存在の可能性は少ない。

次に建造時期は、狐塚遺跡同様、決めてとなる遺物の出土が非常に少なく、存在しても小破片が多い。先に述べた様に周辺のピット内からの遺物は弥生土器の他、7世紀後半・8世紀後半・10世紀後半~11世紀のものであり、建物の主軸方位との関連から考えると狐塚遺跡と同様の集落変遷がたどれる。つまり、南北地割に近いN-0°-8°-WをとるSB. 2・4・7・8・10・12・16・17が7世紀後半ないしは8世紀後半頃に営まれ、他の建物はそれ以後の方格地割に規制された10世紀後半~11世紀に建造されたことがうかがい知れる。

また、後に述べる溝状遺構SD. 1~3の埋土からも10世紀後半~11世紀の遺物が出土しており、この溝に切られる建物が多いことから後者の時期に相前後して集落が広がっていたことが推測できる。

(6) 溝状遺構について

SD. 1・2は調査区を南北方向へひける溝状遺構で、SD. 2がSD. 1に切られている。溝内の出土遺物から両者の埋没時期を推しはかってみると、最も出土量の多い灰胎陶器は丸珠を帯び、断面二日月形の高台の付く坩A類、浅く扁平な低い高台の付く坩C類、口縁部がわずかに外反する皿類の要素が顕著であり、これらは、狐塚遺跡の落ち込み状遺構の上層の遺物と類似性があり同時期の産物と思われる。つまり、これ以降の遺物はみあたらないことから10世紀後半~11世紀の時期にはこのSD. 1・2の溝状遺構は埋没したものと思われる。

また、この両者に切られる長方形プランのSD. 3は、西側で両側の溝がくい違いをみせている。出土遺物はSD. 1・2と類似しており、同時期の遺構と考えられる。遺構の性格としては、建物を区別する溝という考え方があがる。19棟検出された掘立柱建物のうちこの区割内において主軸方位を等しくするものはSB. 6のみであるが、掘立柱建物以外の建物の存在、つまり礎石建ちの建物を想定することも可能であろう。また、西側の溝のくい違いも区割内への入り口と考えることもできる。

(7) 井戸について

推定直径0.6~0.7mの丸太材をくりぬき、4分割して枠としているSD. 1は、8世紀代の須恵器坏身を出土している。

枠の側面と底部は淡青灰色粘土でとりまかれており、本来の井戸の用途である湧水を確保する施設としての役割がそこなわれると思われる。また、掘り方の土質もレキ・砂が少なく、粘土質であり、湧水の少ない地点に思える。ゆえに、この施設は一時的に水をためて確保しておくための用途をもったものではなかったかと思われる。

6. ま と め

狐塚・法勝寺遺跡においては、およそ、弥生時代中期から12世紀代に至るまで集落が系統的ではあるが、営ま
れ続けていたことが判明した。ここで、両遺跡を中心とした集落の変遷をながめて、まとめたい。

I. 弥生時代中期から後期

弥生時代中期後半期（畿内第Ⅳ様式併行期）より一辺13～14mの方形周溝墓が、広範囲にわたり造営される。
これは法勝寺地区の東側の荒地地下からも昭和62年度の近江町教育委員会の実施した調査によって中期～後期の方
形周溝墓約40基が検出されていることから裏付けられる。この調査結果によると調査区西側を中心とした円形
状の広がり^{注29}を示して墓が分布しており、その中心が住居域であると考えるところのたびのバイパス調査区西側の荒
地のあたりがその住居の分布する地点であると考えられる。いずれにしても、中期後半から後期後半にかけて近
接地に大集落の存在を示唆している。

II. 古墳時代後期

6世紀前半から中頃にかけて、狐塚古墳群として古墳が順次築造される。帆立貝形ものがあり、墳輪を有す
るものがあるなど他の家族を同一墓域に含み込まない単一単位による群葬を形成しており、時期的にも、継体
天皇即位において重要な位置を占める息長氏の墳墓と考えられる息長古墳群（6世紀後半頃）に先行するもので
ある。^{注30}

III. 7世紀から8世紀後半

7世紀頃より水田耕作を生活基盤とし大集落が形成されはじめる。水田開発は南北地割を採用し、これに
規制されて集落も分布する。その集落は狐塚遺跡から法勝寺遺跡までの広がりを示すが、わずかな微高地を選ん
で形成されたと思われ、前段階までの墓域は削平をよぎなくされる。井戸等もこの時期の建物に付随するもので
あるが、竪穴住居跡はこの掘立柱建物の集落に先行するものと思われる。

この段階に形成された集落も8世紀後半以降、一度水田開発等に伴い廃絶をむかえる。この折、狐塚遺跡南端
で確認されている落ち込み部にこれまでの遺物が流入したことが確認できる。

IV. 10世紀後半から12世紀

再び、今度は方格地割による水田開発が実施され、集落の分布もこれに規制され、10世紀後半頃には新たな集
落が形成されるに至る。この集落も狐塚遺跡から法勝寺遺跡までの広範囲にわたって営まれたようである。

以上が、狐塚・法勝寺遺跡においての遺跡の広がりの概要であるが、今後、米年度刊行予定の奥松戸遺跡の調
査結果も含めて再検討の必要性を記してまとめにかえたい。

注

- (1) 田中勝弘 『狐塚遺跡他試掘調査報告書』 滋賀県教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会 1982. 3
- (2) 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』 滋賀県教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会1987
以下、「長浜バイパスⅣ」として表す。
- (3) 昭和62年度に近江町教育委員会によっては場整備事業に伴う発掘調査が実施され、この結果に基づいて現地説明会が行われた。その時の資料に基づく。
- (4) 前掲書①
- (5) 吉田秀則 『坂田郡近江町美松戸遺跡発掘調査抄報』『滋賀文化財だより』679 湖滋賀県文化財保護協会 1983
- (6) 熊バリノ・サーヴェイに樹種鑑定を依頼。
- (7) 『祭祀用木製品』については、湖滋賀県文化財保護協会技師 奈良俊哉氏の執筆による。
- (8) 成瀬正和『佐波理皿』『正倉院年報』第1号。昭和63年
- (9) 前掲書①
- (10) 田中勝弘 『残存条理と集落遺跡』『滋賀考古学論叢第2集』 滋賀考古学論叢刊行会 1985
田中勝弘 『西火打遺跡と条理開発の問題』 前掲書②
- (11) 横田洋三 『土師器Ⅲの分類と編年観』『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』(『平安京跡調査報告書 第11輯』) 古代学協会 1984
- (12) 前川 要 『熊投窯における灰粒集積生並最末期の諸様相』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』 1984
- (13) 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』 奈良国立文化財研究所 昭和49年
- (14) 西 弘海 『七世紀の土器の時期区分と型式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所 昭和53年
- (15) 前掲書⑫
- (16) 前掲書⑬
- (17) 曾我泰子 『弥生式土器(中期)』『瓜生堂遺跡 資料編』 瓜生堂遺跡調査会 1972
井藤暎子他 『畿内の弥生土器』『弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ』 1987
- (18) 『阿芥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について——2』『埋蔵文化財調査年報Ⅱ—昭和59年度—』 湖滋賀県教育サービスセンター 1985
- (19) 『鴨出遺跡』『国道8号線長浜バイパス関係遺跡調査報告書Ⅱ』 滋賀県教育委員会 1973
- (20) 『出町遺跡(3・4次調査)』『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 近江八幡市教育委員会 1987
- (21) 『陶色Ⅲ』 大阪府文化財調査報告第30輯 大阪府教育委員会 1976
- (22) 前掲書⑬
- (23) 田中勝弘 『狐塚古墳群の問題』 前掲書②

圖

版



長浜平野遠景（伊吹山より南を望む）



長浜平野遠景（伊吹山より北西を望む）



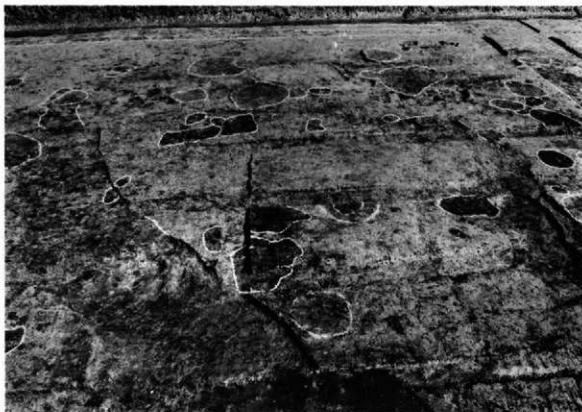
長浜平野遠景（南より、手前が調査区）



長浜平野遠景（北より、手前が調査区）



調査風景



遺構検出状況



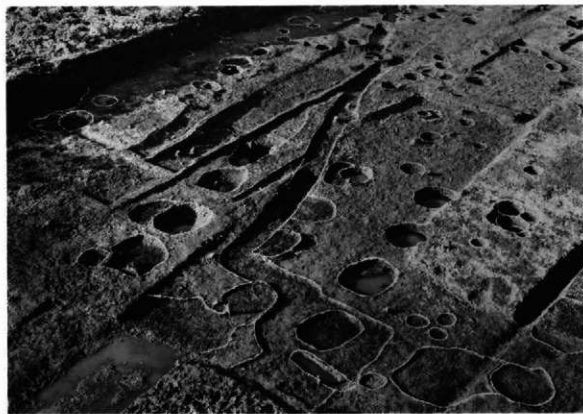
A区 東半部全景 (北より)



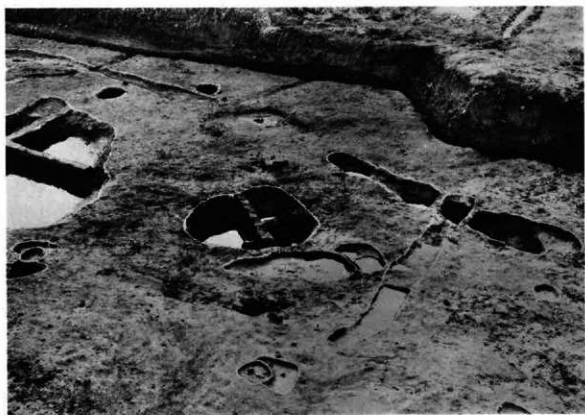
A区 北半部 (南西より)



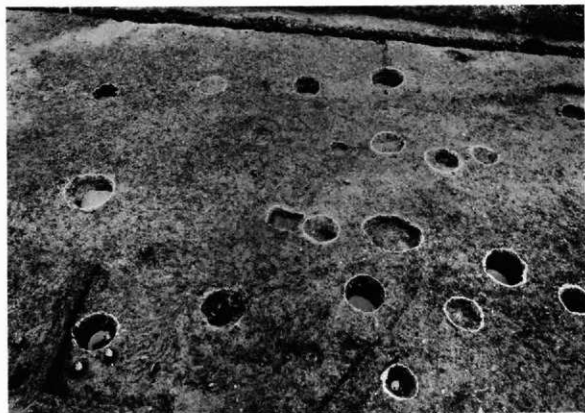
A区 西平部 (南より)



掘立柱建物 SB4



A区 北西部



獨立柱建物跡 SB2



掘立柱建物 SB3



S P94 遺物出土状況



A区 土壙S K10周辺



土壙S K10 (南より)



土壇 S K 10 遺物出土狀況



土壇 S K 10 遺物出土狀況



A区 中央部 (北より)



A区 土壇SK4 遺物出土状況



B区 東半部 (南より)



B区 東半部全景 (南より)



B区 東半部全景 (南東より)



B区 東半部 (南より)



B区 東半部SB6周辺 (東より)



掘立柱建物 SB6~8 (東より)



孤立柱建物 SB9 (北より)



孤立柱建物 SB8 (北より)



井戸 SE1 (北より)



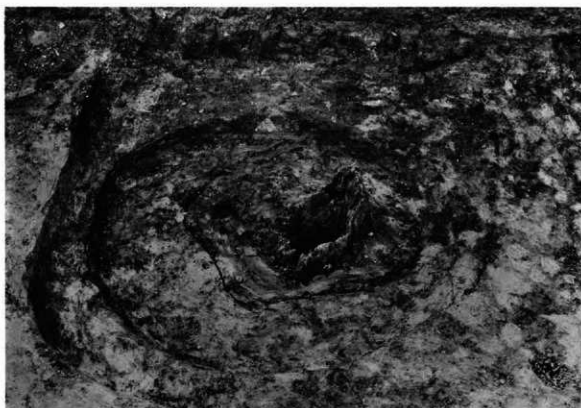
井戸 SE1 (北より)



井戸 SE1



井戸 SE1 枠内



SB9の柱痕



紡錘車出土状況



B区 西半部全景 (北より)



B区 西半部 (南より)



B区 西半部（東より）



掘立柱建物 S B11・12



獨立柱建物 SB13~15



獨立柱建物 SB5



掘立柱建物 SB11



礎板検出状況



B区 西半部全景 (南より、手前が落ち込み)



落ち込み遺物出土状況(1)



落ち込み土層断面 (南北方向)



落ち込み土層断面 (南北方向)



落ち込み遺物出土状況(2)



落ち込み遺物出土状況(3)



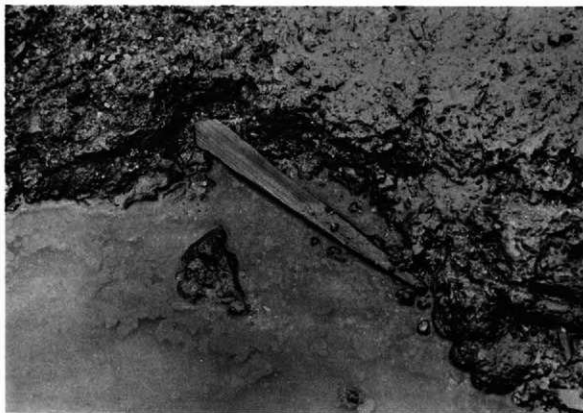
落ち込み遺物出土状況(4)



落ち込み遺物出土状況(5)



落ち込み 人形出土状況



落ち込み 索串出土状況



落ち込み 下駄出土状況



落ち込み 曲物出土状況



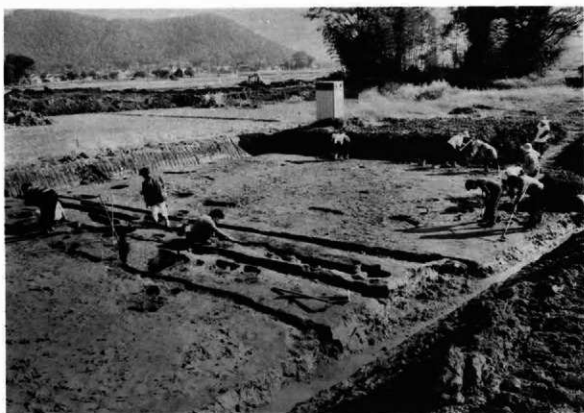
落ち込み 遺物出土状況(6)



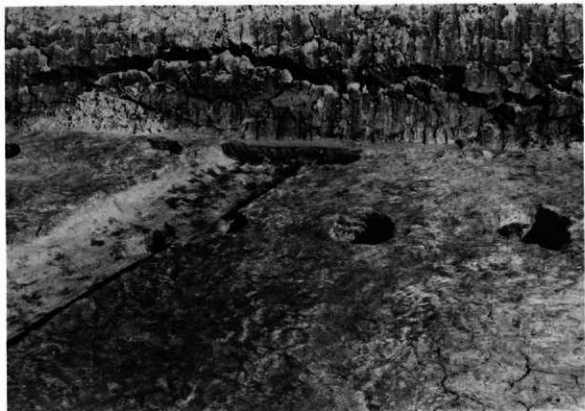
落ち込み全景(北より)



C区 東半部全景 (南より)



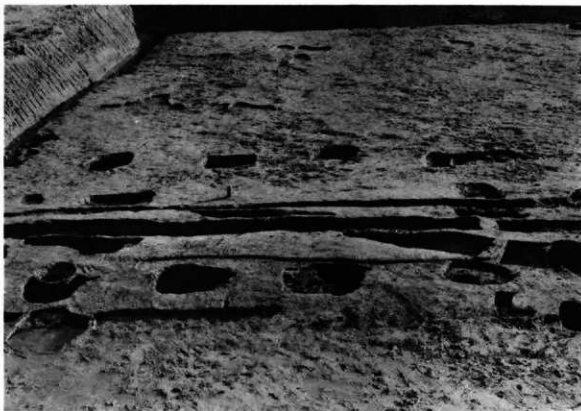
C区 調査風景 (透構検出)



C区 掘立柱建物 SB 2 (西より)



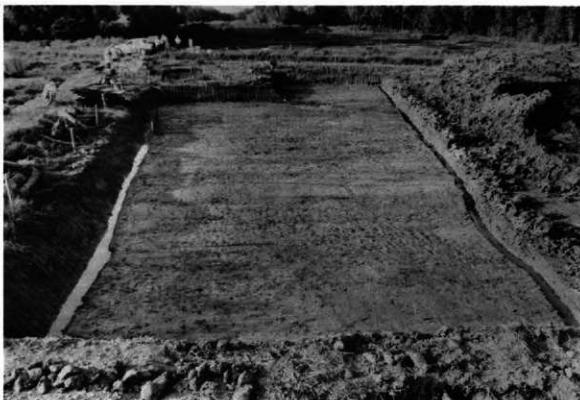
C区 掘立柱建物 SB 3 (西より)



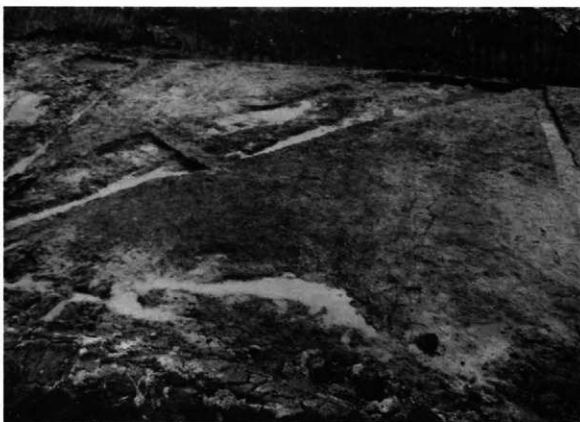
C区 掘立柱建物 SB1 (北より)



C区 掘立柱建物 SB1 (西より)



C区 西半部全景 (南より)



C区 北西部 SD1



C区 南西部



D区 土壇 SK2



18-5



18-22



18-21



18-9



18-33



18-30



18-27



18-23



18-8



18-10



18-3



落ち込み 出土土器 (須恵器)



19-10



19-7



19-13



19-11



19-14



19-18



19-19



19-26



20-24

落ち込み 出土土器 (須恵器)



落ち込み出土土器 (灰輪陶器)



落ち込み 出土土器 (土師器)



23-19



23-20



23-22



23-23



23-27



23-31



23-26



23-25



23-18



24-1

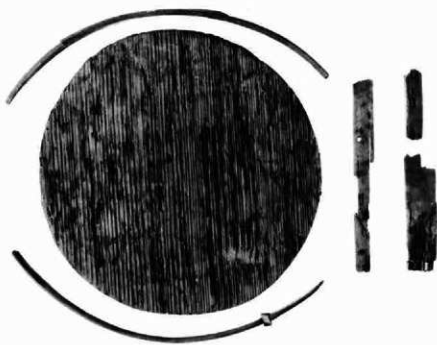


24-9





下 皿



曲 物



15-1



15-2



15-3



15-5



15-4



15-6



15-10



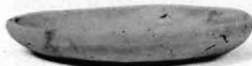
15-11



15-12



15-13



15-16



15-15



15-14



15-18



15-17



15-17

土壇等出土土器 (土師器)



15-20



15-14



15-16



15-23



15-27



15-32



15-31



15-28



15-33



15-37



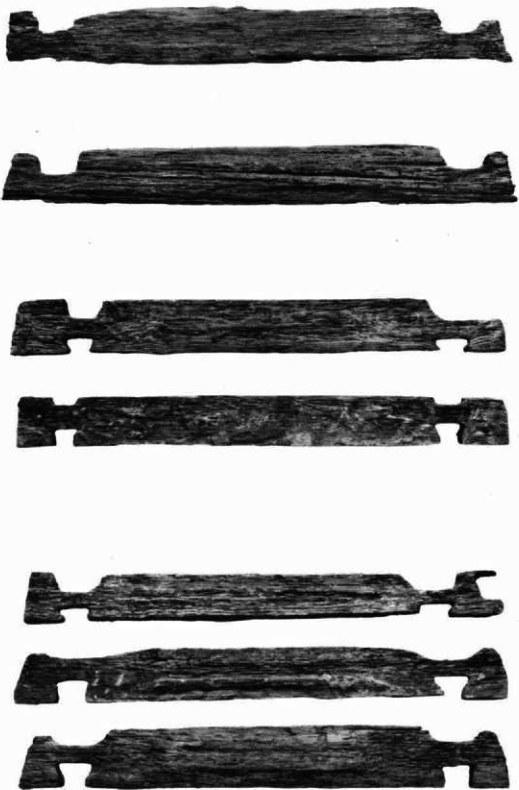
15-30



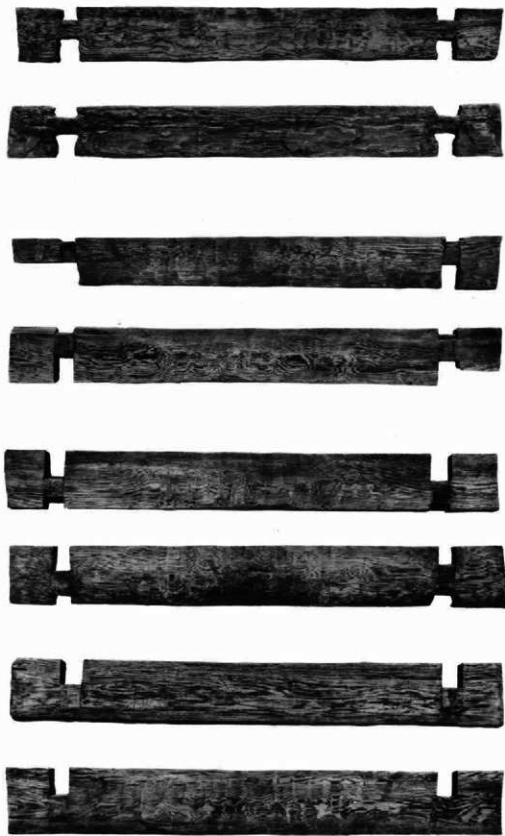
15-45



15-46



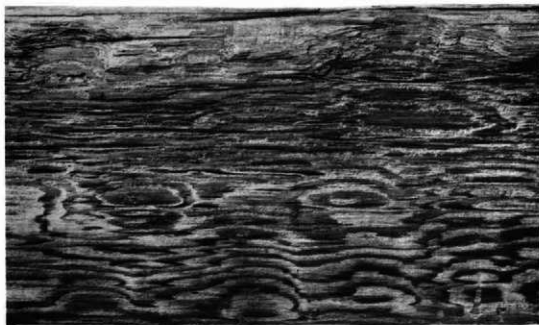
井戸棒 (SE1)



井戸枠 (SE1)



井戸枠



手斧痕



漆串



人形代



調査前近景 (南より)



調査前近景 (北より)



A区 全景 (南より)



B区 北半部全景 (南より)



B区 北半部 (北より)



B区 北半部中央 (北より)



B区 南半部全景（北より）



B区 東半部全景（北より）



B区 南半部全景 (南より)



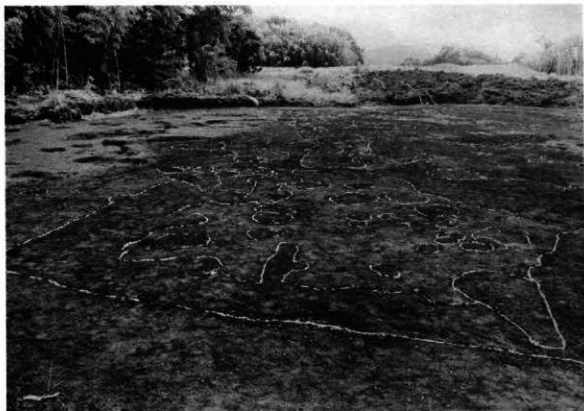
B区 西半部全景 (南より)



B区 北東部 (南より)



B区 北東部 (SD1・2)



雙穴住居 SH 1 検出状況



雙穴住居 SH 2 検出状況



方形周溝墓 SX1 (南より)



方形周溝墓 SX1 (南より)



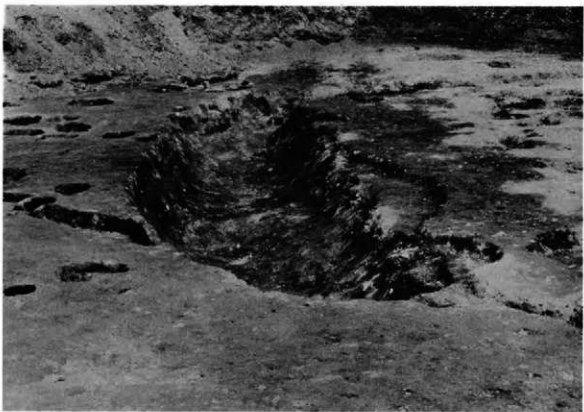
方形周溝墓 SX2 (西より)



方形周溝墓 SX3 (北西より)



方形周溝墓 SX3 (南東より)



方形周溝墓 SX3 (北周溝)



方形周溝墓 S X 5 遺物検出作業



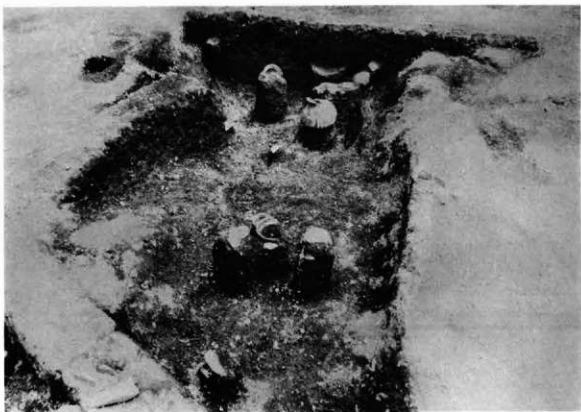
方形周溝墓 S X 5 (北より遺物取り上げ後)



方形周溝墓 SX1 北周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 SX1 東周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 1 東周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 1 北周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 SX1 東周溝墓内遺物出土狀況



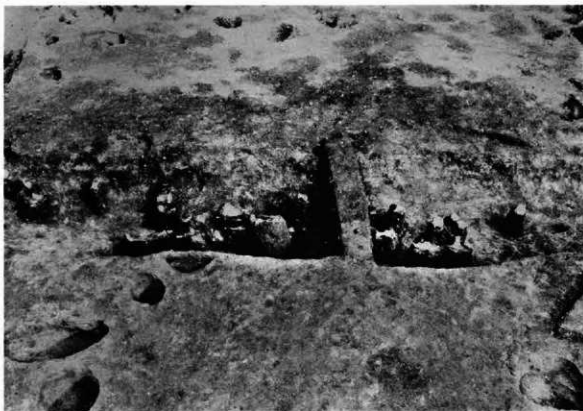
方形周溝墓 SX1 東周溝内遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 1 西周溝内遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 1 西周溝内遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 3 西周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 S X 3 西周溝內遺物出土狀況



方形周溝墓 SX3 南周溝



方形周溝墓 SX3 西周溝土層断面



方形周溝墓 S X 4 周溝内遺物出土状況(1)



方形周溝墓 S X 4 周溝内遺物出土状況(2)



方形周溝墓 S X 4 周溝内遺物出土状況(3)



方形周溝墓 S X 4 周溝内遺物出土状況(4)



方形周溝墓 S X 5 遺物出土狀況(1)



方形周溝墓 S X 5 遺物出土狀況(2)



方形周溝墓 SX 5 遺物出土状況(3)



方形周溝墓 SX 5 遺物出土状況(4)



方形周溝墓 S X 5 遺物出土狀況(5)



方形周溝墓 S X 5 遺物出土狀況(6)



ピット内遺物出土状況



ピット内遺物出土状況



円墳（北西より）



円墳（西西南より）



円墳（東側周濠）



円墳周濠土層断面



溝 SD1 (北側)



溝 SD1 (南側)



溝 SD1・2 (北より)



B区 南半部 (北西より)



獨立柱建物 SB4 (南西より)



獨立柱建物 SB4 (西より)



掘立柱建物 SB6 (西より)



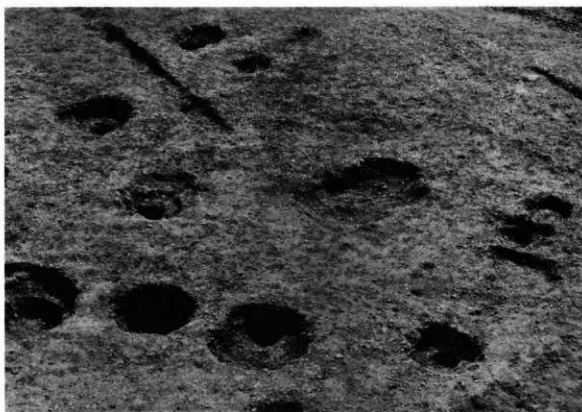
掘立柱建物 SB4 (西より)



掘立柱建物 SB8 (西より)



掘立柱建物 SB10・11 (南より)



掘立柱建物 SB14・19



土壇 SK1



土壇 SK2



土壇 SK3



井戸 SE1 (西より)



井戸 SE1 (西側井戸枠撤去後)



井戸 SE1 (東側より)



井戸 SE1 (東側より粘土除去後)



井戸 SE1 (井戸枠、撤去後)



井戸 SE1 枠内



現地説明会



調査終了後埋めもどし作業



石 杵



25-1

佐波風・鉄製品



25-2



25-4



25-3



25-5



56-20



34-3



78-10





33-7



33-5



33-5



35-4



36-7



34-2



37-8



35-10



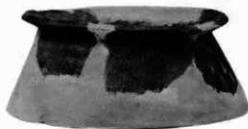
36-2



37-3



40-14



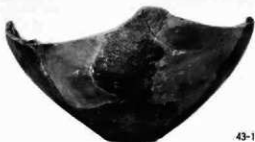
44-6



43-6



43-7



43-11



43-10



36-5



45-10



45-9



45-3



45-7



45-14



46-15



62-3

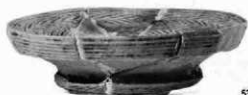
方形周溝釜 SX3・SX4等 出土土器



53-2



51-10



53-1



51-8



53-4



53-3



52-7



52-4



方形周溝墓 SX 5 出土土器(1)





方形周溝墓 SX5 出土土器(2)

51-10

51-11

51-17

54-4

51-14

51-15

51-12

54-7



方形周溝墓 SX 5 出土土器(3)



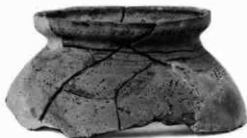
57-12



57-9



56-4



56-3



56-11



56-5



57-15



方形周溝墓 SX5 出土土器(4)





59-13



59-15



59-11



58-9



58-7



58-8



58-16

方形周溝墓 SX5 出土土器(5)



59-4



59-8



59-5



59-6



59-7



59-3



59-16

方形窟溝墓 SX 5 出土土器(6)



62-1



63-2



63-15



63-1



63-14



61-1



64-13



「受口状口縁」斐



「受口状口縁」群



「S字状口縁」甕



高杯

刊行年月	昭和63年3月
刊行物名	一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡 発掘調査報告書V —孤島遺跡・次勝寺遺跡
編集・発行	滋賀県教育委員会文化財保護課 大津市京田町4丁目1-1 電話 0775-24 1121 内線 2536 (財)滋賀県文化財保護協会 大津市瀬田南大宮町1732-2 電話 0775 48-9780・1
印刷所	株式会社 同朋舎 京都市下京区中堂寺鍵田町2